

# オイカイワタチ 第五卷(完・下)

――湧玉の祝事の儀式――  
――ワンダラーの使命は開始された！――

## 目次

はしがき..... 5

### 第一部 「形の世界」(霊界・幽界)の聖戦終わる

第一章 身につけた不必要なカルマを解く戦い..... 11

第二章 みそぎ..... 31

第三章 祝事いわいごとの儀式..... 73

第四章 十六皇子昇華の儀式..... 112

### 第二部 「形の世界」(現象界)の終末まきの期を迎える

第一章 万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)..... 135

第二章 万たるワンダラー、儀式に参加..... 151

―エクアドルの儀式―

―万たるワンダラーの目覚め―

―鏢球王国建設の儀式―

- 高天原の神々様と結びの儀式 —
- 新しい地球の神々様と結びの儀式 —
- 鏝球王国建設を全世界にこゝと開く儀式 —
- 古い地球の葬送大浄化の儀式 —

### 第三部 湧玉の祝事の儀式

- 第一章 湧玉の祝事の儀式……………227
- レタマヤの世の祝事の儀式 —

### 第四部 ワンダラーの使命は開始されたノ

- 第一章 古い地球の『終わる時』が来た……………253
- 第二章 あなた(全世界のワンダラー)の使命は開始されたノ……………264
- あとがき……………280

- 附・(1)講演記録(終末の期を迎えて、あなたの使命は開始されたノ)……………283
- (2)年表・オйкаイワタチの歩み(概説)……………369

## はしがき

ここに書籍「オйкаイワタチ」の第五卷(完下)を皆様にお届けするにあたり、第一卷(本書)を発売した昭和五〇年頃のことを思い起こした。文筆家ではない私(編著者)は、第一卷を刊行するにあたり、靈感のままに書かされたとは申せ、靈感を文章に表現する難しさに幾度手をやいたことか。これらをまとめて発行するまでの段取りの困難を体験して苦しんでいたその頃、次のことを夢の中で知らされた。(ある方は霊視されていた。)それは、書籍「オйкаイワタチ」を五冊刊行している光景であった。

しかし、文章を書くことに全く自信のない私は、この夢のことは考えたくもなかった。そして、このことに関しては極力敬遠し続けて来たのである。それでも、ある力に書かされて、「オйкаイワタチ」の第一卷(本書)に続き、第二、第三、第四卷(別冊(一)、(二)、(三)、完上)と発刊させられて来たが、いずれの巻も、私個人としてはその巻でもって終わることを念願し続けて来たのであった。

しかし、私の勝手な想像や我儘は許されなかった。天において最初に約束されていたとおり、最後と思われる第五冊目（第五巻）をここに発刊することになったのである。ここまでは世に出さねばならない天の仕組みがあったと今ここに判ったのである。私の目の暗さを天に深くお詫びする次第である。

『地球と人類は儀式によって救われます。』

この儀式は、「湧玉わくたまの儀式」、「祝事いわごとの儀式」を指し、この儀式は、「天の神様の儀式」、「宇宙の儀式」である。一九六〇年に「宇宙の偉大な方々」から教わり、以来二〇余年間にわたり、数々の「天の神様の儀式」、「宇宙の儀式」が行われて来た。

しかし、この数々の儀式も、一九八一年一月一日、近江神宮にて行われた『湧玉の祝事の儀式』をもってすべて終わりを告げたのである。ここに地球は新しい地球と変わり、地球と人類と一切のものは救われたのである。

よって、ここに古い地球の終わる時が来たのである。

この終わる時に、天の神様の素晴らしさ、天の神様の「愛」と「真」を語って、周りの多くの人達を助ける使命の方々がある。（それを天の神様は、「ワンダラー」と言われている。）ワンダラーとは、古い地球の終わる時、この使命を果たすために、他の遊星からはるばるや

って来て、この地球に生まれ変わっている魂の人達（地球人）である。この人達は世界中におられる。そして、この方々のこれからの働きにかんして、昨年（昭和五五年）一月二十五日、『全世界のワンダラーが立ち上がられました。手をつないで真の道を進みましょう。』とのテレパシーを受けている。

ここに、全世界のワンダラー達が惑星地球での使命を果たす時が来たのである。

書籍「オйкаイワタチ」全巻五冊の使命は、全世界のワンダラーにこの「真」を伝えることにあるのである。

ここに書籍「オйкаイワタチ」が、『全世界のワンダラーに捧げる書』とされている理由があるのである。

願わくば、この第五巻（完下）も、これまでの四冊と同じく真の靈感でお読み頂き、その真意を汲み取って頂きたいと切望する次第である。

第一部 「形の世界」(霊界・幽界)の聖戦終わる

## 第一章 身につけた不必要なカルマを解く戦い

「エクアドルの戦い」(完(上)227頁)が行われている頃(昭和53年8〜10月)に、ワンダラ I・H氏は、この戦いについて次のような霊夢を見せられていた。(以下、I・H氏の手紙より。)

——前文略——最近私(I・H氏)に起こった事柄をお話したいと思っています。それは、「エクアドルの戦い」が行われ、そして「古い地球の葬送の儀式」(完(上)236頁)の意義が私なりに理解出来たということです。

九月の初め頃、次のような夢を見ました。

私は凄絶な皆殺しが行われている戦場に行きました。巨大な悪の軍団(オリオン)が私達の仲間を見つけ次第有無をいわず殺し廻り、血に染まった死体がころがっていました。

そのため私達の仲間は殺されて数少なくなり、散り散りになりました。身をひそめて命を保っていたある人達は、突然おどろき出て、大声で自己の存在を示しました。すると機関銃の

一斉射撃を受け、その人々は血に染まって倒れました。

私は、こんな凄まじい光景はないと思い、またどうしてこのような目に会うのか、悪が勝つのを不思議に思いました。そのうちに私もいつの間にか捕えられて引きずり廻され、鉄砲で撃たれて赤い血に染まっている自分に気が付き、恐怖のあまり目を醒ましました。

どうしてこんな夢を見るのかと不思議に思っていました。古い地球の葬送の儀式」に参加してこれまでの経過のお話を承り、よく解りました。この霊夢は、「エクアドルの戦い」であつたと私は思いました。

続いて、一月二六日（古い地球の葬送の儀式の日）、早朝の霊夢。

ある人が私に「吐き出しなさい。」といわれました。すると急に私は嘔吐をもよおし、驚いたことに口から多量のごみあくたが出て来ました。まだまだ続いて出ます。そして喉に沢山の針が突き刺さつたような痛みと嘔吐の音でびっくりして目を醒ましました。

この夢で、儀式に参加させて頂くその意味がよく判りました。

十月の終わり頃より、なにかわからないけれど大きなこと（古い地球の葬送の儀式のこと）が終わらんとする、その静けさが、私の心の中にひしひしと感じられるような気がしていました。――以下略――

昭和五三年一月二一日、午前六時五分、〇〇夫人の夢。

ある所に地震が起こつて、近くを通っていた列車が転覆し、列車に乗っていた沢山の人達は死亡した。この時、天より声がした。

「これはいずれ起こる〇〇〇地震です。」

一月三〇日、未明、Mさんの霊夢。

空港を眼前にしているが、どうしても空港に入って飛行機に乗ることが出来ない。そこでMさんは、やむを得ず家に引き返すことになった。

その帰途、海岸に来た。海岸には沢山の人達がいて空を眺めている。空には真黒い異様な姿をしたもの（25頁参照）が丁度凧を上げたように浮かんでいた。

Mさんは、これまでも飛行場を目の前にしながらどうしても飛行機に乗れない夢を二、三回見ていたが、この日（三〇日）、初めてW氏にこのことを語った。

これを聞いた瞬間W氏は、この象徴的な霊夢で語られている事柄を靈感で理解した。と同時に、一九六〇年にAZ（サナンダ）様の語られた次のお言葉を思い起こした。

「ワンダラー達のカルマを終わり、乗ることをよく祈りなさい。」

ここでは、「乗る（円盤）ことをよく祈りなさい。」といわれている。ところがこの霊夢

では、どうしても飛行機（円盤の象徴）に乗ることができない。これはなにを意味しているのであろうか。

日本に生まれた古いワンダラーの「オイカイワチの使命」は終わった。だがこれまでの長い戦いと生活の中で知らぬ間に勝手に身につけた不必要なカルマが残っている。このカルマを真で解いて生まれ変わらねばならない。これが行われて初めて「乗ること」ができるのである。またこのカルマを真で解くことにより、ワンダラーは「真」を人類に示すのであり、これにより人類は目覚め、生まれ変わるのである。

「乗ることをよく祈りなさい。」とはワンダラーだけのことをいうのではない。全人類、全動物一切のものが生まれ変わって（円盤に）乗ることを真剣に祈りなさいと言われているのである。このようにW氏は瞬間的に理解し、また、身に持つ不必要なカルマを真で解く助け合いが必要であると思ったのである。（注）これまでも述べたとおり、カルマを解かねば生まれ変わらないのである。）

この日（三〇日）、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「事態はどんどん進んでいます。」

一月一日、夜半、Mさんは、神々様がお集まりになられて語り合われているお声を聞いた。このようなことは今回が初めてではなく、儀式が行われる前に、「神々の準備（儀式の準備のこと）が整いました。」という天からの声を聞いたり、神々様の語り合っておられるお声をよく聞いたりしていた。Mさんは、この時には、翌一月二日に京都の桃山御陵（明治天皇の御陵）の特別参拝のお招きを受けており、したがって、この参拝は儀式であり、神々様と共に儀式が行われるのであると判ったのである。

一九六〇年当時に、AZ（サナンダ）様は次のように言われていた。

「明治天皇のみたまは彦火火出見尊です。」

W氏はこのことを思い出し、この儀式は、神々様と共に彦火火出見尊に、「今回の地球での聖戦の経過と鏖球王国の完成、レタマヤの世の終わりを迎えることが出来ることになった報告を申し上げ、これまでのお導きに感謝を申し上げる儀式」であると判ったのであった。

二月二日、桃山御陵にて、特別参拝が許され、御陵の奥深くでお参り（儀式）が行われた。出席者は、近江神宮のY宮司、京都のT翁、大津のY画伯夫妻とK氏、福知山のT女史、W氏、Mさんであった。

この日は早朝から雨であったが、儀式の少し前には上がり、儀式の時には太陽が輝き始め

た。清めの雨であったと皆は讃嘆し、感謝したのであった。

一二月一五日、未明、Mさんの霊夢。

有珠山を中心に北海道に火山の大爆発が起こった。

火と燃える溶岩が各所に流れている。その溶岩の上を六、七才の子供達が歩いて麓へ降りて来る。これを見たMさんが、「熱いから火のない所を歩いて来なさい。」と言うと、子供達は、「少しも熱くない。」といいながら、火と化した溶岩の上をピョンピョンと跳ぶようにして降りて来るのであった。

麓にはなにもなく、ただ一軒の素朴な駄菓子屋があるのみであった。その駄菓子屋の小父さんは飴を一粒ずつ子供達に渡した。子供達は飴を口の中に入れて楽しんでそうにニコニコとしている。ここでMさんは目を醒ました。(この象徴的霊夢には、なにか深い意味が秘められていると思われなければならない。)

一二月三〇日、早朝、I・H氏の霊夢。(手紙のまま)

——前文略——私(I・H氏)は、先日「オйкаイワタチの使命が終わった。」ことを知らされていましたが、今朝、これを理解出来るような夢を見ましたのでお知らせ致します。

私はある火葬場で掃除をしていました。初めは刑務所の人達が手伝いに来ていましたが、

いつの間にか見当らなくなり、私一人で広い火葬場を掃除していました。私は、どうして一人でこの広い火葬場の掃除をしなくてはならないのかと不思議に思うと同時に腹立しくなりました。

しかし、どういふものかこの掃除は私一人で完了しなくてはならないのだという考えが出て来て、一生懸命に掃除に励みました。とはいえ、その火葬場には死体を燃やした灰がうず高く積っていて、掃くたびに異様な臭いをたてて舞い上がり、呼吸も苦しく、それは大変なものでした。

仕事は遅々として捗りませんでした。しかし、これは仕上げてしまわなくてはならないという使命感が湧き上がってきて、それが次第に喜びの心となって来たので、すみずみまで骨灰のないように箒で入念に掃除をしました。ようやく広い火葬場の掃除が終わり、ホッとしていると、電話がかかりました。

電話は刑務所長さんからで、手伝いに行こうということでした。私が、完了したのもうよろしいと答えますと、その所長さんは大変感謝されまして、懇意な感謝の言葉をいただきました。私は、なぜ刑務所長さんから感謝の電話を頂くのかと不思議に思いました。ここで目が醒めたのです。

私はこの夢を見て深く考えさせられました。火葬場とは「古い地球の葬送」を意味し、火

葬場の掃除はオイカイワタチの使命を表わします。したがって、この夢は、古い地球の掃除の役目が終わったことを意味していると知ったのです。「オイカイワタチの使命が終わった」というお手紙の意味をはっきりとこの夢で知り得たことに感謝しています。——以下略——。

註 この霊夢においては、深い意味が象徴的表現をもって語られている。

古い地球は、サラス入悲しみの遊星、牢獄の遊星Vという。刑務所長とは、古い地球を今日まで守って下さった責任者の方入神様Vを象徴していると考えられるのである。

ただ、ここでひとつ注意を促しておかねばならない。つまり、最後の聖戦である「現象の世界の世の終わりの戦い」におけるワンダラーの使命は、まだ終わっていないのである。

昭和五四年一月一日、Mさんの霊夢。

Mさんは、巨大な養鶏場を経営している。周りにも沢山の養鶏場があったが、それらはほとんど潰れてゆく。しかし、Mさんの養鶏場だけは栄えているのであった。

にもかかわらず、Mさんはこの養鶏場をやめようと思った。というのは、もし潰れた時には鶏は死んでしまうから可哀相である。だから早めにやめた方が良く考えたのであった。そこで、Mさんは、「私はこの養鶏場をやめたいと思います。」といった。すると天より

次のお言葉が語られたのである。

「あなたがやめれば、やめた瞬間からこの養鶏場の鶏は一羽残らず死滅するのです。」  
そこでMさんは次のように答えた。

「私は円盤に乗って帰りますので、いずれこの鶏達も死ぬことになり可哀相です。」  
するとまた天より声が出た。

「あなたが円盤に乗る時には、この鶏達も全部円盤に乗りますから心配はいりません。」  
ここでMさんはこの夢から目を醒まし、この象徴的な啓示の深い意味について考えさせられたのである。

一月三日、未明、Mさんの霊夢。

W氏は、天のあるお方と語り合っている。W氏は、そのお方に次のようにお聞きした。

「会議をした方が良いと思いますが、しても良いでしょうか。」

すると、そのお方は、待っておられたように……。

「それは、なさるのが良いでしょう。」

一月四日、S氏、T氏、W氏が集まり、来る一月一四日に次の会合（儀式）を行うことに

決定した。

「古いワンダラーの個々に身につけた不必要なカルマを真で解く儀式」

一月五日、早朝、W夫人の夢。

天より声がして、「このう、どんを喰<sup>た</sup>べなさい」と夫人にいわれた。しかしそのう、どんには切れ目がなく、喉につかえ、苦しくて入って行かないので困ってしまった。そこで夫人は、「このう、どんは切れ目がなく、余りに長いので、これ以上は苦しくて入って行きません。」という、そのお方は次のように語られた。

「今年はこのように切れ目がなく、極めて厳しい年です。貴女にとっても嶮<sup>げ</sup>しい年です。」

一月六日、夜十一時、Mさんは次のような天の声を聞いた。

「“七<sup>なな</sup>”が分れ目です。」

註 七<sup>なな</sup>の数が今後のことに意味があるのか、また、今年の七月のことを意

味するのであろうか。いずれ判る時が来るに違いない。

一月九日、早朝、Mさんの霊夢。

以前エクアドルへ出発する前々日に勢揃いして見送って下さった神々様が、今日もお揃いでお集まりになられている。神々様はみな真白な衣をめされていたが、その中に近江神宮のY宮司がおられ、一さわ美しい衣を着ておられた。そして、Y宮司は次のように言われたのである。

「あなたに大切なカギが渡してあります。そのカギを使って一つずつ扉を開くのです。」これを聞いたMさんは、この意味について次のように理解したのであった。

「その時、その時、必要な靈感、テレパシーを受けて、一つ一つ確実にこれからのお役を果たして行くのである。」

続いてMさんは、次の霊夢を見た。

Mさんの母親が、二才くらいの子供を連れて訪れて来た。初めは弟の子供かと思ったが、違っていた。そこで顔をしっかりと見直すと、なんとも美しく気高い、天使のような子供（正に神の子と直感した。）である。

母は、「この子供を育ててほしい。」といったが、Mさんは、私は会社に勤めているので育てることは出来ないかと断わった。すると母は、「私が助けるから育てなさい。」と命令されるのであった。

註 新しく誕生した地球についてのある深い意味を、このような象徴的な

一月二日、午前六時一五分、W夫人の霊夢。

それは、動物達の凄まじい闘争の光景であった。犬とライオンが物凄い格闘をしている。すると天より声がした。

「動物の世界にもカルマがあるのです。」

やがて、血を流しながら争っていた動物達は、仲良くし始めた。カルマが解けると、このように動物達の争いもなくなり、仲良くなるのであると判ったのである。

註 人間の世界もこれと同じである。ただ人間の世界のカルマの方が動物達の世界のカルマより遥かに大きいものであることはお判り頂けよう。

一月四日、ワンダラー二十数名集まり、次の儀式が行われた。

「古いワンダラーの個人個人が身につけた不必要なカルマを真で解く儀式」

まずW氏が、この儀式について次のように語った。

去る一月二六日、「古い地球の葬送の儀式」が行われたことにより、「オイカイワタチの使命」は終わった。しかし、古いワンダラーの個人個人がこれまでの長い戦いと生活の中

で知らず知らずに勝手に身につけた不必要なカルマがまだ残っている。(ここで、W氏自身が身につけた不必要なカルマの一例を具体的に挙げて説明した。)

このようなカルマは、いかに苦しくとも心と意識と肉体で判って全部を出しつくし、真で解いて生まれ変わらねばならないのである。古いワンダラーは、カルマを「真」で解く真を人類に示すのである。これがなされて初めて人類は生まれ変わることが出来る。(ワンダラーは地球に対して最後まで責任があり、ワンダラーとしての使命はまだ終わってはいないのである。ワンダラーは最後の最後まで戦うのである。)

これによって初めて「乗ることが出来る」のである。「よく祈りなさい」とはカルマを真で解いて初めて「よく祈る」ことができるという意味なのである。

このあと全員でカルマについて語り合い、最後に次の祈りが行われて儀式は終わった。祈り。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様ありがとうございます。

私の身に持つ不必要なカルマを全部出しつくして一片も残すことなく真で解けますように、無事に乗れますように、お守り、お導き下さいますようお願い申し上げます。

他の遊星から来られましたすべての人々が、カルマを真で解かれまして無事に乗れますようにお守り、お導き下さいますようお願い申し上げます。

全人類、全動物、一切のすべてのもののカルマが解けて、無事に元の地（鏢球王国）へ帰れますようお守り、お導き下さいますようお願い申し上げます。

（注）この祈りは、カルマが真で解けるまで各自で続けられるものである。）

この儀式に参加したI・H氏の、翌一五日付の手紙。

私（I・H氏）は、「ワンダラー達のカルマを終わり、乗ることをよく祈りなさい。」というこの言葉について理解することができず困っていました。しかし、昨一月一四日の会合に出席させて頂いた結果、この意味を知り喜んでいきます。

誠に恐縮ですが、次のような話をするをお許し下さい。

一四日の会合に出席させて頂く前夜、「明日開かれる会合の心の準備をさせて下さい。」と神様にお願ひして就寝しました。すると次のような夢を見ました。

——祝いの会合に出席するため、ある広い会場に行きました。すでに多くの人達が出席されていましたが、少々様子が変でしたので、「祝いの会合はどうなりましたか。」と聞くと、「その前に葬儀があります。」といわれました。

どうして葬儀をしなくてはならないのかと不思議に思い前をよく見ると、細長い柩ひつぎが安置してありました。お坊さんが読経を始めました。暫くして葬儀が終わり人々が柩を持ち上げると、底が抜けて死体が飛び出して来ました。それは頭に醜い吹出物が盛り上がった大男の

異様な死骸でした。ところが、死んでいる筈の大男がどうしたのか身体を持ち上げて動き出しました。人々は驚いて元の柩の中に納めようとしたのですが、あばれて手に負えません。しまいには死体の口から怨みの言葉が発せられる始末でした。どうしたものかと思案していると、お坊さんが金色にとぎすまされた鋭い短剣でとどめを刺すことになり、人々は大男を押えつけ、お坊さんが渾身の力で喉のど元めがけて短剣を突き刺しました。大男の死骸は物凄い形相と大きなうめき声を発してのたうち廻り、一時はどうなることかと思われましたが、突然大男の姿は一瞬に消え、真黒い異様な形した風のような姿（13頁参照）に変わり、天空めがけて遠くの彼方に消え去りました。物凄い修羅場に啞然としていますと、会場の人々は、「さあ祝いの会合です。」といい、手早く祝いの会合の席が作られ、会合が開かれました。ここで夢から目を醒ましました。

このような夢を見ても、私にはなんの意味かさっぱり判りませんでした。

その大男は「オリオン」かとも思いましたが、どうも違うように思われます。しかし、昨一四日の会合の帰り道にこの意味が判りました。

その大男は、古いワンダラーの個々に持つ不必要なカルマの姿であると思いました。カルマは生きものだ。死んだ筈でもその影が生きている程に根強く執念深いものであることがこの夢から判ったのです。そして昨一四日の会合は、死んだ筈のカルマに最後のとどめを刺す

儀式であったと考えます。

一月二二日、午前五時三五分、W夫人の夢。

内容は明確に憶えていないが、次のことだけは今も記憶に残っている。

“世の中が目茶苦茶になり、大混乱に陥って大さわぎしている。”

一月二四日、午前五時三八分、W夫人の夢。

大洪水の夢である。人々は皆避難を始めたが、しかしまたたく間に陸地は海となっていた。W夫人は数人の人達とある船着場にいたが、そこへ一匹の猿がやって来て、「私は使いの者です。間もなくこも水が増して来ます。」といった。

夫人は海の底を見た。海の底には真赤な火の色がある。夫人はその猿に聞いた。「あの火はなんですか。」その猿は答えた。

「あれは、やがて海底火山の爆発が起こるところです。あそこに舟が用意してありますから、あの舟を一気に押し出して下さい。私が案内します。」

そして、私達を乗せて出ていった。暫くするとその海底火山が爆発し、今までの海が陸地となり、陸地は海となった。夫人達はこの様子を遥か遠くから見ているのである。

一月二六日、未明、Mさんの夢。

Y画伯が童女のような若々しい姿で、手に「オйкаイワタチ」完(上)を持参し、傍に二人の老女を従えて来られた。そして次のようにW氏にお礼を申し述べられた。

「三種の神器について、オйкаイワタチ完(上)において、ここまで良く判るように書いて頂き、かつこの真意を判るよう導いて下さりありがとうございます。」

二月四日、午前三時四分、〇〇夫人の夢。

〇〇のどこかの活火山が大爆発を起こした。すると天より声がした。

「〇〇の滅亡です。」

夫人は天に問うた。「〇〇の滅亡?」

すると答があった。

「滅亡です。」

これと同時に〇〇に戦争が起って焼夷弾がどんどん投下され、〇〇中が完全に燃えつきってしまったのであった。

二月六日、午前二時一三分、W夫人の霊夢。

夫人は伊勢神宮の鳥居の中（神域）にいた。その時、神様が次のようにいわれた。

「境内を綺麗にするのです。」

そこで、夫人は神宮の中を綺麗に掃き清めたのであった。ここで夫人は目を醒ました。昨日（五日）、W氏とMさんは来る一〇日に伊勢神宮にて儀式を行うことに決定した。この夢により、神々は神域を清めてこの儀式をお待ちになられているのであると判ったのであった。

この日（六日）、未明、Mさんの夢。

たくさんの過去の知人が夢の中に出て来た。皆それぞれが各自の生活を行っている。ところが、その場面の全部が暗い所なのである。どうしてこのように暗い場面ばかり見せられるのであろうかと心で思った時、天より声がした。

「これは古い過去の世です。今は、既に世が変わっております。あなたはその世変わりした新しい世に暮らしています。」

二月七日、午前六時頃、Mさんは天から次のテレパシーを受けた。

「葬送の儀式も終わりました。」

「いろいろと終わりました。」

「心の準備をして下さい。」

二月九日、午前六時一分、W夫人は次のテレパシーを受けた。

「テレビを見なさい。」

テレビは、伊勢神宮の外宮にある曲玉の池についての放映をしていた。

この時、夫人は、このことは明日一〇日、W氏とMさんが伊勢神宮にて行う儀式に関係していると思ったのである。

二月一〇日、W氏とMさんは、伊勢神宮において次の儀式を行った。

「天照大御神様にご報告の儀式」

祈り。

天の神様、サナダ様、神々様ありがとうございます。

天照大御神様ありがとうございます。

私達は、本日ここに、天の神様のお導きにより参りました。

ここに、天照大御神様にご報告申し上げます。

古い地球は終わりました。新しい地球、鏗球王国はここに成就し、鏗球王国は天の神様に、天照大御神様に、そしてその御天孫に奉還されました。

新しい地球、鏗球王国は、天孫日嗣の皇子明仁殿下の統べたもう地であります。

去る一月二六日、「古い地球の葬送の儀式」が行われました。ここに地球はレタマヤの世の終わりを迎えることが出来ることになりました。これを厚くお礼申し上げます。ここに新しい地球を現わして下さいますようお願い申し上げます。

ここに至りましたこれまでの永い永い間のお守りとお導き、誠にありがとうございました。新しい地球を、新しい世を、全人類、全動物、一切のすべてのものを、これからもお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

## 第二章 みそぎ

二月一四日、かねてから靈感で感じていた「富士山の湧玉の池にての最後の儀式」を、来る二月二五日に行うことに決定した。

しかしこの時は、「富士山と湧玉の池とのお別れ」という程度にしか、この儀式の目的は判らなかつたのである。ところが日時が決定されたことにより、この儀式の目的、意味が、靈感、啓示などで次第に判って来た。

この頃、Mさんは、富士山の上部が爆発で吹き飛んでしまつて普通の山に変化してしまい、湧玉の池も普通の地になつてしまつた霊夢を見せられていた。

二月一六日、午前四時、Mさんは次のような天の声を聞いた。

「○○○○はなくなつた。」

二月一八日、W夫人は、床につく前に、「来る二月二五日、富士山の湧玉の池にて行われ

る儀式がつつがなく出来ますように……。」と天に祈った。

翌日の未明（一九日、午前五時三五分）、天より次のお言葉を聞いた。

「古い地球にお祝いをするのです。」

二月二五日、富士山の湧玉の池にワンダラー二十数名集まり、次の儀式が行われた。

「去り行く古い地球（湧玉の池）を祝う儀式」

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

古い地球の中心であります富士山の湧玉の池に私達ワンダラー集いまして、去り行く古い地球を、去り行く富士山と湧玉の池を祝う感謝とお礼の言葉を捧げます。

地球を、全世界、全人類、全動物、全草木、一切すべてのものを、今日まで永い永い間、保ち、守り、お導き下さいましたこと、ありがとうございます。

このお蔭で、ここに新しい地球、神の国鏗球王国は誕生したのであります。よって、去る一月二六日、「古い地球の葬送の儀式」が取り行われました。

去り行く古い地球よ！永い永い間ありがとうございます。ここに感謝とお祝いを申し上げてお別れ致します。

古い地球の中心、富士山と湧玉の池よ！永い永い間ありがとうございます。感謝とお祝いを申し上げてお別れ致します。

どうか「形の世界」において、新しい地球を、新しい富士山と湧玉の地を現わして下さいますようお願い申し上げます。

ここに古い地球と、古い地球の中心、富士山と湧玉の池にお別れを申し上げ、深い感謝とお礼を申し上げます、「去り行く古い地球（湧玉の池）を祝う儀式」と致します。

Mさんは、この祈りが始まった直後、「天の神様」が天降られたという実感を全身心で受けた。その時には全身が硬直状態となったのである。

W氏とMさんは今日の湧玉の池の光景を見て、もうここのお役は完全に終わった。古い地球の中心、湧玉の地は去って行った。と強く思った。

ここ湧玉の池には昔の生気はなく、どこか影を思わせ、うつろで陽炎かげろうのように見える。祠の中の湧き出る神水も僅かで弱々しく、昔の面影は全く見られない。湧玉の池の水位も低くなり、永年のご使命が完全に終えられていることを目の当りに見て、感謝の涙に咽んだのであった。

この日(二五日)、W夫人は、湧玉の池にて次のような靈感を受けた。

「北海道の有珠山へ行かねばならない。」

しかし、この靈感は余りにも唐突であり、目的も判らないので、誰にも語らずに納めてしまった。

ところが、湧玉の池での儀式を終えて帰りの電車の中で、突然Mさんが、「三人(W夫妻とMさん)で有珠山に行きましょう。」と語るのであった。

ワンダラーI・H氏より、富士山の湧玉の池の儀式について、次のような手紙が寄せられた。

——前文略——去る二月二五日に、「去り行く古い地球(湧玉の池)を祝う儀式」に参加出来ましたことに感謝いたします。

余命いくばくもない凋落した湧玉の池を目の当りに見て、深い感激と衝動をおぼえました。今まで私達を育てて来た年老いた母のような気がしました。ほんとうに有難うございました。深い感謝で湧玉の池にお別れました。ただ懐かしさの情で一杯でした。

それと同時に、新しい力強い湧玉の池が、新しい地で、永遠につきることのない力で湧き出ている光景を確信いたしました。

もうそこまで「形の世界」が来ていることに驚き、偉大な天の神様、サナンダ様、神々様に感謝を捧げ、鏝球玉国の建設を讚美いたします。

さて、二月の中旬頃の夢ですが、去る二月二五日の湧玉の池での儀式に関連があるように思われますので報告させて頂きます。

広々とした海岸でした。空は夜明け前のように暗くなっていました。ただ東の方だけが異様に真赤に焼けていました。西の空も明るくなっていましたが東の空のように真赤に焼けてはおらず、その中間は唯々闇が覆っていました。海は白く輝き、海岸には大勢のワンダラーが勢揃いをしていました。私(I・H氏)もその中におり、なにか新しい夜明けかと思っていました。

そのうちに、私の心の中に、「さあ!この海の水の中に入るのだ。」という意識を感じました。勢揃いしているワンダラーも全員その意識を受けていることがわかりました。

その瞬間、新しい力と身の引きしまる感動をおぼえました。

ここでこの夢から目を醒ましました。

註 この霊夢は、ワンダラー達のみそぎの光景を象徴的に示されたものであることが後日に至り判ったのである。

W夫人も、去る二月一日、これとよく似た夢を見ていた。  
夫人は胸のあたりまで水につかり、水を口にくみながら合掌してみそぎをしている。祠のような建物の周りを、「ありがとうございます」と感謝しながら幾回も廻っている。

二月二十六日、午前六時三〇分、W夫人の霊夢。

夫人は刑務所（ある象徴）の人達を沢山連れて新しい世界に入って行った。すると一人の男性が夫人を迎えに出て来られて次のようにいわれた。

「古い地球は終わりました。私は宇宙人です。この方達をここにおいて、貴女は帰るので。さようならをするのです。」

夫人は、その刑務所にいた沢山の人達と別れをつげた。お互いに感謝の涙を流し、嗚咽しながら別れを惜み、さようならをした。その時、天より声が出た。

「八洲やしまです。八洲やしまです。大八洲おおやしまです。」

二月二十六日、W氏は「有珠山」行きを決定し、儀式の日時を三月一〇日と定めた。

二月二十六日、W夫人は、決定された「有珠山での儀式」が正しく出来ますようにと祈りな

がら床についた。

翌二七日未明（午前六時一八分）、天より男性の声が出た。

「S子さんおきなさい。キウスキウスです。キウスキウスです。」

午前一一時頃、W夫人は、天空に雲で北海道の地図が画かれたのを目撃した。

この日（二七日）、昼頃、Mさんは、次の靈感を受けた。

「キウスキウスは氣き曰い、基き曰い。」

「本の氣きを生み出した「氣き曰い」、基き曰い」、即ち有珠山と大臼山神社を示されたのであると判るのであった。

続いて、Mさんは、天より厳しいお声で次のテレパシーを受けた。

「底割れそこわれ」

この底割れのテレパシーを受けた瞬間、Mさんの頭にはある重いものがのしかかり、強い霊的衝撃を受けたのであった。

三月三日、午前五時九分、W夫人の霊夢。

夫人はどこかの神社にお詣りをしていた。この時、有珠山と関係があると思った。すると、

そのお社より声が出た。

「七転び八起きです。塩釜です。塩椎です。」

七転びとは大変化による凄まじい有様を意味し、この大浄化、大変化の中にあって八起きするのである。雄々しく八起きして立ち上がる、即ち、「新しい地球」が「形の世界」に出現することを示されたのである。

銚 塩釜とは「水火交ム」また「水火津霊」であって、塩釜神社は塩椎

大神が祭神である。日本書記には塩椎神、塩椎翁として現われている。

塩椎神は、塩土神とも水火土神とも書く。

そして潮筒之男神（上筒、中筒、底筒之男神の三柱の神々の一体と

しての総称）であり、古事記にある住吉大神と同一神である。

住吉大神、即ち塩椎神は、地球を大浄化される神様である。

三月四日、午前七時、W夫人の夢。

天より声が出た。「大浄化です。」その時、物凄い地鳴りがして自分の家が大きくゆれ始めた。

この地震は今だかつてない程の、極めて大きなものであった。

三月七日、夜、Mさんは多くの神々様がお互いに語り合われているお声を聞いた。これは、これまでにも度々あったように、来る一〇日の北海道有珠山における儀式に対して、塩椎神様を始めとする神々様の準備が整われたことをお示しになられたものであると判った。

三月一〇日、北海道有珠山の大臼山神社において、W夫妻、Mさんが参加して次の儀式が行われた。

「古い地球の大浄化お願いの儀式」

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

塩椎神様、有珠山、大臼山神社の神々様ありがとうございます。

私達は、本日、ここに天の神様のお導きにより参りました。

これまでの永い永い間、古い地球の一切のすべてのを保ち、守り続けて下さいましたことありがとうございます。

新しい地球、鏝球王国に、すべての人々、万たるワンダラー、全人類、全動物、全草木、一切のすべてのものの「本の気」を誕生させて頂きましたことにより、鏝球王国は完成成就致しました。よって、去る一月二六日、「古い地球の葬送の儀式」が行われ、去る二月二

五日、富士山の湧玉の池にて、「去り行く古い地球（湧玉の池）を祝う儀式」が行われました。

ここにすべてが終わりました。古い地球の大浄化をして下さいますようお願い申し上げます。そして、「新しい地球」を現わして下さいますようお願い申し上げます。

地球の「本の気」の生みの元（親）でありました有珠山の神々様、大白山神社の神々様ありがとうございます。

三月一六日、午前六時頃、W夫人の夢。

夫人はある山に登っていた。すると男性の声が響いて来た。

「山が怒っています。山が怒っています。」

註 この当時は意味不明であったが、後日に至り、この山は御嶽山おんたけをいわれていたことが判った。

三月二〇日、出雲大社にて、W氏とMさんが参加して次の儀式が行われた。

『宇宙と古い地球のみそぎの儀式のための準備の儀式』

儀式と祈りの要旨。

出雲にお集まりの神々様に、これまでのお守りとお導きを感謝し、今までの経過、即ち、去る一月二六日、「古い地球の葬送の儀式」が、また、去る二月二五日、富士山の湧玉の池にて「去り行く古い地球（湧玉の池）を祝う儀式」が、そして去る三月一〇日、有珠山にて「古い地球の大浄化お願いの儀式」が行われ、ここに古い地球の一切が終わったことをこ報告申し上げます。

そして、来る四月八日、沖繩ひめゆりの地（湧玉の地）において、天の神様がして下さる儀式「宇宙と古い地球のみそぎの儀式」にワンダラー全員が参加できますように、また良く儀式が出来ますようにとお守りとお導きをお願い申し上げますのである。

また、W氏とMさんには数日前より霊的衝動が全身に重くのしかかっていたのであるが、この日（二〇日）、大社の大鳥居をくぐった時、それはパツパツと落ちたように消え、二人は爽やかな霊的雰囲気包まれたのであった。

三月二六日、未明、大阪のワンダラーS氏に天照大御神様が現われ給うて、次のように語られた。

「新しい風を送ります。」

この日（二六日）、午前四時一七分、W夫人の霊夢。  
神様が現われられて次のように語られた。

「宇宙の大掃除をするように……。」

「古い地球の大掃除をするように……。」

そのとたん、山々が崩れ、水が溢れ出て洪水となり、家も建物もすべてのものが流れ去り、なにもない世界となった。やがて一点の光が明るく射して来た。

④ こんどの地球の大変化による正しい世の終わり、新しい地球の誕生は、

この地球だけが高く変わるのではない。宇宙にも、みそぎ、が行われて、

我々の太陽系も、また、この大宇宙も高く変わるのである。

来る四月八日、沖繩ひめゆりの地（湧玉の地）にて行われる「みそぎ、

の儀式」の意味を、この霊夢で教えられているのである。

三月三〇日、午前五時五三分、W夫人の霊夢。

沖繩の湧玉の地で、教え切れない程沢山の人達（古いワンダラーと万たるワンダラー）がお祓い（みそぎ）をしている光景を見た。

三月三一日、午後四時、Mさんは、来る四月八日の沖繩の湧玉の地での儀式の「祈りの言

霊」（今日これが決定された。）を読んでいたが、その時、かつてエクアドルへ行く前々日に霊視した沢山の神々様が再びお揃いで並んでおられるのを霊視した。そしてこの時、次のように直感したのである。

「沖繩の湧玉の地での儀式にお集まりになられる神々様の準備は整った。」

「この儀式の祈りの言霊は、正しく神様のお考え通りの内容である。」

四月一日、Mさんの霊夢。

W氏が生まれたばかりのまるまると太った赤ちゃん（男の子）を抱いている。その赤ちゃんは驚くほど可愛らしく、まさに天使のようであり、これこそが神の子であると思ったのである。

ところがMさんは、この夢とよく似た霊夢を去る二月一八日頃にも見ていたのである。この時は三ヶ月くらいのまことに可愛らしい男の子で、やはり天使を思わせるような神の子であった。（この子はW氏とMさんに連れられてどこかへ行くところであった。）

一方、W夫人の霊夢と体験。

去る三月一〇日には有珠山での儀式が行われたが、その一週間くらい前、女子の可愛い赤

ちゃんを生んだ夢を見た。(註) この霊夢は有珠山と関連した象徴的啓示である。)

また、沖縄での儀式を一週間後に控えた今朝(一日)未明、こんどは男子の可愛い赤ちゃんを生んだ夢を見た。(註) この霊夢は沖縄湧玉の地に関する象徴的啓示である。)

また、W夫人には、三月一〇日の有珠山での儀式の日以来身体に霊的変調が起こっていて、現在(四月一日)に至ってもそれが続いていた。そして、この変調から回復するのは来る八日の沖縄での儀式が終了した時であるとなぜか判るのであった。

註 事実、夫人は四月八日の沖縄での儀式が終わると同時にこの霊的変調から回復した。

その日(一日)、午前六時三七分、W夫人の霊夢。

真白い衣を召された神様が、幼ない子供と一緒に歩いておられた。その幼児は男の子で、まだオムツをしており、背中には重そうな荷物を背負ってひよろひよろしながら歩いて行く。その姿が余りにも気の毒であったので、夫人は手を貸そうとした。すると、神様が夫人の手を押えるようにして止められたのである。夫人は神様に問うた。「その幼児は誰ですか。」すると、神様は次のように答えられた。

「ワンダラーです。これからはワンダラーには厳しい道です。時にはやさしく。」

四月六日、未明、Mさんの霊夢。

ある川の中で十数名の人達が裸になり、三々五々とみそぎをしている。そこにはW氏もMさんも、また二、三の知った人もいた。

註 次の儀式に参加するためのみそぎが行われているという意味である。

この日(六日、つまり沖縄での儀式の前々日)の午後よりMさんは急に胃に痛みをおぼえた。痛みは次第に激しさを増し、夜半から七日の朝に至っても激痛が続いた。

四月七日、Mさんは、前夜からの激痛でとうとう一睡も出来なかった。朝になってもこの激痛が少しも去らないので、沖縄の儀式に参加出来るかどうかも危ぶまれるような状態であった。

Mさんは祈り続けた。

「儀式が終わるまでこの足で立って沖縄に行けますように。儀式が終われば死んでもかまいません。それまでお守り下さい。」

しかし、いよいよ沖縄へ出発する時間の間際まぎわとなっても激痛は少しもおさまらない。とうとうMさんは、「この儀式のためにはたとえ死んでも現地に行かねばならない。」と重大な

決意をして我家を出発した。

このような激痛の中でようやく沖繩に着いた。早速明日の儀式のためにホテルで休養をとったが治らなかった。

この日（七日）、午後六時一四分、W夫人は沖繩のホテルで次のテレパシーを受けた。

「陽の沈まない中に……。」

夫人はホテルを出て丘に登り、太陽を眺めた。この日の沖繩は天空一面を雲が厚く覆っていて、今にも雨が降り出しそうな天気であった。しかし不思議なことに、この時にはその厚い雲の中に眩い程に光り輝く太陽があったのである。そのうえ、その太陽の左隣りにもう一つの太陽が見える。このもう一つの太陽の光は極めて弱く、薄いものであった。この二つの太陽を見た夫人は、新しい地球の輝く太陽と古い地球の去り行く太陽であると思ったのである。暫くこれを眺めていると、続いて次のテレパシーを受けた。

「若しみは、その苦しみは受けられますように……。」

これはいま激痛で苦しんでいるMさんのことを指すのであると判った。そして、Mさんの今受けている激しい苦しみは、「儀式」と深い関係があると直感したのである。

四月八日（沖繩での儀式の当日）、午前五時、W夫人の夢。

夫人は一人の男の赤ちゃんを抱いていた。しかし、なぜかその幼児は大勢の人達に刀やピストルのようなもので脅迫されているのである。夫人はその子供を抱いて逃げ廻っていたが、そのうちに逃げ場がなくなり、ついにある川岸にぶつかった。その川には一艘の小舟があり、二、三人の人達が乗っていた。夫人はその人達に、「この子を助けて下さい。」と行って舟に飛び込んだ。その人達は舟を漕ぎ出して、次のように言われた。

「ワンダラーの道はいまだ厳しいのです。」

この日（八日）、午前七時、沖繩湧玉の地（ひめゆりの地）にワンダラー全員（肉体での参加者は十三名であった。）が集まって、天の神様がなさる儀式に参加した。

午前六時頃より降り出した雨は次第に激しさを増し、儀式が始まった午前七時頃には最も激しく雨と風とが吹き荒れた。それはまさに「みそぎ」の儀式であり、全員が身にしみてこれを知ったのであった。

この激しい風雨は、この日（八日）、沖繩から北海道まで日本列島全体に吹き荒れたのである。

儀式。

「宇宙と古い地球のみそぎの儀式」

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

天の神様のお導きにより、本日ワンダラー全員がここに集まりまして、天の神様のなさいます。この儀式”に参加出来ましたことありがとうございます。

天の神様をお願い申し上げます。

ここに、宇宙を、みそぎによって大浄化して下さいますようお願い申し上げます。

ここに、古い地球を、みそぎによって大浄化して下さいますようお願い申し上げます。

みそぎの大浄化によって、宇宙を高く変化させて下さいますように。また、明るく、光と生命力の満ち満ちた新しい地球を現わして下さいますようお願い申し上げます。

ワンダラー全員が、新しい湧玉の地”で結ばれまして、光と生気に満ち溢れて、たくましく働くことが出来ますようにお守り、お導き下さいますようお願い申し上げます。

ここに「宇宙と古い地球のみそぎの儀式」をして下さいましたことありがとうございます。

Mさんの激痛は、この儀式が行われている間も続いていた。つまり、六日、七日、八日と三日間にわたってMさんはこの苦しい激痛と厳しい戦いをしてきたのである。以前にもこのようなことはあったが、それにしても今回の激痛は余りにも長く、また苦しく、このような大変な苦しみを受けるくらいならいっそ死んだ方がましではないかと思う程であった。

四月九日、未明、Mさんは霊夢の中で神様からこの苦しみに対するお答を頂いた。

「このような苦しみを貴女一人に受けて頂きましたが、この苦しみは貴女でないと受けて貰うことが出来ません。」

Mさんは続いて次のような夢を見た。

そこはある町並みであった。あまり美しいとはいえないところで、瀬戸市のような焼物の街のように思える。W氏とMさんはある素朴な旅館に泊めてもらうことになり、そこへ行った。すると一番良い部屋に案内された。

夢はこれで終わりであるが、これと同じような夢を最近すでに二、三回見せられている。しかも、これは旅館に泊まることを教えられているのではなく、ある場所へ行かねばならぬことの象徴的な啓示であるということまでは判るのであったが、その目的の場所は判らな

った。

Ⓐ 後日に至り、この旅館とは大津市の近江神宮のことであり、この夢は、Y 宮司を訪れる必要があることの象徴であることが判るに至った。

四月一日、午前五時二二分、W 夫人の夢。

夫人は長い階段を一段づつはら掃除していた。その時、天より声がした。

「みそぎです。」

四月一二日、未明、W 夫人は次の声を聞いた。

「御嶽おんたけです。御嶽山が爆発します。」

四月一五日、午前四時三〇分、M さんは天より次のテレパシーを受けた。

「ひめゆりの『みそぎ』の儀式とエクアドルの儀式とは裏表です。」

Ⓑ エクアドルの儀式（戦い）と同様に、この儀式においては肉体的に苦

しかったこともこれで理解出来たのであった。

M さんは、天のお方に次のように申し上げた。「これまでもそうでしたが、今回のひめゆ

りの儀式では、腹の激痛は耐えがたい程に特に大変でした。」

すると、天のお方はそれに答えられて、次のように語られたのである。

「全てを受けて儀式にのぞむのですから、あのくらいの痛さはいたしかたありません。辛抱して下さい。周りの方々が、これに早く気付かねばならないのです。儀式とは大変大きなことです。儀式は並たいていのことではありません。」

四月一七日、未明、M さんの霊夢。

四人（W 夫妻、M さん、Y 嬢）は外国（場所は不明）に行っている。

そこで女性三人は風呂に入り、身体をゴシゴシとこすって洗っている。これは『みそぎ』の象徴であると判った。（Ⓐ また、三人のみそぎの意味でもある。）

また、この風呂の造り方が変わっていて彫刻などが施してあり、そのきらびやかさはギリシア風を思わせるものであった。

この時、「全世界」の『みそぎ』を行うのだと直感したのである。

Ⓒ この霊夢は、「全世界」の『みそぎ』の儀式について教えられたのである。

四月一八日、未明、M さんは、天のお方から次のように問われた。

「あなたの身体は軽くなりましたか？」

それに答えてMさんは、「相変わらず身体は重く気も重いままです。」といった。すると、天のお方は次のように語られたのであった。

「今までの使命は、甘えの心、人に頼る心の多い人では出来ませんのでついつい無理をしました。いつかは気が付かれ、感謝の心を持たれる方も出て来られると思いますが。しっかりお役を果たされますように……。」

四月一九日、未明、Mさんの霊夢。

呉服屋から着物と帯が届いた。ところが、それは地味なものをという注文とは違い、大変美しく、派手な振り袖と帯であった。早速、「これは私が注文したものではない。こんな派手な、娘の着るような着物は困ります。」と呉服屋へ抗議した。すると天より声がした。

「鏡を見なさい、」「世が変わったのです。」

その時、あゝ新しい世に変わっていることを私は忘れていたと思ったのである。

この日（一九日）、午前五時三〇分、W夫人の霊夢。

夫人は空を仰いでいた。すると四個の太陽が現われた。その四つの太陽は天空に円を画い

て廻り、その円の中には地球儀があつてやはり回転している。それは世界地図を示しているようであった。やがて地球儀は日本列島のところで止まった。暫くするとその日本列島は消え去ったが、不思議にも四国の地図のみがはっきりと残り、しかもクローズアップされて見えるのであった。

この光景は、来る四月二十九日、四国の金刀比羅宮において行われる「全世界のみそぎの儀式」の重要な意味を象徴的に示されたものと判った。

四月二十八日、午前五時五三分、W夫人の夢。

夫人はある島に来ていたが、その島の形は扇形であった。「ここはどこですか？」とたずねると、声が出て、「今度行く所です。」との答があった。夫人は、「四国」だなと思った。すると再び天より声が出て、「漕ぎ出すのです。」といわれた。眼前には果てしない大海原がある。夫人はその大海原（全世界を意味する）の中へ泳ぎ出して行くのであった。

註 この夢も、去る四月一九日の霊夢（全世界のみそぎ）と同じ意味を表わしている。

四月二十九日、四国、金刀比羅宮にて次の儀式が行われた。参加者は、W夫妻、Mさんの三

人であった。

儀式。

「全世界（全人類、一切のすべてのもの）のみそぎの儀式」  
祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

金刀比羅宮にお集まりの神々様ありがとうございます。

私達は、天の神様のお導きにより、本日ここに参りました。

天の神様、金刀比羅宮にお集まりの神々様をお願い申し上げます。

全世界の“みそぎ”をして下さい。全世界を“みそぎ”の大浄化によって清めて下さい。

全人類、全動物、全草木、一切のすべてのものを“みそぎ”によって大浄化して下さい。

ここに明るく、光と生命力の満ち満ちた新しい世界を現わして下さいますように。全世界

が、全人類、全動物、全草木、一切のすべてのものが生まれ変わって、光と生気に満ち溢れ

た世となりますようお守り、お導き下さいますようお願い申し上げます。

ここに全世界の“みそぎ”の儀式をして下さいましたことありがとうございました。

四月三〇日、午後七時五〇分（金刀比羅宮での儀式を終えて帰宅した直後）、Mさんは次

のテレパシーを受けた。

「天です。天の心です。」

五月一日、午後七時二〇分、Mさんは次の靈感を受けた。

「儀式」、「地のワンダラーのみそぎ」

五月中にワンダラー達の会合が行われることはすでに計画されていた。そこでこの会合の日取りを五月一三日とし、「地のワンダラーのみそぎの儀式」とすることが決定された。

五月七日、午後四時五分、W夫人の霊夢。

午後二時頃から急に身体の疲れを感じたので横になり、仮眠した。すると大昔（神代と思われる）の衣装をつけた沢山の男女（女性は髪の毛をすそまでひきずるくらいに長く垂らしている）が走り廻っている光景を見た。それは戦いの場面であった。追う者、追われる者、裏門から逃げる者、あたりは右往左往する人達でごったがえしている。その時、「神代の浄化です。」と天より声があった。この声で夫人は目を醒ました。

今、地球で、全世界で、天と地において、目に見えない世界で“みそぎ”が行われているが、その“みそぎ”は実に時間を超えて、時代を超えて行われているのである。つまり、神

代からの“みそぎ”が今行われているのであると夫人は思ったのである。

五月一日、夜半から未明にかけてのMさんの霊夢。

大嵐で、天も地も唸りをあげて大荒れに荒れている。この大嵐を、人々（ワンダラー）は全身で受けて黙々と行き交っている。

これはワンダラーの受けるべき“みそぎ”である。ワンダラーは、このようにしっかりと“みそぎ”を受けて、それをじっと耐えしので行くのである。このことを象徴的に示されたのであると理解された。

五月一三日、ワンダラー二十数名集い次の儀式が行われた。

「地のワンダラーのみそぎの儀式」

S氏が開式を宣し、続いてW氏がこの儀式に至るまでの経過を説明した。それから、W氏は、「地のワンダラーのみそぎの儀式」について次のように語った。

今日の儀式により、地のワンダラーには“みそぎ”が行われます。この“みそぎ”により地のワンダラーは新しく生まれ変わって、いよいよ「形の世界」において生命を賭して使命を果たすべき時を迎えるのです。この使命を目前に控えて、本日、天の神様の御前で、地の

ワンダラー全員が“みそぎ”の儀式を行っていますのであります。

私は、“みそぎ”の形式とか論理的な説明は知りませんが、“みそぎ”の真は判るようになっています。“みそぎ”について古事記には大要次のように書かれております。

イザナギの命は黄泉の国の魔軍と戦われた。その後、「私は随分いやな国（サタン）の国）に行ったことだった。私はみそぎをしようと思う。」と仰せられて、築紫の日向の橘の小門の阿波岐原においでになり、“みそぎ”をなされた。

虫 “みそぎ”とは、水をそそぐ、身をそそぐとる、つまり、心と意識と肉体についているけがれをそぎ取ることである。

まず、命は、身体につけている物を全部投げ棄てられました。即ち、手に持っていた杖（頼りとするもの）を、帯を、袋（持てるもの一切）を、衣を、禪（はかま）を、そして頭にかぶっておられた冠（地位・名誉）を順々に投げ棄てられ、さらに左の手につけた腕巻を、次に右の手につけた腕巻を投げ棄てられました。このように身体につけているもの全部を投げ棄てられたのです。

ここに深い意味を汲み取って頂きたいと思います。

このようにしてイザナギの命は素裸になられ、川の中に入られて身をお洗いになられました。命は最初、川の流れの中間で身をお洗いになられました。次に水底でお洗いになられま

した。そして最後に水面でお洗いになりました。その時にお現われになった神様が、ナカツツノヲの命、ソコツツノヲの命、ウワツツノヲの命の三神で、この三神を総称して住吉大神（塩椎大神ともいう）と申し上げております。つまりこの神様は、イサナギの命が「みそぎ」をなされた時に現われられた神様で、したがって、古事記、日本書紀においては浄化の神様とされているのです。

さらに、イサナギの命は左の目をお洗いになりました。まさにこの時ご出現になられたのが天照大御神様であります。

このように持てる全てのものを投げ棄てて身をそいで清め、大浄化によって、ここに天照大御神様ご出現になられたのであります。

以上が古事記にあります「みそぎ」についての概要であり、少々の注釈を交えてご説明いたしました。

沖縄ひめゆりの地における「宇宙と古い地球の「みそぎ」の儀式」の数日前、S・N氏の前に現われられた「天照大御神様」が「新しい風を送ります。」といわれた意味もここに理解出来ると思います。

さて、「みそぎ」とは心と意識と肉体に持っているもの、放さず執着しているものを全部投げ棄てて、すべて無になることであります。

そして、全部を投げ棄てるために、苦しく厳しく苛酷なことが、これから、身の周りに、家庭に、社会に、国内に、全世界に、天と地と自然の中に起こります。しかし、これにじっと耐えて、無となって新しく生まれ変わることが即ち「みそぎ」なのであります。そして、この厳しい「みそぎ」はこの儀式によって開始されるのです。

地のワンダラーは、この「みそぎ」を全身心で受けるのです。それに耐えるのです。そして「真」に目覚めて生まれ変わるのです。このような厳しく苦しい「みそぎ」を受けて、生まれ変わって、最後の大切な使命を果たすのです。しかし、ワンダラーの心の中に少しでも甘えや頼る心がありますと、その使命を果たすことは出来ません。したがって、この最後の使命を果たすために甘えの心、頼る心を完全に捨て切るよう、厳しい助けが身の周りに起こります。それが即ち「みそぎ」なのです。

地のワンダラーの最後の戦いは、「形の世界の現象の世界」で、「真」を、「真の言霊」を語り多くの人を助ける戦いです。「真の言霊」を語る時は今、ここに来れています。「その時」が今ここに来ているからです。

今はもはや地のワンダラーが、円盤だ、宇宙人だといって、楽しんでる時ではありません。「真」の目覚めから入り出る「真」を、「真の言霊」を「正しい世の終わり」と「新しい世の誕生」を語って、多くの人達を救うべき時なのです。

迷いを語れば、そのカルマは語った人のカルマとなり、自ら解かねばなりません。

地のワンダラーの方々は、「真」の判る、光る魂の方々を探して下さい。テレパシーと霊感で探すのです。その方々に「真の言霊」を語れば、相手の心に、魂に必ず響きます。その光る魂の方々も、次々と「真の言霊」を語られて、その輪は大きく広がるでしょう。

計らいの心、企らみの心を持たず、素の儘に語るのです。神様に、「真」に目覚めて「真の言霊」が語れるように毎日祈りましょう。

本書179頁に、『まず、生命を賭して使命を遂行する覚悟と準備が自分に出来たことを示しなさい。そうすれば、みなさんの任務は今すぐ開始されるでしょう。』とあります。これは本当です。私のこの二十年余の体験から確信を持って申し上げます。

一九六〇年七月一四日、AZ（サナンダ）様は、最後の時にワンダラー達のなすべきこと、心すべきことを次のように言われております。

『ワンダラーのみんなの愛です。みんなの愛し合う心の目覚めです。』

『みんな（多くの人達）の中の光る魂を見い出すことです。』（注 この方々に「真」を語るのである。）

『みんな（多くの人達、人類）を救えということです。それは、最後の時に（正しい世の終わりが）判るようにしてあげることです。』

地のワンダラーのこれからの進む方向と最後の使命がなんであるかは、このAZ（サナンダ）様のお言葉でお判り頂けたものと確信します。——以下略——

続いてY氏が、「今後のための確認事項」と題して次のように語った。

沖繩ひめゆりの地での儀式が終わり、そして本日は「地のワンダラーのみそぎの儀式」を迎え、いよいよ戦いはこの現実の地球上に神の国を建設するという段階に至ることとなりました。したがって、これからの地球のカルマとの戦いは、ワンダラーの現実の肉体、および意識に直接関係してくるものとなってくる筈であり、より解りやすいものとなる反面、決然たる覚悟をもって臨まねば押し流されてしまう危険も大きいものと存じます。

そこで、私は、これからの最終段階を迎えるにあたってワンダラーの役目を悔いなく果たすことができるために、自戒として次の四つの点を確認しておきたいと考えました。

①ワンダラーであることの証明は要らない。

我々は、天の神様から役目をいただいて地球に來たワンダラーであります。しかし、そのことを証明してくれるものは我々自身のマコト（真）の心より以外にありません。言葉や行動に証明を求める気持からは、常にワンダラー的な言動をしなければ、という一種の強迫

観念が生じ、マコトのノンキさを失ってしまう結果となります。ワンダラーの言動は、このような強迫観念から出てくるものではなく、<sup>くれない</sup>紅の真によって自然に湧き上がってくるべきものである筈です。そして、自分がいまワンダラーであるかないかは、真の心で神様の前に立てばはっきりと判る筈なのであります。

② 「判断基準のあいまいさ」について。

私は以前にある人から次のような言葉を聞きました。

「人間の判断基準ほどあいまいなものはない。今日確信したことも、明日になって別のことを聞かされるとすぐ崩れてしまう。」

たしかに現在地球上にあふれている様々なカルマ的なものに判断基準を置く限り、このような結果は避けられないでしょう。しかしながらワンダラーにとっての唯一の判断基準は自らの心のうちにある「真の心」であり、これは全くあいまいなところのないものであります。というのは、この真の心を通じて、ワンダラーは天の神様と直接につながるからであります。

③ ワンダラーであることを棄ててはならない。

これは今まで再三にわたって言われてきたことではありますが、戦いが我々の肉体に、意

識に、直接的にかかわってくるこれからの段階においては、特に重要になってくることであると思えます。

「どんな状態になろうと肉体が残っている限り地のワンダラーの役は果たせる。」  
この言葉を今一度銘記しておきたいものと考えます。

④ 「神の国」は中途半端な形でなく、現実には、この世界において実現されるべきものであるという確信！

現実のこの世界が最終的に「神の国」とならなければワンダラーの使命は達成されたといえませんが。プロセスにおいては、ある世界は神の国となったがこの世界はまだ……ということもありましょう。しかし、最終的には「この世界」が神の国とならねば、ワンダラー（集団）はその使命に失敗したことになるのであります。これは、これからの段階にあたって、特に強く確認しておきたい点であります。

続いてS氏が次のように語った。（要約）

今までの戦いを通じて、これからの戦いに真のワンダラーとしてよりよく働いていただくために必要な注意事項を拾いあげて皆様に訴えたい。

・人に語る時、このように「オイカイワタチ」の本に書いてあるという逃げ口上で話すのは駄目である。これでは真は伝わらない。

・人に語る時は、心の底から湧き上がってくる押えがたい真、正さなければならぬ真（このように出て来るのが紅の真である。）のみを話すことである。これが真の言霊となる。

・「こんな仕事は〇〇さんのやることだから」と思わないでいただきたい。これは一人立ちのワンダラーの思うことではない。やらなければならぬ仕事が目に見え、思ったのなら、それはあなたに与えられた靈感であり、自分で処分しなければならぬ与えられた仕事であると考えて、「自分でやります。」と宣言して跳び込んで行って頂きたい。

・「他のワンダラーに依頼心を起こすな。」これは大切なことである。

他のワンダラーも目のまわる忙しさで働いていることを知らねばならない。この依頼心は、今まだ取れていないワンダラーの不必要なカルマである。これがある限り一人立ちは出来ない。それではワンダラーとしての役がよく果たせないことになるのは当然であろう。

・ワンダラーの中の一部の人達には、今もお意外に根強い他人まかせな考えがある。その一つが、宇宙人とのコンタクトと、それにより助けられることへの期待心である。

即ち、「世の終わりの時は、宇宙船に乗せられてある光線をかけられれば目覚められる。」とか、「他の遊星につれて行かれればバイブレーションが高いので容易に目覚められる。」

という一部の研究家の言葉である。

この期待する心は、全部あなたまかせの依頼心が生んだものである。最も大切な、真の目覚めのための厳しい道を忌避した不必要な悪いカルマである。

「真」の欠けた者やカルマの残っている人を、どうして新しい世に連れて行くことが出来るぞ（宇宙船は、そのような人達を助けることは出来ないのだ）それは、新しい地球、新しい世の「真」を知らぬ者の戯言である。

宇宙人と形（肉体的）でのコンタクトをして助けてもらおうと考えている者がもし今もあるとするならば、そのワンダラーは目覚めの足りぬ、めくらに等しい者である。なぜならば、形（肉体的）でのコンタクトは極めて初歩の、聞いて知る段階においてのものなのだからである。

円盤・宇宙人來訪の目的は、「オイカイワタチ」にも記述してある通り、ワンダラーの目覚めのためのものであり、ワンダラーの使命を果たす時が来たことを告げるためのものである。そして、この目的は果たされているのである。

すでにワンダラー達は真に目覚めており、沢山の使命が果たされている。そして、現在もなお果たしつつあるのである。目覚めたワンダラー達は、天の靈感のままに、素直に考えた上で働きを続けているのだ。（この働きに対し、円盤・宇宙人は見えない姿で援助されている。

ることは勿論である。) 真の靈感を正しく受けて歩んで行くことこそ、すでに新しい世の歩みなのである。これが出来たからこそ、新しい世の建設が出来るようになったのである。

私達はすでに、形のコンタクトでは得られない遙かに正しい道を、そして「真」の伝わる道を歩んでいるのだと知っているのである。

・「オイカイワタチ」の本を見ると、誰々は靈感を受けてこのように真を知ったと書いてある。これを読まれると、本に書いてあるような文章をテレパシーのごとく受けたものと思われるかもしれない。しかし、こう思われたのなら大変な間違いである。

靈感を受け、それを長い日時をかけて考えめぐらし、検討し、練り上げ、まとめ上げたものであり、最後に真で、靈感で確信を得たものなのである。勿論忍耐と追求心の集積の上に得られるものである。ラタカルタ(愛)の靈感はそう簡単には得られない。しかし誰にも受けられるものである。

・もし皆様が受けられた靈感をそのまま躊躇なく消化されているならば、戦いはもっと良い状態で、かつ短期間で進められた筈である。また、仲間から沢山の犠牲者を出さずにすんだ筈でもある。

・靈感は最も適切にそれぞれの方に与えられている。与えられた方は、十分にその役をこなせた筈である。

靈感を無視することは、最良の結果を無視する(蹴る)こととなり、悪い結果を確実に招く。このことを、神に対する心の礼儀のない冷淡な仕打ちといい、その結果、冷淡な運を身につけてしまうこととなる。そして、これは次の世(次の遊星)での働きを失敗のカルマに結びつけてしまう。愛をもって働くことである。

・天は靈感を礼儀をもって与えられる。最も適切な時に与えられると受け止めよ。受けたら、感じたらすぐさま動くことである。

受けたと思ったら、最もそれを果たすのに適切な人に与えられたのであることを意識せよ。神様のたのみであり、命令であると思ひ、直ちに動くことである。これは極めて大切なことである。

この大切な時に依頼心や甘えを起したら大変なことになるのである。神様の御手足となって働かずして、どうしてワンダラーといえようか。ワンダラーは神様の御手足として働く人のことを言うのである。正しい靈感のまま動いて役を果たせる人のことである。靈感のまま動かず、役を果たしているつもり、果たしたつもりになるということである。

天の神様の真について

• さきほど「甘え」や「真に対する曖昧さ」は許されないという話があった。この点を再考してみたい。

• もし新しい世の中で、この「甘え」や「真に対する曖昧さ」があったらどうなるであろうかという点を考えてみよう。

例えば……

これくらいのことでもいいでしょう。

めんどろだから、こんなもんで……。

一つや二つくらい、大勢に影響はないし。

努力したんだから、一生懸命やったんだから、かつては立派にやったんだから今回は少々のことはまけてほしい。

私が今やらなくても、誰かがやるさ。

大体こんなところでいいのじゃないか。仕方がないわ。

このような「真」に対する甘さ、曖昧さが少しでもあったら恐ろしいことになる。永遠への歩みは狂ってしまうのである。

• 天は「真」に対する甘えや曖昧さを許されない。「真」の中に甘えは存在しないし、僅かな曖昧さも認められない。事実かつてこれを勘違いして道をふみはずしたワンダラーがい

るのだ。

これが「真」の厳しさである。

これからの戦いに対する働きについて

• これから現われるカルマは、いかに強大であろうと巨大であろうと問題ではない。これらはいずれ消え去るカルマである。すべてニセモノの怪物にすぎない。したがって我々がこれと戦うにはなんらの奇略も陽動作戦もいらぬ。

私達は神様の戦いをするのである。正々堂々と真のみで戦えばよい。負ける戦いではないと知られたい。

• ワンダラーの心は、ゆるぎなく燃える焔である。真が燃える焔であり、他をも燃やさずにおかない紅の真をもって、すべてにぶち当って行くのである。どうして他を燃やさずにおけようか、この決心で行くのである。

• ワンダラーは天使であるといわれるが、これは、天の御使いとしての使命を果たしている限りにおいて、そうなのである。

• ワンダラーということにかんしても同じである。ワンダラーとして働いて、始めてワンダラーとして凱旋出来るのである。

・我々はあくまでも地の働きをする。天の働きを受けて地の部分の働きをするのである。地で働く要員は地のワンダラーしかない。もしワンダラーが働かないというのなら、一体だれがこれから働くというのだろうか。ワンダラーは最後まで戦うのである。

・これからのワンダラーの働きは、「真」を伝えることにある。「真」を語ることである。勿論私達はこれからを自分の「我」で戦い働くのではない。すべて靈感に導かれて、靈感のまま「真の言霊」を語るのである。自分の「我」の心と「靈感」との区別をよくわきまえて働くことである。

・だれにも無差別で語りかけるのではない。光る魂の方を探して語るのである。光る魂の方を靈感で探すのである。

・語るにもノンキがいる。天を信じ、真の神を信じ、待つ忍耐もいることは当然である。  
 ・語り合った時点で判ってもらわなくてもよい。正しい真の種を植えておけばよい。きつと最後に理解してもらえぬ鍵を残しておけばよい。このノンキさもまた必要である。

・相手により、これからのことを語って良い人もあり、語ってはならない人もある。それは様々である。だから、相手が良く変わるのも悪くなるのもすべてワンダラーの責任である。  
 ・あなたの心の中にある真と高き理想と崇高な目的をすべて結集させ、あなたの生命の進化の華が今開くのであると知って、靈感のまま思う存分戦って頂きたい。

#### 最後に当って

・これからの戦いについて再度述べる。地球の最後の到来は、ワンダラーの決意と行動開始にある。これが最後の場面の展開をスイッチ・オンさせるのだ。地の変化のすべてを受けもつのが地のワンダラーであり、地の神々様であることを銘記されたい。

・地の神々様は、ワンダラーの働きを天の意を受けて助けられる。ワンダラーの戦いが進むにつれて地の変化も進む。

地の変化の満つるにしたがい、地の意を受けて天の神様は宇宙的な大変化を進められ、容赦なくカルマの最後の一滴まで消して浄められるのである。

私（S氏）はあえて言いたい。『行け、われら神の子らよ！』と。

このような「正しい世の終わり」の戦いの結末は、この宇宙年月、あえて久しいものであります。私は皆様に伝えたい。ワンダラーとしての栄光を秘めて、あまたの試練を乗り越えて、耐えて、真の神の子に生まれ変わり、最後の役を神の子として果たされんことを祈るのみであります。

天の神様ありがとうございます。

このあと、S氏の先導により、参加したワンダラー全員で次の宣言がなされて「地のワン

ダラーのみそぎの儀式」は終わった。

### 宣言

天の神様ありがとうございます。

ここに私達、地のワンダラー全員そろい、<sup>みそぎ</sup>の儀式の行われましたこと、及びこれまでのお導きを心からお礼申し上げます。

私達一同、いかに厳しい試練があろうと、容赦のないお導きをいとわず受けて、真の神の子として生まれ変わり、全身全霊をもって働くことをここにお誓い申し上げます。

昭和五四年五月一三日、ワンダラー一同。

### 第三章 祝事の儀式

五月一四日、午前五時三七分、W夫人の霊夢。

夫人は「オイカイワタチ」の本を持って急ぎ足で、いや、駆け足で走り廻っている。その時、天より声がした。

「全世界を駆けて走るのです。」

④ この象徴的な夢は、その役のあるワンダラーは、これから世界を巡って使命を果たす必要があることを知らされたものであろう。

この日(一四日)、未明、Mさんの霊夢。

Mさんは、近江神宮のY宮司に案内されてある神様のお祀りしてある場所へ行った。そこでお詣りをしていると、Y宮司が、

「さあ、これからいよいよ、<sup>〃</sup>オイカイワタチ<sup>〃</sup>を持って出発です。」と語られた。

そして各地へ出発するさまを見せられたのである。

罫 この夢も、前の夢と同じ意味を持つものである。

五月二一日、夜半未明、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「世界を、世界の救いを始めるのです。」

罫 これは、去る五月一四日の夢の意味にも関連し、後日行われた「祝事の儀式」のことをいわれたものであると思われる。

五月二四日、未明、Mさんの霊夢。

二人の男性が鋤すきを持って穴を掘っている。Mさんは傍でスコップをもってその土を外に出している。そこへ一人の女性のワンダラーがやって来て、穴を掘ることを止めてほしいと強く激しく訴えるのであった。Mさんは、「どうして止めるのですか？」と問い返した。するとその女性のワンダラーは、「穴を掘ると私がつらいのです。つらいから止めてほしい。」と哀願するのであった。

Mさんはそこで暫く手を休めた。すると男性の二人が厳しい声で、「私達は手を休めてはおりません。貴女も手を休めてはならないのです。」と言ったのである。

罫 地球を、世界を救う働きを続けているワンダラーに対し、その手を止めさせようとするワンダラー（サタンに手を貸すもの）との戦いがあることを、このような象徴的な夢で示されたのである。ワンダラーの戦いは厳しく苦しいものであるため、疲れたワンダラーの中にはこの戦いから開放されたいと思うものもあるのである。しかし、ワンダラーは最後の最後まで戦うのであることを忘れてはならない。

Mさんは、かつて、戦いが余りに苦しいので、心の中で自分自身の安らぎを求めたことがあった。その時、天は次のように語られた。

「ワンダラーはこの世に肉体をつけて来た以上は、相手に与えることがあっても、相手から求める我儘は許されない。一生が戦いなのである。」

「ワンダラーには、自分自身の安らぎを求める我儘はないのである。」

この日（二四日）、神戸市のMさん（「オイカイワタチ」の読者）は保久良神社で神業をしていた。その時、「日の宮（幣立神宮）に行きなさい。『オイカイワタチ完』を奉納せよ。」との神示を頂いた。

そこで、五月二九日、幣立神宮（日の宮）に参宮し、「オイカイワタチ完(上)」を奉納され

た。

五月二十九日、未明、Mさんは天から声なき声で次の言葉を聞いた。

「ワンダラーの中で、『オイカイワタチ』の本の奥にある『真』を信じられない人は大変なことである。」

五月三〇日、W夫人は霊夢の中で、再び次のような天の声を聞いた。（この声はさる三月、四月にも聞いており、これで三回目であった。）

「東の国、日本の東の国、日本の東の国です。」そしてこの声と共に、『大陸』を見せられたのであった。

註 日本は東は太平洋である。この太平洋に新しい大陸が出来ることを言われているのであろう。一〇、五二八年前（一九八〇年より）に沈没したレムリア大陸が隆起して新しい大陸となる準備が整ったことを示されたものであろうか。

六月五日、未明、W夫人は「アトランティス大陸」というテレパシーを受けた。

これも、一〇、二二〇年前（一九八〇年より）に沈没したアトランティス大陸が再び隆起することを示されたものであろうか。

六月九日、未明、W夫人の霊夢。

なにかが起こっている。その内容は判らないが、五、六人のワンダラーが忙しく立ち働いている。その時、天より声がした。

「ワンダラーは最後まで戦うのです。」

六月一〇日、夜半未明、W夫人の夢。

「欧・蘭」という文字を何枚も何枚も大書しているが、その日はとうとう満足出来るような『書』が書けずに夜が明けた。

六月十一日、夜半未明、W夫人の夢。

昨日と同様、今日も朝から「欧・蘭」という文字を幾枚も幾枚も書いている。夜半になつてようやく満足する『書』を書き上げることが出来た。

註 「欧」はヨーロッパを、「蘭」はオランダを表わしていることが後日

に至り明白となる。また昨年「エクアドルの儀式」を終えて帰国した頃、そして今年の六月に入ってからと合計二回、天から「オランダ、オランダ。」という声を聞いていた。しかし、この時には、これに秘められて  
いる意味は判らなかつたのである。

六月一日、午前四時一三分、W夫人は次のような夢を再び見せられて目を醒ました。それは、「オイカイワタチ」の本を一杯に積んだ舟が出航して行く光景であった。

註 これは、去る五月一日、MさんとW夫人の見た夢と同じ意味（あるワングラーは世界を巡る役をする。）の夢と考えられる。

六月一日、東京のY氏がW氏を訪れた。

彼（東京のY氏）は昨一日、九州の幣立神宮（日の宮）に参宮した帰途であり、参宮の主旨を次のように語るのであった。（W氏は、これまでY氏との面識は一度もなかつた。）

——私（東京のY氏）は悪霊の大親分です。私は沢山の悪霊の子分達を傘下に持ち、これらを司っております。私は百億年前より悪の道に入り、これまでに数多くの遊星で神に反逆し、神の御業を妨害し、ワングラー達の働きを妨げて来たのです。この地球においても同

じでした。

私は夜半、この悪霊の子分達を集めて、地球の動きを報告させ、また神に対する反逆の指令を發していたのです。私達悪霊には、この地球の動向は全部判っていたのです。特に美しい清い魂を持った善なる働きをする者達の動向は、全部手に取るように判っていたのです。

ところが、善なる働きをするあなたがたの系統だけが、なぜか不思議にもごく最近まで判らなかつたのです。このことは私達悪霊には全く不思議という外はないのです。

私が、私達が、Wさん達をもっと早くから知っていたら、貴方達の働きをもっと妨害したことでしょう。

あなた達ワングラーは、大変美しい、濁りのない清い魂を持って、この地球での使命を果たしに来られました。私の方は、これを妨害するために悪霊の大親分としてこの地球に来たのですが……、もうこの地球は変わりました。奥の奥の世界で変わり、昨年七月からは霊界で大戦争が行われてこれも終わり、いよいよ現象の世界での大変化（ハルマゲドンの戦い）を迎えるばかりとなりました。

そこで、私は悪霊の大親分としての悪の働きをここでやめることに決意したのです。そして善の働きをする方々を陰で手助けすることに決意しました。そこで、この決意を心と意識と肉体で宣言することにしたのです。

私がこの決意と宣言をしなければ、私達悪霊は今度の現象界の大変化によって宇宙の遙か彼方に追いやられ、永遠に出ることの出来ないところに閉じ込められてしまうことが良く判ったのです。

私は去る一六日、幣立神宮の近くの街、馬見原（地名）に泊まり、夜半、悪霊の主なる子分達（即ちそれぞれの親分）二十数名を集めて自分の心を語り、以上のことを皆に宣言したのです。そして、翌一七日に幣立神宮（日の宮）に詣で、この決意を報告し、宣言して来たのです。（しかし、子分達悪霊は、それぞれの自由意志でこれから行動します。）

そしてその帰途、今日（一八日）は、この一切をWさんに告げに来たのです。

Y氏はさらに語り継いだ。

この地球には、地球を神の国にするために働く使命を持った清い美しい魂の方々が沢山降ろされていたのですが、私達悪霊が働けないように頭から押えていたために、この人達は中々立ち上がることができませんでした。しかしもうこれからは良くなります。また、私はその方々の良き働きの手助けをします。ですからこれからは貴方々の働きは良く出来ますことでしょう。今年の七月から段々とそのことが明らかとなってくるでしょう。

私は、この一切をWさんに語る事が出来て大変良かったと思っています。

これからは、私は表面に出ないで、美しい清い魂の方々（万たるワンダラー）の働きが良く出来るように陰から助ける働きをします。

東京のY氏は以上のように語り、これをWさんに語る事が出来て良かった良かったと繰り返すのであった。

六月二二日、午前五時三〇分、〇〇夫人の夢。

すさまじい光景である。これからの〇〇国内の姿であろうか、争いあり、パニックあり、暴力団達は刀やピストルで多くの人達を傷つけている。様々の混乱が展開している。

六月二四日、W氏は、オランダにて「儀式」を行うためにヨーロッパに旅行することを最終的に決定した。

六月二五日、未明、Mさんの霊夢。

Mさんはどこか判らないが外国におり、その国の海岸線に沿った道路を大勢（ワンダラー達）の人達と歩いている。海上には大きな美しい太陽が輝いていた。すると黄金の輝く円盤（大きさは太陽と同じくらいに見える）が現われた。その黄金の円盤は太陽の周りを旋回しながら、人々の行手を導くように線を画いて進んで行く。Mさんは、みんなに、「円盤が行

くから見なさい」と叫んだ。

Mさんはこれまで度々円盤を見ているが、この黄金の円盤を見た時ほど神秘的ですばらしい感動を受けたのははじめてであった。

七月八日、九州、阿蘇、幣立神宮（日の宮）において「祝事の儀式のための準備の儀式」が行われた。

この日は朝方より雨が降り出していた。幣立神宮までの長い山道に厚い雲と深い霧がたれ込め、雨が激しく降っていた。W氏とMさんは、その雨の中を走り続ける車の中で、この雲と霧と雨に乗られて沢山の神々様がお降りになられるのを全身心で感じたのであった。

この時、二人は、昨年六月一日に幣立神宮に参宮した時にも、頂度今日と全く同じ状況であったことを思い出した。（完上152頁参照）

幣立神宮（日の宮）においては、次の儀式が行われた。

「祝事の儀式のための準備の儀式」  
祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

私達は、天の神様のお導きにより本日ここに参りました。

天の神様、天照大御神様、天孫の神々様、高天原の神々様、日の宮にお集まりの神々様ありがとうございます。ここに報告とお願いを申し上げます。

昨年六月一日、天孫と高天原の神々様がお降臨下さいましたことにより、「エクアドルの儀式（戦い）」を無事に相済ませることが出来ましたこと、厚くお礼申し上げます。続いて、

「古い地球の葬送の儀式」

「去り行く古い地球（湧玉の池）を祝う儀式」

「古い地球の大浄化お願いの儀式」

「宇宙と古い地球のみそぎの儀式」

「全世界のみそぎの儀式」

「地のワンダラーのみそぎの儀式」

がこの順序で行われて来ましたこと、ここに感謝と共に報告申し上げます。

さらにこれから、天の神様がなさいます「祝事の儀式」がオランダの地にて行われます。

新しい地球を統べたもう明仁皇太子殿下ご夫妻と、地のワンダラーが、ここに正しく固く結ばれて、天と地と一体となって、神々様と共に、この儀式に正しく参加出来ますようにお守り、お導き下さいますようお願い申し上げます。

明仁皇太子殿下ご夫妻と私達ワンダラーのヨーロッパへの行き帰りが平穩無事であります

ようお守り下さいますようお願い申し上げます。

七月二一日、未明、Mさんの霊夢。

「空を見なさい。」という天の声を聞いた。西空には夕陽が沈まんとして美しく輝いている。その西空には雲の線で画かれた正方形があり、その内部が黄金色に輝いている。そして、その黄金色の中にS（エス）の文字が鮮明に画かれている。

暫くそれを眺めていると、左隣りに同じような正方形の枠（囲み）が出来た。この枠も黄金色に輝き、その中にシ（wを横にした形）の文字が明確に画かれている。

これを見たMさんは、Sはスタートを意味すると直感した。天と地の神々様はいよいよ「祝事の儀式」の準備に向かって一斉にスタートされた。我々もスタートするのであると思っ

た。「シ」の文字は、右から見ればWであり、左から見ればMであり、正面から見れば数字の3である。W夫妻、Mさんの3人を意味し、「祝事の儀式」にこの肉体で参加する3人の、心と意識と魂の準備が開始されるべきことを教えられたものであると判ったのであった。

幣立神宮における「祝事の儀式のための準備の儀式」が無事に終わったことにより、ここに、天と地の神々様始め全ワンダラーが、ヨーロッパのオランダの地において行われる「祝

事の儀式」に向かって一斉に準備に入ったのである。

この意味が判った時、続いて天より声がした。

「ヨーロッパの儀式は、フリージアの黄色い花の咲いているところで行います。」

七月一五日、午後一〇時三〇分頃、Mさんは月を眺めた。不思議にもその月は神様のお顔に見えるのであった。やさしく、静かで、なんとも表現しがたい神々しいお顔であった。

神様のお顔を拝したMさんは、感極まる喜びが全身に満ち溢れるのを感じたのであった。

七月二五日、午前五時四〇分頃、Mさんは早朝の太陽を見て驚いた。

その太陽は、明確な“鈴”の形をなして真赤に輝いている。暫くこれを眺めているとやがて“鈴”の太陽はいつもの早朝の太陽の形に変わったのであった。



「オйкаイワタチ」完(上)までの四冊が、次のような経過で皇太子殿下のお手許に渡されることとなった。

皇太子殿下ご夫妻は昨年（昭和五三年）六月一二日に日本をご出発になり、パラグアイとブラジルを訪問された。当時パラグアイに移民されていたKさんは、不思議にも現地で数回皇太子殿下ご夫妻にお目にかかる機縁に恵まれた。

Kさんは昨年（昭和五三年）八月末に帰国され、W氏を訪れられた。そして、皇太子殿下ご夫妻とのご面会のこと、「オイカイワタチ」がパラグアイにおける自分達の心のささえであったことなどを語られたのである。

またその折、Kさんは、「私はパラグアイに神様のご使命を頂いて行きました。」と語られたのであった。

昭和五四年六月五日、Kさんは再びW氏を訪れられた。そして、これから九州、阿蘇、幣立神宮（日の宮）に参宮する旨を語られたのであった。

六月八日、Kさんは幣立神宮に参宮された。その時、幣立神宮のH宮司は、「新しい日本の誕生のために、皇太子殿下の幣立神宮にご行啓を切望している。」との旨を語られた。これを聞かれたKさんは、心で自分も出来るだけの協力をしてさしあげたいと思われたのであった。

た。

このような経過の末、Kさんは、パラグアイでお目にかかったことのある、東宮お付きの方にお願ひしてみたいと思われ、その手順を進めていかれたのであった。

さらにKさんは、併せて「オイカイワタチ」完(上)までの四冊をお渡しすることも願ひしようと思われたのであった。

六月一九日、Kさんは東宮お付きの方に面会された。（お付きの方は、パラグアイのことをよくおぼえておられ、そのためにお目にかかることが出来た。）

Kさんは、パラグアイの移民生活中に自ら執筆された「絵画童話集」と「オイカイワタチ」完(上)までの四冊を持参され、「絵画童話集」は美智子妃殿下にご高覧を願ひし、「オイカイワタチ」は皇太子殿下のお手許に差し上げたいという旨を語られた。併せてKさんは、W氏からの次のような手紙をそのまま東宮お付きの方に見せられたのであった。

「お渡しのお願ひを申し上げるについて……、決して計らいや企みの心を持たないで、素の儘に、真のみを素直な心で語って下さい。このことは神様のご決定下さることですから決して無理押しをなさらないで、誠心をもって語って下さい。神様のみ胸にかなった時であれば、それは適うことでしょう。時でなければ神様がまたの時を下さいます。」

また幣立神宮のことも真剣に語られたのは勿論である。  
Kさんは、持参した「オイカイワタチ」をまず東宮お付きの方に寄贈し、お読み頂いてからこのことを決定して下さいとお願ひして下<sup>さ</sup>られたのであった。

七月八日、W氏とMさんが幣立神宮に参宮し、次の儀式が行われた。(82頁参照)

「祝事の儀式のための準備の儀式」

ヨーロッパのオランダの地における「祝事の儀式」は、新しい地球を続けたもう明仁皇太子殿下と地のワンダラーが固く結ばれて行われる大切な儀式である。したがって、この準備の儀式は、皇太子殿下と地のワンダラーが結ばれて、さらに神々様と結ばれて、「祝事の儀式」への準備が行われるように天の神様をお願いする儀式なのであった。

註 W夫妻とMさんは地のワンダラーを代表する形で、八月二日に日本を出発し、西ドイツ、英国、フランス、ベルギーを巡る。そして、八月三十一日、および九月一日にオランダの地において「祝事の儀式」が行われるのである。

また、皇太子殿下ご夫妻は、一〇月五、六日にオランダにて、そしてルーマニア、ブルガリアを、さらに一三日にベルギーを訪問され、一四日に帰国される予定である。

皇太子殿下のご訪欧には、奥に「祝事の儀式」が秘められているのである。

七月三〇日、夜、W氏には、なぜか「近江神宮のY宮司に明日(三十一日)電話する必要がある。」と強く思えてならないのであった。

七月三十一日、近江神宮のY宮司より、明八月一日に皇太子殿下ご夫妻が近江神宮に行啓されることを知らされた。あわせて、W氏とMさんの二人に、行啓お迎えに参列するようにとお誘いを受けた。

八月一日、午後四時より、近江神宮において、皇太子殿下ご夫妻の行啓お迎えの儀式が行われた。

おはらいの儀式のあと、Y宮司は神官十数名を従えて神殿の奥院に入られた。やがて警蹕<sup>けいひつ</sup>が発せられ、続いて祝詞が奉上されると、この響きが遙か遠くから透き通るようにしかも力強く流れて来る。

この時、これまで周囲の森林から囁りわたっていた小鳥達の鳴き声がピタリと止まり、あ

たりは静寂の場と化した。静寂の中に宮司の祝詞奉上の静かな響きのみがあった。すると、晴れわたった美しい青空（神殿の上空）に鳳凰が二羽現われて天に舞うのをMさんは霊視した。その時、天より声がした。

「時を告げる。」

（註）皇太子殿下と地のワンダラーがここに結ばれる時が来たことを告げられたのであろう。

午後五時三分前、皇太子殿下ご夫妻がご到着になられ、Y宮司の先導で神殿に参拝された。このあとY宮司が皇太子殿下ご夫妻に言霊を言上され、ここにご参宮の儀式は終わった。それと同時に、今まで静寂と化していた神域に、まわりの山々の森林から小鳥達の囀りが再び一斉に響き始めたのである。

去る七月八日、幣立神宮において天の神様をお願いしていた「準備の儀式」、つまり、皇太子殿下と地のワンダラーの結びがここに成ったのである。そして、これによって、オランダの地で行われる「祝事の儀式」の準備が出来ることになったのである。

八月十七日、未明、Mさんは次の霊夢を見せられた。

Mさんは某所にいる。そこへ東宮御所の侍従の方が来られて次のように言われた。

「ここへ皇太子殿下ご夫妻が来られることになっていますが、もう六日も遅れているのです。ですが間もなくお見えになります。その時にはお話の出来る機会を作りますから、ぜひ「オイカイワタチ」のお話をして下さい。」

Mさんはそれに答えて……、

「そのことは、先日（八月一日）、皇太子殿下ご夫妻が近江神宮へご参宮になられました時、Y宮司さんを通してお話がしてあります。」

侍従の方は、「あ、そうですか、もうよろしいですね。」と言われ、大変に喜ばれたのであった。

この時、別の侍従の方が語られた。

「私もこの「オイカイワタチ」が手に入りましたので、読むことになりました。」

ここでMさんは目を醒まして不思議な夢だと考えたが、この象徴的な霊夢の真意を解することは出来なかった。

ところがこの日（一七日）、午前一〇時三〇分頃、東京のKさん（パラグアイにおられた方）より電話があった。その内容は次のとおりであった。

去る七月二四日、前述した、東宮御所のお付きの方より電話があり、先に妃殿下にご高覧

いただいた「絵画童話集」をお返しに伺いたいとのことであった。Kさんが恐縮して頂きに  
出向きますと答えると、妃殿下のご意志ですのでお伺いいたしますとの返事であった。

このような経過で、七月二十六日に東宮お付きの方は一人で来駕され、Kさんは、「オイ  
カイワタチ」のことや「幣立神宮」のことをゆっくりと語る機会を持たたのであった。

そして、Kさんの誠心のこもった素のままの語らいがお付きの方の心を動かしたのである  
う。お付きの方は、「〃オイカイワタチ〃を皇太子殿下に差し上げます。」と申され、完(上)  
までの四冊を持ってお帰りになられたのである。

Kさんはこの喜びの経過をW氏に連絡しようとその日以来思い続けて来たが、不思議にも  
その心が湧き起こらなかった。(ある力で伏せられていたとしか考えられない。)ところが  
一七日になると、この経過を語る時であるという心が起こったのである。これは、丁度Mさ  
んが霊夢を見た日であった。

さて、以上の経過を受けて、八月一七日のMさんの象徴的霊夢に戻ると、その真意は次の  
とおりであったことが判る。

去る八月一日に皇太子殿下ご夫妻が近江神宮に行啓されたのは前述のとおりであるが、そ  
の前日(七月三十一日)、Y宮司は東宮お付きの方に会われ、「〃オイカイワタチ〃がまだ殿  
下のお手許にお渡しができておりませんでしたらお渡し申し上げたい。」と申されたのであ

った。

このY宮司の発言は、実は天のお心であり、それをY宮司を通して語られたのに他ならな  
い。

東宮お付きの方がKさんに約束(殿下のお手許にお渡しする)した七月二十六日から七月三  
一日までは丁度六日間である。これがMさんの霊夢に現われた「六日間」であることは容易  
にお判りいただけよう。

こうして、Y宮司の天のお心を受けての語らいという助けの働きがあって、「オイカイワ  
タチ」完(上)までの四冊は殿下のお手許にお渡しできたのである。

また、去る七月八日幣立神宮において儀式が行われたことは前述のとおりであるが、その  
二日前、七月六日にMさんは次のような天の声を聞いていた。

「近江神宮の働きがあります。」

当時はW氏にもMさんにもこの意味が理解出来なかった。しかし、以上に述べてきた経過  
によってこの意味が明確になったことを付言しておきたい。

去る七月八日の幣立神宮における儀式によって皇太子殿下と地のワンダラーが結ばれたこ  
と、およびその結びの証しとして、「オイカイワタチ」完(上)までの四冊を殿下のお手許にお

渡してきたこと、以上によって、ヨーロッパにおいて行われる「祝事の儀式」が正しくなされるための準備はここに整ったのである。

~~~~~  
 八月八日、この日は立秋で、黄金色に光る美しい満月の周りを綺麗な七色の虹が幾重にも取りまいて輝いていた。

W氏はこの光景を一時間くらい眺めていたが、「今日は地球にとって大切な日である。」となぜか思えてならないのであった。

八月一日、午後六時三〇分、Mさんは次のような光景を見た。

ギラギラと輝く太陽の周りに幾重もの虹が重なっている。また、その太陽の中にはもう一つ太陽があり、中の太陽は早い速度でぐるぐると廻っていた。さらに、この二つの太陽は、雲で画かれた大きなZの文字の中にあつた。

八月一八日、午前一時三分、W夫人は天より次のような声を聞いて目を醒ました。

「清めの雨です。」

戸外には強い風が吹き、激しい雨が降っていた。この雨と風は、台風十号という形をとって日本列島を清めたのであつた。すなわち、「祝事の儀式」のための「清めの雨」であると判つたのである。

八月一九日、W夫人は、昨年八月に「エクアドルの儀式」へ出発する二、三日前に見たのと全く同じ光景、つまり、「黄金に輝く円盤」の形をした美しい雲を見た。

これは、来る二一日「祝事の儀式」のためにヨーロッパへ出発する我々に、勇気と祝福と励ましを与えられたものであると思つたのである。

八月二〇日、午前四時、Mさんの霊夢。

天空に巨大な左の御手（掌）が明瞭に画かれている。これを見たMさんは、「天の神様の御手である。」

とはっきり判つた。この御手の薬指と小指にはそれぞれ二個ずつ合計四個の光体が嵌め込まれており、形容し難い美しさで輝いていた。この光がMさんにふりそそぎ、全身がこの光に包まれた瞬間、み声が聞こえた。

『四つです。』

註 この意味はいずれ判る時が来るであろう。

八月二一日、

W夫妻とMさんの三人は、ヨーロッパにおいて行われる「祝事の儀式」に向けて、この日（二一日）、成田空港を発った。

（三人は、西ドイツ、英国、フランス、ベルギーを巡り、八月三一日、オランダに入った。ここで「祝事の儀式」が行われ、九月四日に帰国したのである。）

八月二九日、パリからブラッセルに向かう国際列車の中でW夫人は少し仮眠した。その時、「御嶽の山です。」との声で目を醒ました。列車の窓から目を外に向けると、不思議にも御嶽山そっくりの山が見えるのであった。

註 パリからブラッセルまでの道には、そのような（御嶽山のような）高い山はないのである。夫人は御嶽山を霊視したのである。

八月三〇日、未明、ベルギーのH氏宅にて、Mさんの霊夢。

①オランダの地に無数の円盤が飛来して勢揃いした。

②天と地の沢山の神々様はオランダの地にすべて勢揃いされた。

近江神宮のY宮司も参加されており、次のように語られた。私は貴女（Mさん）の肩に乗ってここに来ました。

ここに、明三一日、オランダの地において行われる、天の神様のなさる「祝事の儀式」の一切の準備は完了し、明日の儀式は正しく出来ることが示されたのであった。

八月三一日、未明、ベルギーのH氏宅にて、W夫人の霊夢。

場所は判らないが、三人（W夫妻、Mさん）が「儀式」を行っている。

その時、いつもの神様が現われられてこう言われた。

「ここまでよく来ましたね。」

W夫人は、三人が感謝と喜びの涙を流して「儀式」を行っているところで目を醒ました。

八月三一日（儀式の当日）。ベルギーのH氏の運転する車は午前九時H氏宅を出発、アントワープを経由してオランダに入った。さらにロッテルダム→ハーグを経て、アムステルダムの近郊（約一五km南）にあるアールスメアー（地名）に到着した。

アールスメアーは「黄色いフリージアの花の咲いているところ」であり、また花の生産地

では世界最大といわれているところである。

三人はとある小さな森の中に入り、ここで次の儀式が行われた。

『祝事の儀式』

祈り。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

私達は、天の神様のお導きにより、本日ここに参りました。

天の神様ありがとうございます。天の神々様は地の神々様と結ばれまして、また新しい地球、鏝球王国を統べたもう明仁皇太子殿下と地のワンダラーが結ばれまして、そして全ワンダラーがここに参加致しまして、天の神様がなさいます「祝事の儀式」の大御業に感謝申し上げます。

天の神様のお命じにられました「古い地球、古い世の終わりの戦い」は、天の神様の大愛によりすべて終わりを告げました。ありがとうございます。

天の神様のお命じにられました「新しい地球、神の国鏝球王国」は、天の神様の大愛により完成しました。ありがとうございます。

天皇陛下、長い間本当にありがとうございました。

明仁皇太子殿下ありがとうございました。

天の神様、これからも新しい地球、新しい世界、全ワンダラー、全人類、全動物、一切のすべてのものをお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、ここに「祝事の儀式」を行って下さいましたことありがとうございます。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

この「祈り」は西ドイツに着いた時から行われており、さらにこの日（三一日）には、儀式のあとでアムステルダムのホテルにおいても行われたのである。

九月二日、未明、アムステルダムのホテルにて、W夫人の霊夢。

三人（W夫妻、Mさん）の泊まっている部屋の窓のレースのカーテンが静かにゆれている。東側の窓は明け放たれている。

その時、天からある音楽が静かに部屋の中に流れて来た。やがてそれは「土星の音楽」であることが判った。

この音楽が終わると、終戦の日（昭和二〇年八月一五五正午）に聞いた天皇陛下の玉音放送と同じようなお声が天から流れて来た。この時、このお声は陛下のお声であると判った。

始めの方の内容は判らなかつたが、最後に陛下は次のように語られた。

「御苦労様でした。」  
「帰りにも祈って下さい。」

このお言葉だけが明瞭に聞こえたのであった。

この日（二日）、午前七時頃、アムステルダムのホテルにて、三人は次のような光景を見た。

東の空一杯に巨大なVの文字が画かれている。このVの文字は鮮かなオレンジ色に染まっていた。

暫く眺めていたW氏は、これを写真に納めようと思いつきカメラを向けた。するとその時、その姿は急速に消え始めた。

と同時に輪郭のはっきりした真赤な太陽が現われ、これが三〇分くらい見えていた。やがてこの太陽も全天を覆う雲に隠され、昼頃より、ヨーロッパに来て初めての雨が寒々と降り出した。

九月三日、早朝、一行はアムステルダムを発ち、フランクフルト↓ハンブルク↓アンカレジ経由で帰国の途についた。この間、日本に着くまで三人は、「祈り」を真剣に続けたので

あった。

九月四日、午後二時、一行は成田空港に無事到着した。

台風一二号の影響で各地は風雨と雷に襲われていたが、一行が到着した時は、成田は雨の上だった直後であった。これは昨年「エクアドルの儀式」を終えて帰国した時と同じ光景であった。

九月七日、未明、Mさんの霊夢。

この夢の前と後にもなにかがあったが、記憶に留めることが出来なかった。ただ次の会話だけが明確に記憶されている。

Mさん「私はまだオランダにいますね。」

天の声「そうです。あなたはまだオランダにおります。」

この時、Mさんは、「自分の魂はオランダにいて尊きお方を待っている。そのお方がおみえになられることにより、その尊いお方と一緒に「祝事の儀式」が行われる。これが行われることにより、「祝事の儀式」は全部終わるのである。」と思えて来たのであった。

ダに行かれる。そしてルーマニア、ブルガリア、ベルギーを巡られて一四日に帰国される。

これまでも再三記述してきたが、この「祝事の儀式」は皇太子殿下と結ばれて行われるものであるということが、ここにご理解頂けると思う。

九月一二日、午前五時三五分、W夫人の夢。

夫人は大汗をかき、痛むお腹をおさえながら「御嶽山」を登って行くのであった。

九月一四日、午前二時三〇分頃、W夫人の夢。

天より声がした。

「ネックレスを外して御嶽山に登るのです。」

註 ネックレスとは、上べを飾る心、即ち真をかくす我の心を意味する。

九月一六日、W氏は早朝より「尾張戸神社」に参拝したいという靈感を受けた。

正午、W氏は「屋張戸神社」にお詣りし、次のような祈りを捧げた（要旨のみを記す）。

私達は、ヨーロッパの地において「祝事の儀式」を終えて去る四日に帰国しました。皇

太子殿下ご夫妻は来る一〇月五日に日本を出発され、ヨーロッパの地で「祝事の儀式」をなさって一四日に帰国なさいます。これにより「祝事の儀式」は終わります。

ここに、古い地球、古い世は終了します。

どうか古い地球、古い世の「おわりの戸」を開いて下さいますようお願い申し上げます。

「おわりの戸」を開いて下さいますことにより、ここに新しい地球、神の国が現われて来ますことを感謝申し上げます。

私は、天の神様のお導きにより、本日参りました。このこと（おわりの戸を開くこと）をお願いに参りました。ありがとうございます。

註 翌日（一七日）、不思議にもある方が、「スフィンクスの声」という

聖典の抜粋を送って下さった。W氏がたまたま靈感を受けてお詣りした「尾張戸神社」の所在するところ（旧愛知県東春日井郡東谷山）について、「スフィンクスの声」では次のように語っている。

「汝らよ、尾張の国は始まりの国なり。そはもの終わる処は、もの始まる処なればなり。——略——ここ（尾張戸神社の在るところ）は世界のをわりの処よ。人皆、その歩みをこの処に踏み止めて、いでや、ただなる生ものとしてのをわりをば告げ、神の世の神の子としての始まりにぞ入らむことの祝でたし。」

「スフィンクスの声」を信奉されている方々は、「ここ」とは、東谷山、尾張戸神社のある地であり、また神様（天祖）のお導きにより、神話と古代の歴史を背景として定められた地であると語られているのである。

W氏には、このあと（ヨーロッパより帰国のあと）、沖縄の「湧玉の地」において、この地球の「形の世界」（霊界、幽界）の「湧玉の儀式」および「祝事の儀式」がここに終了した旨を報告し感謝する儀式を行わねばならないということが、すでに早くから判っていた。しかし、帰国後、少しもその心が湧き上がらないのでそのまま心かけずに過ごしてきたのであった。

ところがこの日（一六日）、東谷山の山頂にある尾張戸神社をわりとへの参道の坂道を登っている時、次の靈感を受けた。

「皇太子殿下ご夫妻がヨーロッパよりご帰国になってから、沖縄の湧玉の地に行くのである。」

この日（一六日）、Mさんも次のような靈感を受けた。  
正午。

「沖縄での儀式は、皇太子殿下ご夫妻が訪欧からお帰りになってから。」

午後二時三〇分、

「その日は、一四日が良い。」

午後三時三〇分頃、

天井に次の図柄が画かれたのを霊視した。



罫 米はかなめの意、統べ括るの意、しめくりの意、天地のかなめの意、  
天地を貫ぬくすめらみのことが立つ意。

来る一〇月一四日に行われる「沖縄の湧玉の地での儀式」は、この地球の霊界、幽界における「湧玉の儀式」と「祝事の儀式」の終了を受けてのしめくりの儀式である。これによって、天地を貫ぬいてすめらみ、ことがお立ち上がりになるのである。

ここに来る一〇月一四日の儀式の重大性がご理解頂けるものと思う。

九月二十七日、未明、Mさんの霊夢。

東京のKさんが催された会合に、多くの人達が集まっている。Mさんは生後三ヶ月くらいの男の赤ちゃんを抱いて出席している。

この赤ちゃんは極めて高貴なお方で、全身に清純無垢にして尊い波動がただよっている。

それは正しく高き尊き神の子であると判るのであった。その時、天より声がした。

「このお方は皇太子です。」

Mさんは、今の世（古い世）には既に皇太子殿下（明仁殿下）はお見えになるからおかしいではないかと疑った。すると再び天より声がした。

「次の世の皇太子（浩宮様のこと）です。」

註 「オйкаイワタチ」に既に述べられているとおり、新しい地球の「霊の世界」、「たましいの世界」では既に明仁殿下は即位され、「天皇」の御位についておられる。そして、浩宮様は新しい地球の皇太子として誕生されていることの象徴的霊夢である。

一〇月一日、

去る二五日、南方洋上に発生した大型十六号台風は、大きな雨と風をとまって沖縄、奄美大島を清め、一日に日本列島を縦断して北海道に達した。即ち日本列島全土は台風十六号という形をもって「清められた」のである。

思えば去る八月一八日に台風十号の雨と風が日本列島を通り抜けた時、天は「清めの雨です。」と言われた。これは、ヨーロッパ（オランダ）の地で行われる「祝事の儀式」に出発

（八月二一日）する四日前のことであった。したがって、今回の十六号台風は、皇太子殿下ご夫妻がヨーロッパ（オランダ）の地で行われる「祝事の儀式」にご出発（十月五日）になる前の「清めの雨」であることがよく判るのであった。

一〇月四日、午後六時頃、Mさんは、東の空に、雲で画かれた鮮明な二羽の鳳凰が舞っているのを目撃した。

註 二羽の鳳凰は皇太子殿下ご夫妻を表わし、ヨーロッパ（オランダ）での儀式に出発される瑞祥である。

一〇月七日、Mさんは、東の空、東谷山方向に、巨大な美しい虹が二つ、くっきりと天を染めているのを目撃した。（10月8日付の朝日新聞に「美事な虹」として写真が掲載された。）この時、次のように直感したのであった。

「皇太子殿下ご夫妻のオランダの地における『祝事の儀式』は無事に終わった。」

一〇月二一日、未明、Mさんの霊夢。

Mさんの身体は空中に浮かび夜空を眺めていた。そこには冬の夜空のように星が一杯また

たいている。すると次のようなものが目に入った。つまり、四つの大きな光とそれらを結ぶ光の線でできた四角形で、これが暫くすると天空を乱舞し、やがて消え去った。続いて夜空には、前のものよりは小さいがとても美しい光がひとつ現われ、暫くダイヤモンドのように輝いたのち縦横無盡に飛び交い、これもやがて消え去った。

註 去る八月二〇日（「祝事の儀式」にヨーロッパへ出発する前日）の天の御声、「四つです。」に関連することであろうか。光の飛び交ったことにより示された意味も、共に理解できる時がやがて来ることであろう。

一〇月一四日（儀式の日）、

午前七時、沖縄ひめゆりの地、新しい地球、鏢球王国の湧玉の地にて次の儀式が行われた。参加者は、W氏とMさんであった。

儀式が行われているあいだ、この季節というのに一／＼二羽の鶯うぐいすが美しい声で鳴くのが聞えた。しかし儀式が終わると同時に鳴き声はやみ、それ以後は一度も聞かれなかった。

儀式。

「天の神様にご報告とお礼の儀式——しめくくりの儀式——」

祈り。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

私達は、本日、ここに、天の神様のお導きにより参りました。

天の神様、ありがとうございます。ここに、ご報告申し上げます。

サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様、ありがとうございます。ここに、ご報告申し上げます。

「オランダの地」にて、皇太子殿下ご夫妻と私達ワンダラーは結ばれまして、天の神様がなさいます『祝事の儀式』が行われました。誠にありがとうございます。皇太子殿下ご夫妻は、東欧を巡られ本日（一四日）ご帰国になられます。

この日、私達は、新しい地球、神の国鏢球王国の湧玉の地に参りまして、本日、ここに『祝事の儀式』が無事に終わりましたことを、天の神様につつしんでご報告いたし、またお礼を申し上げます。

天の神様、ありがとうございます。ここに地球（霊界、幽界）における『湧玉の戦い（儀式）』と『祝事の儀式』のすべてが終わりましたことを、つつしんでご報告申し上げます。ありがとうございました。

ここに、天の神様に「しめくりの儀式」をして頂きましたこと、ありがとうございました。

これまでの永い永い間、地球を、全世界を、すべての人々、全人類、全動物、一切のすべてのものをお守り、お導き下さいましたこと、ありがとうございます。

新しい地球、新しい世にありましても、すべての人々、全人類、全動物、一切のすべてのものを、お守り、お導き下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、サナンド様、カミラ様、神々様、地の神々様、ありがとうございます。

形の世界の「霊界・幽界」の『湧玉の戦い（儀式）』は、昭和五三年一月二六日に行われた「古い地球葬送の儀式」をもって終わり、また、昭和五四年一〇月一四日に『祝事の儀式』が沖縄の湧玉の地にて終わり、同時に『しめくりの儀式』が行われて、ここにオйкаイワタチの使命は終わった。

よって、これからは事態が大きく転換して行くのである。

ここで注意せねばならないことがある。それは、オйкаイワタチの使命が終わってもワンダラーの使命が終わったのではないということである。去る六月九日に、「ワンダラーは最後まで戦うのです。」と天が語られているとおり、ワンダラーは最後の最後まで戦うのであ

る。ワンダラーはこれを決して忘れてはならないのである。

そして、これまでは目に見えない世界での戦いであったが、いよいよ“こと”は、目に見える現象の世界での戦いの場面へと大転換して行くのである。

## 第四章 十六皇子昇華の儀式

一〇月三〇日、Mさんは地下鉄の電車の中で数分間仮眠した。その時、次の光景を霊視した。

「神様が杖（如意棒）を持たれて、こちらに向かってとても早足で歩いて来られる。」この神様のお姿を拝したMさんは、「ことはとても早い速度で進行している」と感じた。そして、神様がこの杖をお振りになられると、まず日本においての大浄化が行われ、続いて全世界の大浄化がなされると思ったのである。

十一月八日、福岡県宗像郡のSさんが、靈感のままに、W氏とMさんに会うために来駕された。

Sさんは、宗像三神に深いご神縁を有する霊覚者である。この方が突然来訪されて、開口一番、

「ことは大変に早くなりました。それを申し上げるために参りました。」と申されたのであった。

W氏は、Sさんの来訪には、このことと、これ以外にも意味があると思った。その意味は近い内に判る時がくると直感したのであった。

十一月九日、ワンダラー五人が自然に集まることになった。そしてお互いに語り合った結果、これは「儀式」であると判るに至った。

ここに天の歯車と地の歯車が完全に噛み合せて動き出した。歯車の動きは巨大なコンベアの流れとなり、早い速度で世の終末の期を迎えることになった。

ワンダラー五人が期せずして集まったこの話し合いは、天の神様に、「いよいよ、早い速度で、終末の流れを大きく動き出させて頂くようお願いの儀式」になったと全員が確認した。

続いて、S氏は、古いワンダラー達の今後のあり方と学びについて、「今ノは難解の無為のノンキと離託を正しく学ぶ時である。」と、最近の体験で学んだこと、受けた靈感などを語ったのである。

十一月一六日、前記のSさんより電話が入った。

「来る一月二一日、九州、阿蘇の幣立神宮（日の宮）にて、『神祇』を行います。この神祇にW氏とMさんのご出席を願いたい。」という内容であった。

この電話に対して、二人（W氏とMさん）は心になんの抵抗も持つことなく、これは大切な儀式であると直感したのである。そして、この重要な儀式に出席せねばならないと明確に判るのであった。

さらに、先日（八日）、Sさんが靈感のままにW氏とMさんを訪れられたのは、今にして思えば、この来る二一日、日の宮での「神祇」のための準備を整えられるためであったと判ったのである。

一月一九日、未明、Mさんの霊視。

Mさんの眼前に、黄金に輝く次の文字が大きく現われた。

「華」

Mさんは、天に向かって、『ハナ』と読むのかな？ 『カ』と読むのかな？と問うたが、答は返って来なかった。

この時、「この『華』は、来る一月二一日、日の宮にて行われる儀式（神祇）に関係があるのですね。」と語っているところで目を醒ました。

一月二〇日、Mさんは「華」について考えを巡らしていると、「昇華」という靈感を受けた。したがって、来る二一日の日の宮における儀式は「十六皇子昇華の儀式」と決定されたのである。

十六皇子昇華の儀式について。

昭和五四年八月下旬から九月上旬にかけて、米国で、四十八ヶ国の宗教者が集まり、「全世界宗教者会議」が開かれた。この会議には、日本から、『古来神道』を代表してK氏も出席された。

この宗教者会議は、宗教者の集まりということであったが、実は全世界十六方位より、十六皇子のみだが、世界各国の霊覚者の肩に乗って集まられていたのである。

十六皇子とは、神代の御世、日本の天皇の皇子（金星の高天原よりご降臨になられたみたまの方々）として、地球の全世界、十六方位に派遣され、その地を統べる中心者となって守りに着かれていた十六人の皇子のことである。

この地球においては、これまでの度び重なる（過去六回）「失敗の世の終わり」の戦いのため、全世界十六方位におられる十六皇子のみたまは皇国（日の本）に帰ることが出来なかった。皇子の中には、その地で眠りに入ったお方も多くあったのである。

ところが今回、初めて「正しい世の終わり」を迎えることが出来ることになった（「オイカイワタチ」全巻に記述）。つまり、天の神様のお命じになられた「湧玉の戦い（儀式）」と「祝事の儀式」が、今回は出来たことにより、「正しい世の終わり」、即ち「レタマヤの世の終わり」を迎えられることになったのである。

これによって、永い間動くことも帰ることも出来なかった十六皇子のみたまは、ここに目覚められ立ち上がられ、日の本に帰ることが出来ることになったのである。

そして、全世界宗教者会議に出席された霊覚者の肩に乗って集まられた十六皇子のみたまはK氏の肩に移られて日の本に帰られた。つまり、K氏のお役は十六皇子のみたまを日本までご案内して来ることなのであった。

さらにSさんは、K氏より十六皇子をお迎えし、お移り頂いて、地球の天孫降臨の地、日の宮、幣立神宮にご案内してご帰宮とお鎮りを頂く「神祇しんぎ」を行うご使命を頂いておられるのであった。

よって、Sさんは去る十一月十六日、K氏のところへ十六皇子のみたまをお迎えに行かれたのである。この時、次のような靈感を受けられた。

「宇宙惑星（金星のこと）の十六皇子のみたまをゆさぶり、目覚めさせて、全世界十六方位の外国とこよの国々より、日の本、日の宮にご帰宮いただくことが出来るのは、オイカイワタ

チ”の働きによるものである。」

さらに、来る二一日、日の宮にて行われるこの神祇は、「オイカイワタチ」のW氏とMさんの参加があつて果たせるのであると判った。よって、この日（十六日の夜）、前述のとおりのお誘いをされることとなったのである。

十一月二一日、午前一〇時三〇分より、幣立神宮（日の宮）にて、W氏とMさんの二人は次の儀式を行った。

「十六皇子昇華の儀式」

祈り。

天の神様、サナンド様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

幣立宮（日の宮）の神々様ありがとうございます。

私達は、本日ここに、天の神様のお導きにより参りました。

先に「湧玉の戦い（儀式）」を終え、またこのたび皇太子殿下ご夫妻と結ばれまして、ヨーロッパにて「祝事の儀式」が行われました。続いて、去る十月十四日、沖繩の湧玉の地における「しめくくりの儀式」をもって、すべて終わりをづけました。

よって、本日、ここ日の宮に、天照大御神様、天孫の神々様、高天原の神々様をお迎え出

来ましたことありがとうございます。

また、地球の全世界各国、十六方位におられました十六皇子のみたまが、本日、ここ日の宮にご帰宮、お鎮まりになられましたこと、ありがとうございます。

天の神様、本日ここに、十六皇子が金星の高天原に昇華なされ、新しいご使命を頂かれて再び新しい地球、鏖球玉国にお降り下さいますようお願い申し上げます。

ここに「十六皇子昇華の儀式」をして下さいましたこと、誠にありがとうございました。

これまでの儀式（地球の霊界、幽界における聖戦）が成されたことにより、古い地球は終末の期を迎えたのである。即ち、聖戦は現象の世界における戦いに突入したのである。

二月一日、午後六時三〇分、美しく照る月の右側に、白い雲で、「光」の文字がはつきりと画かれた。これを目撃したMさんは、これは明日二日の儀式に関係があると思った。

二月二日と三日の二回にわたってワンダラー二〇名が集まり、次の儀式が行われた。

「現象の世界の世の終わりの儀式」

「金星の輪の儀式」

「ワンダラー出陣の儀式」

S氏が開会を宣し、W氏がこれまで（去る五月一三日の「地のワンダラーみそぎの儀式」以降）の経過を語り、続いて今日の儀式について次のように説明した。（大要）

天の神様のお命じになられた「オイカイワタチの使命」、つまり「湧玉の戦い（儀式）」と「祝事の儀式」を終えたことにより、神代の御世に全世界十六方位に派遣されていた日本の天皇の十六人の皇子のみたまは目覚められて、日本の「日の宮」に初めてご帰宮になられ、そして、金星の高天原に昇華され、再び新しい命を頂かれて、地球に降りられるのである。ここに「形の世界」の霊界、幽界での聖戦は終了したのである。

これが出来たことにより、ここに現象の世界において、いよいよ終末の期を迎えたのである。よって、ここに、「現象の世界の世の終わりの儀式」を行うことが出来たのである。

以上が二月二日のW氏の話であった。

この儀式の「真」を身にしみて理解されたワンダラーI・H氏から靈感で書かれた次のような手紙が送られて来た。

——前文略——去る二日、「現象の世界の世の終わりの儀式」に参加出来たことに感謝いたします。

儀式に参加させて頂いたあと、色々と思いの湧き出ずる意義の深い儀式であることを天の神様より教えて頂きました。

天の神様、サナンダ様、神々様の宏大な大愛を知り有難うございました。

この儀式について感じましたことを述べることをお許し下さい。

「現象の世界の世の終わりの戦い」は「エクアドルの戦い」のような感じを受けました。いよいよ現象の世界で戦いが始まったことを、儀式の最中から強く感じました。物凄じものが噴き出す戦いであるということを自覚しました。

また我々ワンダラーのこの戦いに臨む心がまえを、深く天の神様、サナンダ様から教えられたことを感じました。

ワンダラーは、今まで、「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」、「霊界、幽界」で働いて来ました。今度はいよいよ最後の「現象の世界の世の終わり」を迎えるにあたり、今までの経験というものを基にして戦いに臨んではいけないように思われます。

これまでの経験は、真の元霊の中に還元されています。

これからの現象の世界では、これまでの働き、経験、体験（即ち、今まではこうであったとか、このようにして私は戦って来たとか、今までの経験、体験）を混えて戦おうとしたら、この重大にして最後の現象の世界での戦いは、とても乗り切れるものではないことを感じます。

まず、ワンダラーは素になって、素の儘の心になって、どんな場面でもお受けすることの出来る霊感を受けるべきと思います。

特に注意すべきは、今までの働きの経験が、かえって素のままなる心を曲げたものにして行く危険性があるということです。

毎日毎日が生まれたての赤子のような心でないと、現象の世界において世の終わりの戦いを働くワンダラーの使命は果たせないと思います。

この儀式は、天の神様、サナンダ様の大愛が深く深くにじみ出て、ワンダラー一人一人に新しい心と勇気をさずけて頂いた儀式ではないかという気がしています。

今度の現象の世界の戦いは急速であります。すでに儀式の最中から始まり、今／＼現在も次から次へと矢つぎ早に展開しているように思います。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

万たる目覚めたるワンダラーと共に、天の神様、サナンダ様の御手の中で戦っていることを感謝いたします。

重大な儀式に参加出来ました喜びに、思わず湧き出ずるまま筆を取りました。 敬 具

~~~~~  
 続いて一二月二三日、「金星の輪の儀式」、「ワンダラー出陣の儀式」に臨んで、W氏は次のようにその意義を語った。

現象の世界における世の終わりの戦いとは、言葉を換えれば、「エクアドルの戦い」なのである。書籍「オйкаイワタチ」完(上)234頁に、『……目に見えない世界での「エクアドルの戦い」はここに終了を告げた……』とあるが、いよいよ現象の世界において、ワンダラー全員が「エクアドルの戦い」に出陣する時が来たのである。

エクアドルの戦いについては、別冊(二)第三章68頁より、また完(上)第三部191頁より記述されている。(註 この書の191頁にも記されている。)この機会に再度お読み頂いて、この戦いの厳しさ、壮絶さを知って頂きたい。

この戦いは、ハルマゲドンの戦い、サタンとの戦い、あるいは曲神まがつかみとの戦いとも言われている。

たかるカルマを、サタンの力を、決してあなどってはならない。サタンは僅かな心の隙間すきまから入り込み、入り込んでしまうとそれに中々気付けないのである。そして知らぬ間に我が心が広がって、サタンと化してしまうのである。

心の隙間とは、私の心、企む心たくむこころ、計いの心はかりこころ、飾る心かざ、良く見せようとする心、うそ、いつわりの心等々であり、これらのものからサタンは入り込み、心を奪ってしまう。

大切なのは、企み、計いの心を持たない、心の礼儀、ノンキの心、素の儘の心である。これらの心をもって、ワンダラーは、真に目覚めて、岩をも通す真の信念と共に勇ましくこの聖戦に出陣するのである。

去る一二月一〇日、未明、Mさんの霊夢に、「その時は来たれり。」との天の声と共に軍服姿の近江神宮のY宮司が立たれた。そして、「これより戦争に行きます。」と語られ、馬上りりしく出陣されて行く勇姿を見た。

これまでのワンダラー達の働きの場であった、「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」、それに「形の世界の霊界、幽界」においては、その働きは、ワンダラー達の元霊もとひ(真の魂)が主体で成されてきた。そのため、中には肉体の心と意識では充分の理解に達しないままここまで来られたワンダラーもおられたようである。(それでは本当の役は果たせないのである。)

しかし、こと、はいよいよ形の世界の「現象の世界」において終末とぎの期を迎えるに至っ

た。そこで、当然これからは、ワンダラー達は心と意識と肉体において十分に理解して、「世の終わり」を戦わねばならないのである。

したがって、これからをよく戦うためには、真の元霊もとひの玉の光をこの肉身に受け入れて、元霊と肉身が一つに結ばれること（宙）自分の本当の魂に心と意識と肉体が完全に目覚めること）が大切である。これが出来て初めてこれからの現象の世界での使命が果たせるのである。

この真の元霊の輝く玉と心と意識と肉体が一つに結ばれる儀式（即ち、真に目覚めること）が、「金星の輪の儀式」である。

また、「金星の輪の儀式」には次のような重要な意味が秘められているのである。

それは、地のワンダラーが、地球が、金星の輪の中に入ることである。

それには、まず、地のワンダラーが金星の輪の中に入らねばならない。金星の輪の中に入るとは、自分の真の元霊の玉をこの肉身に受けて、元霊と肉身が一つに結ばれることを意味する。即ち真の目覚めである。

真の元霊の輝く玉を心と意識と肉体に頂くには、地のワンダラーは真我の吾れ（自分の本当の魂）に、目覚めねばならない。そしてはじめてこれを受けることが出来るのである。真我の吾れに目覚めるまでは、金星の輪の中に入れないのである。

したがって、「金星の輪の儀式」とは、真我の吾れに目覚めた方から金星の輪の中に入れる時に至ったことを神様が宣言されたという意味を持つものなのである。

ワンダラーが真我の吾れに目覚めるということは、人類が真我の吾れに目覚めるということである。これは、「ワンダラーの目覚めは人類の目覚めである。」という言葉で度々述べて来たとおりである。

地球を代表するワンダラー（万たるワンダラーも含む）が真に目覚めることは、地球という惑星が金星の輪の中に入ることである。それには、地球が高く変化することであるにとどまらず、我々の太陽系も、さらにこの大宇宙も高く変化するという極めて重要な意味があるのである。

ここで大切なのは、現象の変化が起ってから、その苦しみの中でようやく真に目覚めるのはワンダラーではない、ノということである。それでは遅いのである。今、真に目覚めなければ悔いを千歳に残すぎりぎりの最後の線に立たされていることを、ワンダラーは知らねばならないのである。

これまでは、古いワンダラーと万たるワンダラーとが区別されて来たが、それは、「オイカイワタチの使命」が終わるまではそれぞれに働きの場の違いがあったからである。

しかし、世の終わりの戦いが最後の現象の世界における戦いとなると、この世界での戦いには、古い新しいの区別はないのである。ワンダラー全員が一体となって聖戦を戦い、新しい地球を誕生させ、建設する時が来たのである。

さあ、時が来た。ワンダラー全員が真我の吾れに目覚めて金星の輪に入り、現象の世界の終わりの戦い、エクアドルの戦いに向かって立ち上がり、出陣する時が来た。

さあ、神様の聖戦に立ち上がり、出陣のラッパが高らかに鳴り響いている。

ここに「形の世界」の現象の世界の終末の期を迎えたのである。

これをもって「ワンダラー出陣の儀式」とする。

以上が、一二月二日に続いて二三日の儀式の意味にかんする話であった。

続いて、Y氏が次のように語った。

のんきについて

• のんきと神様を信じることはイコールである。

• どれだけののんきになれるかということ、つまりどれだけ神様を信じ切れるかということである。

• 神様を信じることでなく、なにか他のものに頼ってのんきを得ようとしても、そのもの

がなくなれば、すぐにのんきは崩れてしまう。(ニセモノののんき)

• 絶対に崩れない「のんき」は、神様を信じる以外からは生じえない。

• ルシファーもオリオンも、神様を信じ切れないところからのんきを失ない、まちがった道に入った。

• では、どうしたら神様を信じ切れるか。これには、今のところ次の方法しかないように思われる。

つまり、どんな場面が展開してきても、常に「神様を信じます」という道を選ぶこと。

(たとえば、船が常に北極星を見当にして進むように)

• これは、口で言うのは簡単であるが、実際には大変なことであろう。しかし、ワンダラーにはそれが出来る筈である。(また、そう誓って降りてきたのであるから。)

• 神様を信じることは、無報酬の行為である。

• だから、ほんの少しでも心中に報いを期待して信じた場合、ことが期待どおりいかなくなると→神様を信じ切れなくなる→蹴るカルマ→のんきを失う。

• 神様は、ワンダラーとして最も良く働ける場は与えて下さるが、それが我の心で期待するものと一致するとは限らない。(むしろ食い違う方が多いであろう。)

• 自分のいまいる場が、一番ワンダラーとして働くにふさわしい場であると認識すること

も、のんきにつながる。

サタン（注）の攻撃について『自我のあるところにサタンがいるのです。』

・サタンは、いくら強力でも、ワンダラーの「マコト」には手を触れることはできない。  
 （サタンにとって、マコトほど恐ろしいものはないのだから。）

・したがって、ワンダラーがマコトをサタンに奪われるということはありえない。（ワンダラーがマコトを失くすときは、自分から捨てるのである。）

・もしサタンがワンダラーのマコトにまで手を出すことができたら、力ではサタンの方がはるかに勝っているのだから、地のワンダラーは全員マコトを奪われて、今までだけひとりとして生き残ってこれなかったであろう。

・だから、サタンは、ワンダラーに対して、本質的、致命的な攻撃をかけてくるということとはできない。

・したがって、サタン（マコト）の攻撃は、ワンダラーの本質（マコト）には触れず、周囲から各ワンダラーの弱点をねらって、マコトを捨てさせようとするものになる。

・しかし、この弱点というのは、実は各ワンダラーが解くべく分担してきた地球のカルマである。

・あるいは、余分な、不必要なカルマの場合もあるが、この場合も、余分なカルマをひろってくる原因は、身にもつカルマである場合が多い。（カルマがカルマを呼びこむ。）

・だから、ある意味からすれば、サタン（マコト）の攻撃というのは、各ワンダラーに、自分がどういうカルマを分担してきたのかということを教えてくれるものとも解せる。

・したがって、このカルマをいたずらに自分の弱点とのみ考え、

↓自分は、こんな、ひどい、醜い人間だ。

↓こんな自分に、果たしてワンダラーの資格があるのか？

↓こんな自分にはとてもワンダラーの役は務まらない、この役を返上したい……。

という思考ルートをたどるのは、自らサタン（マコト）のワナにはまるものである。サタンは、こういうプロセスをたどってワンダラーがマコトを棄てるのを期待して、各ワンダラーの弱点（すなわち身にもつカルマ）をついてくるのである。

・だから、この場合には、自分の弱点はすなわち自分が分担してきた地球のカルマである  
 と見て、この弱点（つまりカルマ）を正面から見すえることが大切である。

・カルマを正面から見すえるということは、すなわちカルマを自らのワンダラーのマコトで照らすということである。

・この作業は多大の苦痛を伴う。つまり、マコトの光によって、自分（のカルマ）の醜さ、

汚なさを、隅々まで、徹底的に思い知らされることになるからである。

・しかし、これがカルマを解くということの本質である。

・だから、自分に弱点がいくら沢山あっても、絶対に自己を卑下してはいけない。(これはサタンの思うツボである。)むしろ、それだけ沢山のカルマを自分は(解くべく)引き受けてきたのだと考え、自信を持つべきである。

・自分の引き受けたカルマは、必ず解けるし、また解かねばならない。なぜなら、このカルマは、ワンダラーの本当の魂が解くことを神様に誓って引き受けてきたものだからである。

・ひとつのカルマが解ければ、その点にかんしては、サタンはもう二度と攻撃をしかけてくることができなくなる。↓ラタカルタの靈感。

・だから、カルマを中途半端に押しこめて、解いた解いたと言っている場合は、そこをまたサタンに攻撃され、解けていなかったことを思い知らされる。

・サタンをあなどってはならない。しかし、サタンは、ワンダラーのマコトには手を触れることができないのだから、不必要に恐れることはない。自信をもって進むことである。

むすび

ワンダラーの使命の根幹は、結局やはり地球のカルマを解いて、地球を神の国にするということであり、このことのみは昔も今もずっと不変であるということ。いろいろな段階で、

戦いの様相は違ってきても、結局ワンダラーのやらなくてはならないのはこのことであると強く再認識したのである。

第二部 「形の世界」(現象界)の終末の期<sup>とき</sup>を迎える

## 第一章 万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)

昭和五五年(一九八〇年)一月一〇日、午後九時、Mさんは天より次の声を聞いた。

『静かに、静かに!』

Mさんは天に祈りを捧げた。すると再び声があった。

『初めてお出まし。』

さらに、この声のあと次のように言われた。

『(宗像)三神です。』

『天です。今、あなたに紫の涙をそそいでいます。』

一月一八日、未明、Mさんの霊夢。

W氏とMさんは、『エクアドルの儀式』(昭和五三年の「エクアドルの儀式」ではなく、これから行われるべき「エクアドルの儀式」をさす。)が行われたあと、アメリカのデンバ

―市に住む、宇宙人とのコンタクトマンであるE・T・W氏（Mさんは、これまで一面識もなかった。）のところを訪れた。そこでは数名の青年達が彼（E氏）と語り合っていた。宇宙の「真」をまわりに語っている時は、彼には、日常生活とは全く別人のように厳しく強いものがあつた。

② 「形の世界」の現象の世界の終末の期ときを迎えて、昨年（昭和五四年）

一月頃より、W氏とMさんには、『エクアドルの儀式』を行うために、再びエクアドルへ行かねばならないという思いが強くなってきた。（その時期は判らなかつた。）しかし、以前（昭和五三年）の『エクアドルの儀式』が余りにも厳しく苦しいものであつたため、この儀式についての積極的な考えを避けがちになつていたのであつた。この霊夢は、このようなW氏とMさんに対して、新たな『エクアドルの儀式』についての積極的な考え方と、さらには決意を促がす意味を含んだものであつたのである。

一月二〇日、未明、Mさんは天より次のテレパシーを受けた。

『御嶽山おんたけさんの働きは一九七九年で終わりました。』

一月二七日、東京新宿にて、初めての「オイカイワタチ講演会」開催。

二月一日、Mさんの霊夢。

書籍「オイカイワタチ」はこれから多くの知名の人達に読まれる。それが縁となつて多くの人達に「オイカイワタチ」が読まれるようになる。

二月二日、四国琴平の金刀比羅宮にて、W氏とMさんが参加して、次の儀式が行われた。

『エクアドルの戦い出陣の儀式』

祈り。

天の神様、サナング様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

金刀比羅宮の神々様ありがとうございます。

私達は、本日ここに、天の神様のお導きにより参りました。

去る昨年一月二二日、幣立神宮にて『十六皇子昇華の儀式』が行われました。ここに「形の世界」の終末の期ときを迎えました。

新しい地球、鏝球王国の守りの新しい命めい（使命）を頂かれて再び降臨されました十六皇子と全ワンダラーが、ここ金刀比羅宮に集まりまして、神々様と共に、天の神様のなさいます

『エクアドルの戦い出陣の儀式』をここに行って下さいましたことありがとうございます。これにより全世界に向かって出陣（航）なさり、世界各国を巡られ、エクアドルにて天の神様がなさいます『エクアドルの儀式』に全員の方々がつつがなく参加出来ますように、また、十六皇子は、天皇を中心として全世界十六方位におつきになられて、正しい守りとなりますようお願いします。

これからも十六皇子、全ワンダラーをお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

二月一〇日、近江神宮にて次の儀式が行われた。W氏とMさんがこれに参加した。

『全世界に、新しい世の時を告げる鐘（漏刻の響き）を打ち鳴らして頂く、お願いの儀式』  
去る一月中頃、Mさんは「漏刻の響き」というテレパシーを受けた。しかし、その意味するところは理解できなかった。

ところが、今年（昭和五五年）に入ってからW氏とMさんには近江神宮へお参りに行かねばならないという心が湧き上がって来るのであった。よってこの日、近江神宮へ参宮し、この儀式が行われることとなったのである。

註 近江神宮の御祭神である天智天皇は、日本で最初に時計を作られたお

方として知られている。「漏刻」とは、天智天皇が作られた一種の水時計のことである。

二月二一日、伊勢神宮にて、次の儀式が行われた。W氏とMさんがこれに参加した。

『近江神宮での儀式（全世界に「その時」を告げる鐘を鳴らして頂くお願いの儀式）を報告し、この時を告げる「漏刻の響き」と共に、天照大御神様の「言霊の響き」を全世界に鳴り響かせて頂くお願いの儀式』

註 W氏とMさんは、今年（昭和五五年）の新年早々から、近江神宮と伊勢神宮へ参宮せねばならないという靈感を受けていた。（近江神宮では前記のとおり儀式が行われた。）

二月二四日、大阪市教員会館にて、第一回の「オйкаイワタチ大講演会」が開かれた。私達は、今より一年半くらい前に、このような講演会があることを天よりたびたび知らされていた。しかし、組織を持たない私達には、この講演会がどのようにして催されるかは全く想像もつかないことであった。ところが「オйкаイワタチ」の熱心な読者の方々が集まられ、発意されて、自然の流れのうちに現実となったのである。しかも、この講演会は、単に

「オйкаイワタチ」の話を語るといっただけのものではなかった。実は、これは講演会という形をもって『万たるワンダラーに真を語って聖火を点火する儀式』であったのである。

この日（二四日）の講演が後半に入った頃より、Mさんの耳には、地球全土で一斉に打ち鳴らされているあらゆる種類の「鐘の響き」が天上より聞こえて来た。この鐘は講演が終わったあとも鳴りやまず、翌二五日に至るもまだ聞こえてくるのであった。

この響きを聞いたMさんは、次のように理解した。

「この鳴り響く鐘の音は、『オйкаイワタチ大講演会』という形をとった儀式を通して、万たるワンダラーに対して、『真』を語る言霊の響きである。この言霊の響きが、新しい世の到来を告げる鐘の響きとなって、世界各地で（十六皇子も呼応して）連打されているのである。」

Mさんは、W氏にこれまでの事情を語った（二五日午前一一時三〇分）。するとその時、この鐘の響きはパッと消え去ってしまった。

三月一〜五日の間に見たMさんの霊夢。

その1、近江神宮は古い地球での使命を終えられて、新しい近江神宮に代替わりされた。

その2、九州の幣立神宮は古い地球での使命を終えられて、新しい幣立神宮に代替わりさ

れた。

註 代替わりとは、古い世の近江神宮、幣立神宮としての使命を終えられ、

新しい世の神宮として、新しい使命を持って生まれ変わられたことを意

味する。

三月一六日、東京赤城教育会館にて「オйкаイワタチ講演会」が開かれた。

この日（一六日）の午後四時頃、Mさんは次の天のしるしを見た。

天空に巨大な長いウロコ雲が三本、明確に画かれた。その三本の雲は扇の骨のように一方で交わっている。これを見た時、次のように直感した。

「今日のW氏の東京講演は正しく行われ、皆さんが理解され、魂が結ばれた。」

三月一九日、W氏とMさんは、かねてから靈感で知らされていた、愛知県三河の猿投神社さげに詣でた。

四月一七日、未明、Mさんの霊夢。

ここは代替わりされた新しい幣立神宮である。（それは今の古い幣立神宮のお社の奥にあ

る。ただし奥といっても形の奥をいうのではない。(この新しい幣立神宮のお社でMさんは平伏して神様の「氣」を頂いていた。この時、Mさんは、「神様から放たれる神気に自分の全身が強く包まれた。」のを知った。これは神様から「神氣」を戴く儀式であると判った。

四月一日、午前〇時、Mさんの体験。

黒雲に乗ったサタンが眼前にやって来た。しかし、Mさんは「九字」を切ってサタンを追散らしたのであった。やがてその黒雲はいろいろの人達の顔に変化した。

註 Mさんは、「九字」を切る術を、神様より、この時自然に教わったのであった。

四月二日、Mさんの体験。

午後四時三〇分頃、突如三分間くらいの間、一切の音がパッと停止した。

午後八時、次の光景を霊視した。

樽がある。その樽から水が溢れ出てこぼれ落ちるのを見た。

この霊視から十分くらいして、次のテレパシーを受けた。

## 『空』

註 樽のカルマのコルク(栓、蓋)がするりと取れる(カルマが楽に出しつくされる)ことを意味するのではないだろうか？

一九六一年一月二八日の天の神様の御言葉。

『——さて、変わるのは、樽のコルクが取れる時です。コルクが取れると沢山の、変わる前の変わる絵が画(か)るようになります。——』

この変化(変わる絵が画(か)ること)により一切のカルマが出しつくされて、一切のものは『空』であると知る時が来る。そのときには、樽にいくら古い地球のカルマがぎっしり詰っているように見えても、真の眼から見れば、それらのカルマはすべて実体のない影であり、樽は、実は『空』なのであると知る。この意味であろうか。

四月二九日、W氏とMさんは近江神宮に参宮した。

そして、去る二月二四日、二五日と、地球全土に、「新しい世」の時を告げる鐘を打ち鳴らして頂いたことにより、ここに古い地球での近江神宮のご使命は終わられたことを報告し、これまでの沢山のお働きに感謝とお礼を申し上げたのである。

そして、ここに、『「新しい世」に生まれ変わられた、新しい世の近江神宮としての、新

しいご使命でのお働きをお願いとお祝いを申し上げる儀式』が行われたのである。

註 「志賀」誌（昭和五五年一月一日発行）に、「新世紀に於ける、近江神宮御鎮座の意義」と題して、近江神宮のY宮司が、次のように書かれているので、その一部をここに挿入させて頂くこととした。

「実は当神宮の御祭神も、去る四月廿日の例大祭に際し、大宇宙の最高神界、昔風に申せば、北斗紫微宮の神府に当る処より、祝福を御受けになり、次の如き尊称を御頂きに相成った。即ち

『天照らし国照らし坐す天地豊開かす別けの大神』と云う真に素晴らしい称名である。」

五月二一日、東京の財三康文化ホールにて、日本P S学会（会長S工学博士）主催、「オイカイワタチ大講演会」開催。

五月二二日、未明、Mさんは次のテレパシーを受けた。

『（東京の大講演会は）立派に出来、大成功でした。』

五月一四日、

「オイカイワタチ東京大講演会」が終わった翌二二日の早朝、Mさんは、清い、素晴らしい音色の「鈴の音」が鳴り響くのを聞いた。その時にはこの意味は判らなかったが、一四日夜、ふと次の靈感を受けた。

『オイカイワタチ講演会に参加された「オイカイワタチ」の真の判る方々に、天の神様は「縁」を与えられた。』

この「縁」について「オイカイワタチ」（本書）には次のように書かれている。（138頁）  
140頁、144頁）

A Z 『神は太陽のように地球を照らされます。

早く、神をみんな、今までの縁を明らかにされますように見て下さい。

まことをもって行きましょう。

まことは神様に通じます。

A Zを心で念じなさい。

よくまことを、共にあることを、天の神様とともに思いなさい。

善いカルマを果たすのです。

よい心は、そのように縁を呼びます。

助けは多く神様が下さいます。

私のやることを手を差し延べて神様は助けられます。

ワンダラーの汚れのない、よい体は神様がみ手を延べて、悪いカルマから守って下さいます。

誰の心をも愛して、私を信じて下さい。』 (一九六〇、一〇、一八)

AZ『世の中に一番約束されているのは愛です。神様は、銘々の約束をそこに命じられました。』

神様は天から真の言葉を下さいます。永しえに目出度き言葉です。

私(AZ)の、いろいろと命じられたことは、神様の言葉を伝える心を持つ良き者を探すことでした。

縁は天の神様にあります。

良き者を新しい世の中へ入れる案内をすることにします。

神様は行かれる人に縁を与えます。

地球のカルマは天の神様が良く定められます。

(終わりまで、)神様は頑張るように言われました。

証は円盤でします。』

(一九六〇、一〇、二二)

太陽の方  
エンマ

『神様に、よくまことで愛を手を賜わるよう、まわりの方(ワンダラー)はよく務めなさい。』

手は沢山あります。天はよく縁をまわりへ下さったのです。』

~~~~~

五月一七日、未明、Mさんは次の言葉を天より聞いた。

『たとえ、大切な分身がひっくり返ろうと、心うばわれる時ではありません。』

(註これは、Mさんに語られた言葉であるが、ワンダラーの進む道の厳しさを示されたのである。)

五月二十五日、札幌中央区共済ビル六階の大ホールにて、「オйкаイワタチ大講演会」が開催された。

W氏は、この講演が終わった直後、次のとおりに直感した。

「これまでに行われて来た、大阪、東京、札幌における、万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)が出来たことにより、宇宙の神様の席の方々、宇宙人の方々の、この地球における万たるワンダラーに対するお働きかけが大変に出来やすくなった。』

五月二八日、未明、Mさんの霊夢。

Mさんの家の窓という窓から、姿の見えない沢山の泥棒が物凄い勢いで入って来る。それを見たMさんは、全身の力を振りしぼって「泥棒、泥棒」と大声で何度も叫んだ。すると泥棒たちは入って来た窓から脱兎のごとき勢いで逃げ去って行った。

ここで目を醒ましたMさんは、この霊夢について考えた。

これはサタンである。隙<sup>すき</sup>あらば入り込もうとしている。これからはこのようにサタンと入り乱れての戦いが行われる。カルマとカルマがぶつかり合う激しい戦いがすべての場に行われる。それは身近なところから地球全土に広がりわたる。

これからは、白と黒（人種のことをいうのではない。）が一時的には明確に区分される。これからは、身に持つカルマを解く戦いが行われる。この混乱に乗じてサタンはありとあらゆる手段を使って攻撃して来る。新しい世の建設を妨害して来るのである。

六月一四日、九州の幣立神宮にて、W氏とMさんが参加して、次の儀式が行われた。

『変わる幣立神宮を祝う儀式』

祈り。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

幣立神宮の神々様ありがとうございます。

私達は本日、ここに天の神様のお導きにより参りました。

一九八〇年の幕開けと共に、地球は現象の世界（形の世界）の終末の期<sup>まき</sup>を迎えました。

新しい世の時を告げる「漏刻の響き」は地球の全土で打ち鳴らす鐘の音となって全世界に響き渡りました。

この響きが「真を語る言霊」となっていられました。「万たるワンダラーに真を語って聖火を点火する儀式」は日本の各地で開催されました。この儀式が出来ましたことにより、「真を語る言霊」を、地球全土、全世界において鳴り響かせて下さいましたこと、ありがとうございます。

ここに、古い世の幣立神宮のご使命を終えられましたことをご報告申し上げます。これまでの永い間の沢山のお働きを厚くお礼申し上げます。

ここに、幣立神宮は、新しい世の幣立神宮に生まれ変わられました。新しい世の、新しい幣立神宮としてのご使命でお働き下さいますようお願い申し上げます。

新しい幣立神宮の神々様ありがとうございます。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

六月十五日、未明、Mさんの霊夢。

“カルマとカルマのぶつかり合いで、カルマとカルマの血が吹き、ウミが出る”光景を見た。この時、Mさんは、全人類、全動物、全魚鳥類、山川草木、一切のすべてのもの、一片の石ころに至るまで、それぞれに持つカルマがいよいよ吹き出て来る時に至った……と直感したのである。

六月二〇日、午前八時二〇分頃、東京の万たるワンダラーの一人であるI嬢が天より次のテレパシーを受けた。

『新しい世が来ました。万たるワンダラーにバトンが渡されました。』

註①日本の各地で行われた『万たるワンダラーに聖火を点火する儀式（講演会）』により、バトンが万たるワンダラーに渡されたのである。

②大阪、東京、札幌で行われた講演会の記録をまとめて、この本の末尾に収録した。

## 第二章 万たるワンダラー儀式に参加

### エクアドルの儀式

六月二八日、W氏とMさんは、かねてから心に定められていた、古い地球の形の世界の“現象の世界”における『エクアドルの儀式』を行う日時と肉体での参加者を決定する時が来たと直感した。さらに、この儀式には、万たるワンダラーを代表する者が参加せねばならないということが明確に判るのであった。W氏は静かに祈り、考えて、次のように決めたのである。

儀式 エクアドルの儀式

日時 一九八〇年八月八日正午

場所 南米、エクアドル

参加者 W氏、Mさん、M氏

註 ① M氏はロサンゼルスに在住する万たるワンダラーの一人であり、また、アメリカにおける宇宙人とのコンタクトマンであるE・T・W氏(デーパー在住)から、真<sup>レ</sup>を学んでいた。

W氏は、万たるワンダラーを代表してこの儀式に参加する方として、このM氏を選定したのである。(M氏の選定は、天の神様が定められたのをW氏が靈感を受けて決定したものである。)

この日(二八日)、W氏は詳細を手紙にして、全く事情を知らないM氏に書き送った。そして一週間ほどして、ロサンゼルス<sup>の</sup>のM氏より快諾の返事(電話)を受けたのである。

②この「エクアドルの儀式」は、昨年(昭和五四年)一月二二日、九州の幣立神宮にて『十六皇子昇華の儀式』が行われた時に、すでに心で決められていた。

七月一日、夜一時三〇分、Mさんは次のテレパシーを受けた。

『円盤が三機待機しております。』

この意味は次のとおりである。即ち、来る八月八日(現地時間)、南米エクアドルにて儀式が行われる。その儀式に参加するW氏、Mさん、M氏の三人に対して円盤は守りにつかれ、三人の出発の日を待っておられるのである。

七月二二日、午後八時三〇分、Mさんは、次のような天のしるしを見せられた。

その1、月(半月くらい)は夜空に黄金色に輝いていた。余りにも美しいのでそれを眺めていると、黄金に光る雲で、月を中心にして十の字が画かれた。十の字の太さは月の二倍以上であった。

この時、Mさんは、「喜ばしいことである。」と直感した。これを暫く眺めていると、黄金に光る十の字の雲は姿を変え始めた。

その2、黄金に光る雲はたちまちにして大きな人型に変化した。そして、月が人型の胸のあたりに黄金色に輝くのであった。『天の神様である。』とMさんは思った。すると、その人型は姿を変えた。

その3、人型はたちまちにしてエクアドルの国の地図に変化し、月はエクアドルの主都キトーのあたりで黄金色に輝くのであった。

この一連の天のしるしを見たMさんは、『エクアドルの儀式の準備はここに整った。』ことを天が知らせて下さったのであると直感したのである。

七月二〇日、神戸、雷声寺にて「オйкаイワタチ講演会」開催。

七月二十六日、午後六時三〇分頃、Mさんは車である橋にさしかかった。すると、橋の両側（左右）より円盤が二機現われて前方に進んで行く。やがて、これらの円盤は前方でドッキングして一つの円盤となり彼方かなたに去って行った。その時、Mさんは次のテレパシーを受けた。『（円盤が）もう守りにつきましたから安心して下さい。まだ妨害があるでしょう。気をつけて下さい。自信を持って進んで下さい。』

このテレパシーの意味は次のとおりである。即ち、『エクアドルの儀式』に参加するW、M、Mの三氏には円盤がもう守りにつきましたから安心して下さい。しかし、まだサタンの妨害があるでしょう。気をつけて下さい。けれど貴方々は正しいことをしているのですから神様の守りが得られます。だから自信を持って進んで下さい。このように言われたのである。

八月七日、W氏とMさんは、『エクアドルの儀式』に参加するM氏と合流するため、夕方日本を発ってロサンゼルスに向かった。

八月八日（現地時間）、午前七時、W氏、Mさん、M氏の三人は、エクアドルの首都、キトーのキトー空港に降り立った。

正午、一昨年（一九七八年）に行ったのと同じ地点に三人（W、M、Mの三氏）は立ち、

『エクアドルの儀式』が行われたのである。

『エクアドルの儀式』

祈り。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

私達は、天の神様のお導きにより本日ここに参りました。

私達は、天の神様の「気」を頂いてこの儀式を行います。

去る二月二日、日本において、「エクアドルの戦い出陣の儀式」が行われました。

天の神々様、地の神々様、ご皇室の方々、十六皇子の方々、およびワンダラー全員は、全世界を巡られて、本日、地軸の基（元）の地、エクアドルにお集まりになられ、天の神様がなさいます『エクアドルの儀式』に参加されておられます。

ここに全員打ち揃って、地球の地軸の基（元）に立ちまして、天の神様をお願い申し上げます。

「古い地球の地軸と赤道の位置を、新しい地球、神の国鏝球王国の地軸と赤道の位置に変化させて下さいますようお願い申し上げます。」

「レタマヤの世の終わりの大変化を行って下さいますようお願い申し上げます。」

「新しい地球、神の国鏝球王国を現わして下さいますようお願い申し上げます。」

天の神様、ここに、『エクアドルの儀式』を行って下さいましたことありがとうございました。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございました。

ロサンゼルスにM氏は、この儀式に参加する一五日くらい前より、サタンから迷わしのテレパシー、迷わしの霊感が激しく送られたため、非常に苦しい体験をした。サタンは、この儀式にM氏が参加出来ぬように妨害の霊感、妨害のテレパシーを送ったのである。しかし、M氏はこの戦いに勝ったのであった。また、デンバーのE氏（M氏はE氏の教え子）は、M氏の、この苦しみの事情は知らなかったが、胸さわぎがあるので、M氏のために、また儀式が正しく出来るように、沢山の祈りを天に捧げておられたのであった。

八月一三日（現地時間）、ロサンゼルスにおいて「オйкаイワタチ講演会」（万たるワンダラーに聖火を点火する儀式）が行われた。

この『エクアドルの儀式』は、古い地球の「現象の世界」での聖戦である「エクアドルの戦い」の一環である。即ち、これからは、W氏とMさんは万たるワンダラーと共に、「エク

アドルの戦い」を行ってゆくのである。

それには、まず、新しい地球、神の国鏢球王国の「形の世界」での建設の使命を持つ、万たるワンダラーの目覚めと使命の自覚ができていなければならない。

しかし、天の仕組みは完璧である。一九八〇年の幕開けと共に日本各地において行われた『万たるワンダラーに聖火を点火する儀式（講演会）』により、万たるワンダラーは立ち上がり、真に目覚め、その使命の自覚は急速に進んで来たのである。

### 万たるワンダラーの目覚め

七月二六日、早朝、Mさんは、天より次のテレパシーを受けた。

『ワンダラーはそれぞれの働きで、それぞれの戦いをするのです。』

そして、去る六月二〇日、『新しい世が来ました。万たるワンダラーにバトンが渡されました。』とのテレパシーを東京のI嬢が受けた頃より、万たるワンダラーの活躍が特に顕著になって来たのである。

丁度この頃、タイミンク良く万たるワンダラーの目覚めを助け、その働きに勇氣と力を与える働きかけが出現した。それは、アメリカのデンバー市に住む宇宙人とのコンタクトマン

であるE・T・W氏の来日という形で現われて来たのであった。

彼（E氏）には日本に沢山の教え子があり、しかもこの教え子達の多くが万たるワンダラーである。

彼（E氏）は来日早々の七月二〇日、東京パレスホテルで行われた「東京チャリティー・ミュージック・フェスティバル」に出席、また、翌二二日は霞ヶ関ビル二三階「富士の間」にて行われた「E氏を囲む座談会」に臨んだ。これを皮切りとして、その後、E氏を中心とするこのような講演座談会が日本の各地で行われたのである。彼は約一ヶ月近く全国各地を飛び廻り、万たるワンダラーに勇気と自信と力を与え、目覚めの手助をし、さらに再びの来日を約してデンバー市に帰ったのである。

彼の働きとW氏の「聖火を点火する講演会」とが相まって、多くの万たるワンダラーは目覚め、立ち上がった。使命遂行の決意は益々燃え上がった。そして、その働きは目を見張る程に力強いものとなって来たのである。

W氏は、これらの進展を眺めながら、万たるワンダラーの活躍は、これから時の経過と共に全世界に広まって行くのであると深い確信を持ったのであった。



ここで、目覚めと共に、それぞれの働きを始められた万たるワンダラーの方々の体験のうちいくつかを記述することにする。

(1) 東京のN嬢のこと。

去る五月一日、東京芝公園内の増上寺にある(財)三康文化ホールで行われた「オйкаイワタチ大講演会」に参加。この講演により魂の目覚めを得たN嬢からW氏に、次のような内容の手紙（五月一六日付）が送られて来た。

W様、

去る五月一日「オйкаイワタチ大講演会」に私は参加できまして本当にありがとうございます。私はその日を決して忘れないでしょう。増上寺から帰る道、すっかり日の暮れた空に輝きはじめて星が涙でにじんでよく見えませんでした。

小さい頃から抱いていたいろいろな不思議なフィーリング、宇宙への指向性、記憶と呼ぶにはあまりにも仄かな印象のようなもの……それらがみな説明がついたのです。

「オйкаイワタチ」（完上）までの四冊）を四月に拝読して以来、自分もワンダラーではないかという感じが強まりつつありましたが、今一つ自信が持てませんでした。

しかし、一日のWさんのご講演をうかがって、自分の内ではっきりと確信のようなものが湧き上がるのがわかりました。

それと同時に、宇宙の中の一点にすぎない私のような存在に、かくも暖かい目覚めの縁を与えて下さる神様や宇宙人の方々に、はかりしれない程大きな感謝と懺悔の涙があふれてきました。私はほんとうに泣いてしまいました。

神様に祈りながら泣いてしまいました。

神様は何という大きな忍耐で、私という迷子が帰るのを待っていてくださったことでしょう。

心は宇宙に指向しながらも、いつのまにか道に迷い、カルマを作ってきた我が身をふりかえると心の底から神様におわびの言葉が湧いてまいります。

今、私は、高校二年ごろの時に見たある夢——「目覚めた子供たち」という名で呼んでいるのですが——が私に何を言わんとし、教えんとしていたかを自覚しました。

一九七四年頃のものと思います。その夢の大略を述べてみますのでお付き合い頂ければ幸いです。

\* \* \*

ある岬の果ての洋館（右手に科学研究所がつながっている）の芝生に大勢の男の子や女の

子が遊んでいます。そのうちに研究所から朱色と青色の飛沫が次々と飛んできて子供たちに附着します。一人に一つずつ、しかも女の子には朱色、男の子には青色、各々2〜3cm弱のものです。

私はなぜかその場に呼びよせられたように立っています。すると研究所から黒髪で白衣の青年科学者がでてきました。その人は私を洋館に招き入れ、部屋の中に静かに座っている女性を指しながら、次のように言いました。

「僕たちは、地球人ではない。」

僕たちが、君たち地球人に望むことは、<sup>きつ</sup>「気付」いてほしいということだ。」

その人は、私をゆさぶるようにして言いました。

「気付け！ 気付け！ 気付くんだ！」

「僕達は、もう自分の屋（遊屋）に帰らなければならぬ。その前にどうしても、君にこのことを言っておきたかった。」

時がたてば、あの子供たちは自然に気付くだろう。そして僕が地球に伝えようとしたことを理解し、活動、行動を始めるだろう。僕の意志は、目覚めた子供たちによって受け継がれるのだ。」

私はその人が去ったあと、（なぜか、彼は地球を離れたと判るのであった。）彼の「気

付け」という言葉の奥に秘められた希<sup>ねが</sup>いと意味を探ろうとして立ちすくんでいました。

その時、突然情景が変わります。

私は狭く暑い所にいました。大勢の人々がむし暑いので不平をこぼしています。見ると私のうしろに白い壁があり、ずっと続いています。ちょうど小さな割れ目があったので、私は壁の向こうをのぞいてみました。なんと、そこには別天地のように広々とした真白い大地がのびており、日は輝き、大気はかぐわしい香りで満ちています。空はまっ青です。私は、「向こうに行きたい。」と強烈に思いました。

いつのまにか手にハンマーを持っていたので、それで割れ目を打ち、壁にようやくのことで人が一人通れる程の穴を開けました。

「ここから向こうの平原、広いところに行きましょう。」と人々を誘うのですが、誰も見向きもしてくれないし、耳をかしてもくれません。

しかたがないので一人で向こうの世界に足をふみいれました。そのとたん、身体が軽くなり、重力を感じなくなり、肉体さえないような感じになって大気と一体になったのがわかります。

心の底から喜びがわき上がって来ます。

その時、先ほどの宇宙人の存在を感じたのです。（再会したのです。）そして、私は彼の

「気付け」といった意味を理解したのでした。

\* \* \*

ざっとこのような内容です。この夢はいつも私の心の片すみにありました。一九七四年ころから私はこのような夢やフィーリングを覚えるようになりました。

今私は「目覚めた子供たち」が万たるワンダラーを指すものであること、「気付け」とは自分の使命、「真」に気付きなさい」ということがわかります。

これも天の神様、宇宙人の方々、多くの先輩のワンダラーの皆様のおかげと 생각합니다。本当にありがとうございます。

札幌で開かれます次のご講演が実り豊かなものでありますように、それによって彼の地のワンダラーが一人でも多く目覚めますようにお祈り申し上げます。

昭和55年5月16日

Nより

七月二六日、このN嬢がW氏を訪れた。それは二五日夜、次のようなテレパシーを受けたからであった。

「名古屋に行きなさい、Wさんのところに行きなさい。」

「行く理由はなんですか？」と問うと、

「行けば判ります。」

このようにして訪れたN嬢は、自分の体験を次のように語ったのである。(要旨のみ)

一九七九年(昭和五四年)末、「私(N嬢)は、地球と人類のために働く日が来ることを知っている。」この言葉が英語で口をついて出てくる。

一九八〇年(昭和五五年)二月、「私は、地球と人類のために働く決心をした。」というテレパシー(英語)を受ける。

五月、「私はワングラーとして自覚し、働きを始めた。」

五月二八日、「速やかに世界をつなぐ必要がある。」

五月二九日、「天と共に進みましょう、援助します。」

六月一〇日、「波動です。五感で感じる波動の元は一つです。波動を学んで下さい。」

六月一七日、「見るもの、聞こえるもの等を根源へとさかのぼりなさい。」これは波動である、波動の勉強がしたいと強く思った。

六月二九日、

『神の道は、素朴さの中にある。

神の道は、平和の中にある。

神の道は、静けさの中にある。』

六月三〇日、二〇時、次のテレパシーを受けた。(英語)

※

ローズ(N嬢の使っているもう一つの名前)、地球を一つにしなさい。

彼らは一つの惑星地球に生きる一つの民だと気づかせなさい。

それがあなたの使命です。一つの惑星に一つの共通語。

一つのことばを全ての国々に広めるのは重要です。

これは地球をよくするという価値の一端をなしています。

しかし、あなたのために用意されている、別の、さらに高い使命があるのです。

まっすぐに、この道を歩み続けなさい。

ローズ、

世界がどのようになっているのかを見ることは、あなたには必要です。

十分に考えて行動をおこしなさい。

あなたは11人の内の1人なのです。

地球は、今やまさに倒れる直前にあります。

人々はまだ眠っています。

まず我々が目ざめて、行動をおこさねばなりません。

ローズ、頭を上げて前を見なさい。  
 広い道が、あなたを神の栄光へと導いています。  
 立ち止まったり、曲がったりしてはいけません。  
 あなたを待っている、より大きな働きがあります。  
 まさに、そのために、あなたは、この惑星に来たのです。  
 神様から祝福を受けて、故郷の惑星を出発した時のことを思い出さない。  
 神の道は自然の中にある。  
 神の道はのんきの中にある。

エゴ(自我)のあるところにはどこでもオリオンがいます。  
 心、意識、ソウルの動きに注意していなさい。

ローズ、地球を救うために、もうそんなに時間がないのです。

我々は、力と意志を、お互いに集めねばなりません。

私はあなたを待っています。あなたはクロスロード・ワールドの重要な一員です。  
 ハッピーで自然でありなさい。

スペインのJ・L・Aより

※

N嬢が語るこれらの言葉を聞いていたW氏は、彼女は、新しい世の建設において、大切な使命を持ったワンダラーの一人であると判ったのである。

しかし、N嬢がW氏を訪れたのは、以上のことを語るためだけではなかった。そこには、さらに重要な目的があったのである。

N嬢は、実は、彼女に前記のメッセージを送ってこられたスペイン在住の真の判るワンダラー、J・L・A氏と日本のW氏を結ぶ役(東西の結びの役)をされる方だったのである。したがって、この日の彼女の来訪の最大の目的は、この使命を果たすために、「オイカイワタチ」(完)までの四冊と新刊書「あなたの使命は開始された」(講演記録)をもって九月四日に日本を発ち、スペインのL氏のもとへ訪れることをW氏に伝えることであつたのである。

N嬢はW氏との語らいを終えて東京への帰途、車中で次のテレパシーを受けた。

「今日のお役は果たしました。」

「万たるワンダラーが灯を世界に伝えるのである。」

九月一〇日、スペインのL氏を訪れたN嬢からW氏宛に次のような国際電報がもたらされ

た。

「会った。渡した。つながった。講演録スペイン語訳OK。」

この国際電報の意味を、N嬢が帰国後に語った内容も含めて解説すれば次のとおりである。「N嬢はスペインのL氏と会って、『オイカイワタチ』完(上)までの四冊と『講演記録』を渡した。彼L氏はこれらを読んだ。奥に流れている『真』が判り、W氏とL氏とは魂でつながった。L氏は講演記録『あなたの使命は開始された』をスペイン語に翻訳することを、N嬢が依頼する以前に自分から引き受けると発言し、かつこれを奉仕することを申し出られたのであった。」

九月一六日、午後八時、Mさんは天に画かれた次のしるしを見た。

黄金色に輝く三ヶ月を中心にして、黄金色の雲で線画のように外国の地図が画かれた。これを見た瞬間、「スペインの国」と思った。この時、N嬢のスペインにおけるL氏との会話によって、その使命は成功したと直感したのであった。

この頃、東京在住の某中学三年生(ワンダラー)は次のテレパシーを受けた。

「スペインが成功しました。」

## (2) 横浜のF夫人よりの手紙(要旨)

——前文略——いろいろの出来ごと(円盤目撃、天のしるし、霊的体験)が起こるようになった出合いは「オイカイワタチ」完(上)までの四冊を入手した頃からでした。はじめのきっかけはと申しますと、去年(昭和五四年)の一月二九日のことでした。

この日は夕焼けがとても美しく映えているので、心の誘われるままに近くの安らぎの広場に行きました。西の空は茜色あかねの雲でとても美しかったです。その時、私の心が問いをしているのです。

「『オイカイワタチ』に書かれていることがらは真ですネ、もし、そうであるなら答えて下さい。でも、そんなことは、まさか答えて頂けませんネ。」

と自問自答しました。そして、五分くらいして家の方角に戻りかけたのです。でも心残りがしてもう一度振り返りました。すると、茜雲の右側に美しく輝くオレンジ色の物体があるではありませんか。目を疑いました。そして心の中で円盤だと思ふやきました。それと同時に円盤の姿は消え去ってしまいました。

このことがあってからです。私には次から次へといろいろの霊的な出来事が起こって来たのです。——後文略——

## (3) 東京のI嬢

七月二五日、午前三時、

「ワンダラーとしての勇氣と自信と、そしてほこりが出来ました。」

このテレパシーを頂いたのですが、現実の我が身を見ると、とても不安なものでした。しかし、これをようやく（九月一日頃になって）しっかりと自分のものにさせて頂きました。ここに……

私はワンダラーとして、しっかりと使命を果たすことを誓います。

## (4) 神奈川県K夫人よりの手紙（要旨）

五月二三日。

北より東にかかっている雲の掛橋がある。その先端に翼を広げて今にも飛び立とうとしている大鳥を見る。暫くして形が変わり、東を根本にして西空に向いて末広がりの掛橋となった。これを見た時、次のようになぜか直感したのである。

「来る五月二五日の北海道における『オйкаイワタチ講演会』に関係があり、これが終わると、万たるワンダラーは目覚め始める。そして、やがてある方は天に向かって昇って行かれるのではないだろうか。」

この日（二三日）、午後二時三〇分から三時頃。

翼を背負った天使達が数多く空一杯に見られた。また、大きな柱が立ち、その先端に男性が天に向かって両手を広げて天を仰いでいる姿、南の空では円盤らしき雲より三人の天使が降りられる姿、また、女性の天使が翼を両手一杯に大きく広げて悲しんでいる姿。これを見た時、天では厳しい戦いが行われていると直感した。これはその啓示であると判った。

空では南より西にかけて円盤が雲のようなものをはきながら飛び交っている。これを見て、地球のため、人類のために天では総力をあげて戦って下さっていることが痛い程に判った。

心より天に感謝を捧げて、地の我々は一日も早く多くの方々が目覚められて、新しい地球を守っていかねばならないとの思いを強く強くしたのである。

註 「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式」は講演会という形をもっ

て行われているが、それは、実はサタンとの極めて激しく激しい戦いなのである。サタンは万たるワンダラーに聖火が点火されないように、儀式（講演会）が出来ぬように、昼夜を分たずあらゆる妨害の限りをくしくしてW氏を攻撃して来る。心に入れねば肉体に入っの激しい攻撃をくり返して来る。この苦しい戦いが続けられているのであった。

このように地においての戦いが行われている時は、天においてはさらに一層の激しく激しい戦いが行われているに相違ないのである。K夫人

はこの天における戦いを見せられたのであった。

五月二十五日、午前六時一五分頃。

太陽を拝して、W氏の札幌における講演のご加護を祈った。北より南の空にかけて末広がりの掛橋の雲がある。その先の方に大きな文字で万という字が画かれている。その隣りに小さな文字で万の字がある。大きな万の字の中にその小さい万の字が入りこもうとする姿であった。

午後五時頃、東の空に二重の大きな虹が見事にかかった。これを見た時、札幌の講演会は無事に済んだことを知り、同時に大成功であった証しを虹で示されたのであると直感した。

五月二十八日、午後二時三〇分から三時。

西空を見たい、という思いが湧いたので外に出た。すると西空には、三本の柱が見事に立ったのである。その時、「大阪、東京、北海道での儀式（万たるワンダラーに聖火を点火する講演会）が立派にでき、大成功であった。」と直感した。

さらに、以前から心にあつたことのもう一つの意味がこの三本の柱の中に重なって秘められていると強く感じた。それは〇〇は三つの役を見事に果たされ、太陽に召され、天の神様より祝福をお受けになられるのではないかという思いであった。

六月一二日。

幅広い雲が、東北より南西へ、暫くして東南より北西へとこのびてかかり十字を画いた。東の空には鶴がはばたく姿を見た。その時、次のテレパシーを受けた。

『万たるワンダラーが地球を十字に囲み、真を広げるのだ。』

六月一五日。

K夫人は、靖国神社に参拝した。というのは、六月に入ってから、度々、靖国神社に行かねばならないというテレパシーや靈感を受けていたからである。

K夫人は、英霊の皆様に、精魂こめて真剣に、次のように祈ったのであった。

「古い地球は変わりました。新しい地球となりました。このことが英霊の皆様に判らず、古い地球に執着を持って迷っておられますと地球は軽くなりませんし、英霊の皆様も天に帰ることが出来ません。目覚めて下さいますように、気付いて下さいますようにお願い申し上げます。」

六月二三日、午後四時頃。

天空に七つの雲で出来たたがのようなものを見た時、次のテレパシーを受けた。

『神の世、七世、新しい神の世誕生せり。』

六月二四日。

午前〇時三〇分から約一時間、南の空に十字の柱が立った。その時、「万たるワンダラー

の柱が立った。」と直感した。

午前六時一五分、太陽を拝もうとテラスに出る。東の方向を向いて女神様がお立ちになっておられる。「どなた様でしょうか。」と問うた。

その時、心の中から声なき声が聞こえた。

『アトネ、アトネ。』

この時、アトネ様がお降りになられたと思った。続いて西空を見ると、階段とオメガの文字と数字の4が画かれている。これを見た時、次のように直感した。

「古き地球は永遠に消え行く。」

六月二十七日、午後三時頃。

男女の方々が、それぞれ子供をかかえて向かい合ってお立ちになっているお姿を天のしるしで見た。その時、次のとおりに直感した。

「神々様が万たるワンダラーをかかえてお立ち下さった。」

七月五日、再び靖国神社に参拝して真剣に祈った。すると、これまで心にのしかかっていた重荷が消え、以前の参拝の時と違い、心が大変軽やかになったのであった。

八月一二日、午後四時一五分から四時三〇分。

桃のような雲の中に雲が入りこんで行く姿を見た。その時、心の目に……「三つ目の桃の

実」と写った。(完(上)180頁参照)

桃の実の三つ目はレタマヤ(天の神様の大愛)である。地球(新しい地球の形の世界)が天の神様よりレタマヤを頂くのだと思った。同時に、もうそんな時に来ているのかと思ったのであった。

八月一三日、夜、流れ星(円盤かも知れない)を見てみると、心から声なき声が聞こえて来た。

「大詰です。大詰です。」

八月一五日、朝六時の霊夢。

幼稚園の卒園式に参加した。園長先生は次のように語られたのであった。

「古くなった園服をぬぎましょう。」

九月一日、円盤が飛来したのを目撃した時、次のテレパシーを受けた。

「種をまきましよう。」

九月三日、朝七時、太陽を拝もうと思窓を開けて空を見た。東南の空に、東北より南西にかけて巨大な半円の形の雲の掛橋がかかっている。その橋は、丁度地球を包むように円をなしている。その時、次のとおりに直感した。

「ワンダラー達の手が半分だけ地球を囲んだのだ。」

(5)東京のA氏。

九月五日、未明の夢。

A氏は浩宮様とお話しをしていた。その時、A氏は、「皇太子殿下は、〝オイカイワタチ〟をお読みになりましたでしょうか。」と浩宮様にお聞きした。

すると皇太子殿下のお顔がすつと浮かび出て来た。そのお顔を拝すると、既に「オイカイワタチ」の内容は良く知っておられるというお顔であった。そして次のように言われた。

『こういうことはあります。』

その時、浩宮様が言われた。

『お母様（美智子妃殿下）も今お読みになられております。』

その時、美智子妃殿下のお顔が浮かび上った。そのお顔を拝すると、妃殿下はすべて魂で良くご存知であるということが、A氏には良く判るのであった。

皇太子殿下、美智子妃殿下、浩宮様は終始にこやかに微笑んでおられた。

A氏はこの夢から醒めてからも嬉しくて嬉しくて、喜びと安心の心で一杯になったのである。



### 万たるワンダラー、鏢球王国建設の儀式 万たるワンダラー、高天原の神々様と結びの儀式

一〇月四日。午後六時、東京において、次に行われる重要な儀式のための準備の儀式が行われた。これには万たるワンダラーを代表した一名とW氏とMさんが出席した。

これまでに、万たるワンダラーの多くの方々、W氏、Mさんは、それぞれにテレパシー、靈感、霊視等々を受けており、それによって、この重要な儀式の意味、目的が判り、日時、場所、名称も次のとおりに決定されていた。

一〇月一〇日、沖縄湧玉の地にて、『万たるワンダラー、鏢球王国建設の儀式』

同日（一〇日）、九州、幣立神宮にて、『万たるワンダラー、高天原の神々様と結びの儀式』このふたつの儀式は、万たるワンダラーが肉体で参加するという重要な意味を持っている。

また、「エクアドルの戦い」の一環でもある。

したがって、この日（四日）、儀式の参加者が集まり、意志統一を図る会合、即ち、「準備の儀式」が行われることとなったのである。

一〇月五日、東京での大講演会としては二回目の、東京「オイカイワタチ大講演会」が杉

並区立産業館にて開催された。

この日は、W氏の講演の前に、午前部として、多くの万たるワンダラーの活躍が紹介された。目覚めと使命の自覚の喜びなどの体験発表、スライドを通しての「真」の語りかけなど、いずれも素晴らしいものであり、ここに、万たるワンダラー達の進む道は確立したと直感されるのであった。

この日の講演会も大成功であった。

この日（五日）、神奈川県K夫人は、東京講演が大成功であったことを天に感謝しながら帰途についた。空には鳳凰が舞いながら西に向かって行く姿を見た。

二三時七分、今日の講演の録音テープを聞きながらふと空を見ると、東より南に向かって十機くらいの円盤が、真暗な夜空にくっきりと浮かぶVサインを画いて静かに、滑べるように彼方に消え去った。その時、次のように直感した。

「新しい地球（鏢球王国）建設への聖火は灯さる。それぞれに、ことが始まる。」

K夫人は直ちに次のように祈った。

“それぞれの分野で、それぞれの活躍がスムーズに行われますように……。”

一〇月七日、午後五時頃、W氏とMさんは、天に画かれたしるしを見た。

天空に沖繩（即ち湧玉の地の意味）を表わす「守礼之門」が雲で画かれ、その横に天の神様がお立ちになっておられる。その方向に向かって非常に沢山の万たるワンダラーが進んで行くのであった。その時、次のように直感した。

「万たるワンダラー全員が一〇月一〇日の儀式に参加するため一斉に進み始めた。」

一〇月一〇日、未明、K夫人は次の霊夢を見た。

ある集会所、ホテルのような所、旅館のような所に、様々な人種の人達が非常に沢山集まって、お互いに親しく語り合っている。どの建物もあふれんばかりの沢山の人達で一杯である。しかも、全員が明るい笑顔である。

この人達は、全員が、自分が、新しい地球、鏢球王国の建設のために参加していることを知っている様子である。

K夫人は、魂の（故郷の遊星での）親、兄妹達と一緒に同じ部屋に泊まったのであった。

註 一〇日は沖繩と幣立神宮で儀式が行われる日であり、全世界の万たるワンダラー全員が魂が集まるのである。（しかし、K夫人は、この儀式のことは知らなかった。）

一月一日。

午前七時より、沖繩、湧玉の地において、万たるワンダラーを代表した二一名の方々とW氏とMさんの総計一三名が肉体で参加して、次の儀式が行われた。

『万たるワンダラー、鏢球王国建設の儀式』  
祈り。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

私達は天の神様のお導きにより、本日ここに参りました。

先に万たるワンダラーに聖火を点火する儀式が行われ、そして去る八月八日、エクアドルの地にて『エクアドルの儀式』が無事に行われましたことありがとうございます。

これが出来ましたことにより、本日、ここ新しい地球、神の国鏢球王国の中心の地、湧玉の地に、全員の方たるワンダラーがうち揃って集まり、天の神様のなさいます儀式に参加出来ましたことを深く感謝申し上げます。

私は天の神様の「氣」を頂いてこの儀式を行います。

万たるワンダラーの皆さんに申し上げます。

天の神様の聖火は万たるワンダラー全員に点火されました。

新しい地球、神の国鏢球王国建設のボタンは万たるワンダラー全員に渡されました。

これからは、万たるワンダラーの皆さん全員は、天の神様の手足となって鏢球王国建設の働きを良く果たしますと誓って進まれて行かれることでしょう。

ここに万たるワンダラーに鏢球王国建設のボタンが渡されましたことを宣言致します。

天の神様ありがとうございます。

(以上はW氏が奉上)

天の神様ありがとうございます。

万たるワンダラー全員を代表して宣言致します。

私達万たるワンダラーは、天の神様の聖火を頂きました。

私達万たるワンダラーは、新しい地球、神の国鏢球王国建設のボタンを正しく確かに受け取りました。

これからは、私達万たるワンダラー全員は、天の神様の御手足となって鏢球王国建設の働きに身を賭して、全身全霊を捧げますことをお誓い申し上げます。

ここに私達万たるワンダラーは鏢球王国の建設を完成するまで身を捧げて使命を達成することを誓い、ここに宣言致します。

これから進みます道を、万たるワンダラー全員をお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

(以上は万たるワンダラーを代表してI氏が奉仕)

この日(一〇日)の午前六時頃、数分間、激しい雨が沖繩の地に降った。それはバケツを空けたような勢いの雨であった。そして、この清めの雨のあとには清々しいすがすが気がみなぎっていた。ひめゆりの地“湧玉の地”に向かつて一三名を乗せたマイクロバスは走った。清めの雨のあとの清々しい夜明け、真赤な美しい太陽は地平線より昇って行く。午前七時、湧玉の地“に車は到着した。早朝のため、お参りの人や観光客はまだ一人もおらず、雨に洗われた“ひめゆりの地、湧玉の地”は静寂そのものであった。

聖地に一步足をふみ入れたとたん、全身がジーンとする。これまでと違った表現しがたい素晴らしい靈気が全身を強く包んだ。

W氏とMさんは今回でこの“湧玉の地”は七回目であるが、今までとはまた違った強く素晴らしい靈気がここ“湧玉の地”に一杯みなぎり渡っているのを強く感じたのであった。一名の万たるワンダラーの方々も、この素晴らしい靈気に全身を包まれ、身のひきしまる思いであった。

儀式が行われている間のみ、どこから来たのか知らないが、鶯うぐいすが美しい声で静寂の中にさえずりわたっていたのも不思議であった。

去りがたい気持ちをおとに残して一行一三名は沖繩から熊本空港へ飛んだ。九州阿蘇郡の日の宮幣立神宮に到着したのは午後五時三〇分であった。

午後六時より日の宮幣立神宮にて次の儀式が行われた。

『万たるワンダラー、高天原の神々様と結びの儀式』

祈り。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

日の宮幣立神宮の神々様、高天原の神々様ありがとうございます。

本日、早朝、新しい地球、神の国鏝球王国の湧玉の地に、万たるワンダラー全員が集い、万たるワンダラーに、天の神様より新しい地球、神の国鏝球王国建設のバトンが渡されました。

私達万たるワンダラー全員は、天の神様の手足となって、新しい地球、神の国鏝球王国建設に身を捧げて働くことを誓い、宣言致しました。

ここに、『万たるワンダラー、鏝球王国建設の儀式』が“湧玉の地”にて行われましたことをご報告申し上げます。

高天原の神々様、これから進みます鏝球王国建設の道が正しく進めますように万たるワン

ドライバー全員をお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。  
日の宮、幣立神宮の高天原の神々様ありがとうございます。  
天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

この儀式が終わったあと、一行はある方の主宰する地球家族村で一泊し、自然の環境を十分に味わわせて頂いた。

翌一日、東京からの一行二名は帰途につくべく午前一〇時（幣立神宮前）発のバスを待った。その数分間に次の天のしるしが空に画かれた。

抜けるように晴れわたった美しい青空。雲是一片だにない。この青空に、突如、筆でという文字を書いたように見える雲があらわれた。この雲の数は次々と増えてゆき、ついに一本の線が見事に画かれたのである。二名のワンダラーはこれを眺めて驚嘆の声を発した。丁度その時、バスが到着したので、一行は、天空に手を振ったり指差したりしながらバスに乗り込んだのである。

一行を乗せたバスがここを立ち去ると同時に二本の雲もたちまちにして消え失せ、天空は以前のように一片の雲もない抜けるような青空にかえたのであった。

沖繩の湧玉の地、熊本阿蘇の幣立神宮での儀式は万たるワンダラーの方々が靈感やテレパ

シーを受け、その「真」を判り、この儀式の準備と計画を進めて、実施されたのであった。そこで、天は、これらの儀式が正しく行われたことを、参加した二名の万たるワンダラーに証として示されたのであった。

一〇月二日、早朝、W氏は、天より次のテレパシーを受けた。

『花に花が咲きました。』

畑 この「花」は、両方ともワンダラーを指す。

一〇月三日、神奈川県のK夫人の霊夢。

自分の顔や身体がみるみる内に変わって行き美人になった。全く別人に変身してしまった姿を見たのである。

一〇月六日、午後九時、Mさんは次のテレパシーを受けた。

『天の神様に祈りなさい。』

Mさんは正座し合掌して祈り始めた。すると口より次の祈りの言葉が湧き出て来るのであった。

「天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。」

天の神様のおぼしめしがありますれば、皆（人類）が一日も早く目覚めて、皆のカルマがすべてのもののカルマが、地球のカルマが、ずりりと取れますように、少しでも楽にカルマが出しつくされますようお守りとお導き下さいますようお願い申し上げます。」

この祈りは約三〇分間行われた。その祈りの最中に次の光景を靈視した。

真暗な所を右往左往と逃げまどっている沢山の人の姿が見える。

この人達はカルマを出しつくすという大掃除が余りにも厳しく辛いので、カルマを包み隠してこの厳しさ、辛さから少しでも楽な方へと逃げて行く。しかし楽な方へと行って逃げる程そのカルマは大きくなってその人に迫って行くのが判らないために、この大掃除は段々と大きく、厳しく、苦しいものとなって行くのであった。

一〇月二〇日、夕方、神奈川県K夫人は美しい夕陽を見た。その時、次の靈感を受けた。  
（これは傍証の靈感である。）

「やがて、大きな儀式が行われようとしている。その儀式が済めば一つの区切りとなる。」

一〇月二三日、未明、Mさんの体験。（靈夢と現実との境における）

すきとおるような美しい顔した、女神を思わせるような三人の女性が立っており、身には天衣を思わせる美しいものをまとっている。顔は柔和であり、口もとに微笑をたたえて無言でMさんを眺めている。

その傍に一人の男性がおられる。その方も立派でたくましく、見た目には男神を思わせるような顔形の方である。その方がMさんに次のように語るのであった。

「あなたの望みはなんでもかなえてあげます。」

「あなたがどこかへ行きたいと思われましたら、あなたをそこへお連れ致します。」

「なんでもあなたの望み通りにしてあげますから……、さあ／＼言って下さい／＼」

「遠慮しないで、さあ／＼さあ／＼言って下さい。」

このように、言葉は大変丁寧であるが中々熱心に、執拗に言われるのであった。

Mさんは、これらの方々の顔と目をジーンと眺めていた。すると、Mさんの心の中に、この人達はどこかが違う、心が違うという気が浮かんて来るのであった。

その男性は、再び、「さあ／＼さあ／＼少しも遠慮しないで、なんでもあなたの好きなようにして上げますから言って下さい／＼」と強く迫って来る。

そこで、Mさんは、「私は、今は近江神宮に招かれておりますので、そこへ行かねばなりません。あなたの言葉に従うわけには参りません。」と断わったのである。

断わったとたん、その光景は消え去り、Mさんは霊夢から目を醒ました。その後今のことを暫く考えていると、「サタン」と判ったのである。

サタンは、ワンダラーの前に、神の姿に似せて現われ、ワンダラー達を迷わすのである。(第一巻にはこのことが度々書かれている。)

姿、形(霊夢、霊視、霊聴、霊眼等々で見える姿、形、声も含まれる。)だけを見、かつこれを追い求めて“真”の目覚めの足りぬ、真の判らぬワンダラーの多くはここで道を誤まるのである。つまり、もしここでMさんが彼等の言葉に従っていけば、Mさんの魂は彼等の手の中に入ってしまったのである。

これからますますサタンは、このようなやり方でワンダラーの前に現われ、誘惑するであろう。ワンダラーは“真”が判らねばもう前に進むことのできない大切な期ときに来ているのである。

この日(二三日)、神奈川県のK夫人は、次の天のしるしを見た。

午前一〇時、東の空から西の空にかけて幅広い雲の掛橋が出来、東を根本にして幾條もの雲の線が西空に向かって引かれていく。これを見た時、夫人は次のとおり直感した。

「万たるワンダラーが活躍し、世界に広がって進行して行くのである。」

午前一〇時三〇分、ある一筋の雲の掛橋が太陽の光に輝き、虹色に変わった。西空の掛橋の端に☆(ダビデの星)の形をした雲が現われた。この時次のように直感した。

「天と地の結び。」

「西(外国のこと)の万たるワンダラーが目覚めて立ちあがり、日本に向かって進行してくるのである。」

一〇月二五日、午前一一時三〇分、同K夫人は次のテレパシーを受けた。

「全世界のワンダラーが立ちあがられました。手をつないで真の道を進みましょう。」

一〇月二六日、福岡市の今泉会館にて「オйкаイワタチ大講演会」が開催された。この講演会も素晴らしい雰囲気の中で行われ、大成功であった。

一〇月三一日、同K夫人の霊感。

「日本を根本として世界に巨大な枝をのびした大樹木が植えられた。神の国に神木が四方に植えられ神の国が守られた。

あとは、万たるワンダラーの手で葉を、実を付けねばならない。」

註 「四方に植えられ云々」とは、札幌、東京、大阪、福岡の四ヶ所で行われた「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式（講演会）」のことをいうのである。

一月一日、同K夫人、天空に画かれた四国の地図を見る。その時、次のテレパシーを受けた。

「天の偉大な神々様や地の神々様がお集まり下さり、ことが開かれます。」

「金刀比羅宮でこと、開くのです。」

「全世界にこと、開いて頂く、全世界にこと、開くのです。」

「そのことがいよいよ近づいて来た。」（これは一月二日に受けた靈感。）

註 これらのテレパシーと靈感は、来る一月二三日、二四日に出雲大社と金刀比羅宮で行われる重要な儀式を意味し、その傍証となるものである。

この儀式に参加する万たるワンダラーの方々は去る一月二六日に集まり、打合せをした。二九日には「祈りの言葉」も決定された。

儀式の名称は次のとおりである。

『万たるワンダラー、新しい地球の神々様と結びの儀式』出雲大社にて。

『鏝球王国建設を全世界にこと、開く儀式』金刀比羅宮にて。

一月一日、W氏は最近次のように思うのであった。

一九八〇年の幕開けと共に始まった、万たるワンダラーに聖火を点火する儀式（講演会）が日本中の各地で数多く行われた。そして八月には「エクアドルの儀式」が行われた。一月にも沢山のお役がある。今年（昭和五五年）は万たるワンダラーにバトンが渡され、万たるワンダラーの方々が目覚められて立ち上がるという多忙な年であった。

そして、一月末までに（万たるワンダラーと共に）行われる大きな儀式が終わることに、地球のことは一つの区切りを迎えるのである。このことがW氏には良く判るのであった。

万たるワンダラーの働きも次第に盛り上がって来ていることが判る。だから、W氏には、翌一九八一年からは少々でも楽になるのではないかという勝手な期待心が浮かぶ時もあった。すると、天は、「まだ軽くはなりません。」と言われるのであった。

つづいてW氏には次のことが判るのであった。

一 一月中に行われる儀式がすべて終わることにより、前述のとおり地球は一区切りを迎えることになる。この儀式が終わるとW氏は天に帰り、天の神様にこれまでの報告を申し上げ

る。(オイカイワタチの使命が終わったこと。)そして、天の神様より新しい命(使命)を頂いて再び降りて来るのである。

一月七日、午前七時五五分、神奈川県K夫人は次のテレパシーを受けた。

「世界中の方たるワンダラーは待っておられます。」

罎 これは、来る二三、二四日の儀式を待っておられるという意味である。

午後一時五〇分、次の靈感を受けた。

「神々様はお集まりになられ、地のワンダラー達を待っておられる。」

罎 地の方たるワンダラー達の準備が整わないことを言われているのである。

一月九日、午前七時一五分、同K夫人は次のテレパシーを受けた。

「天は全て準備されております。」

罎 地の方たるワンダラー達の準備が遅れていることを教えられているのである。しかし、傍証の役のK夫人にはこの意味は勿論判らなかつた。

後日に至り判ったことであるが、この頃、二三、二四日の儀式に参加する予定の方たるワンダラー達の中で、サタンからの妨害を受けている

者があつたのである。そのため少々の混乱があつたのである。

一月九日、札幌市交通局会館にて、札幌における第二回「オイカイワチ大講演会」が開催された。今回も素晴らしい雰囲気のもとで大成功に終わった。

一月一二日、午後四時三〇分頃。

Mさんは、オレンジ色に輝く雲で画かれた龍の姿が天に昇って行くのを見た。その時、心で、「龍が天に昇る」と思うとたちまちにしてその姿は崩れ、変化して「5」という数字が明確に画かれた。

罎 先に、「神の国に神木が四方に植えられ……」という靈感(189頁)のところで、これは、札幌、東京、大阪、福岡で行われた儀式(講演会)を意味すると説明した。来る十六日には、名古屋でこの儀式(講演会)が行われる予定になっており、これによって、日本の主要地の5ヶ所で整うことを示されたのであろう。

一月一六日。

名古屋桜華会館にて「オイカイワチ大講演会」が開かれた。

これまでに日本中の各地で一〇回の講演会が行われており、今回の名古屋は一回目である。これまでと同様にこの講演会も大成功であった。

十一月十七日、午後四時三〇分頃、Mさんは、天に巨大なオレンジ色のVの文字が輝いているのを見た。その下に菱形が二つ積み重なったような形(◇◇)が同じくオレンジ色に輝いていた。

註 昭和五五年に入ってから日本中の各地で、W氏とMさんが参加して行

われて来た「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式」は、前日の名古屋

屋講演会をもって終わり、ここにこの儀式(聖戦)は勝利(V)となっ

たことを示されたのである。

### 万たるワンダラー、新しい地球の神々様と結びの儀式

#### 鏝球王国建設を全世界に、と、開く儀式

十一月十八日、東京のI夫人は月を眺めていた。すると月が曲玉まがたまの形に変わった。「曲玉まがたま、

レタマヤ」と思ったその時、次のテレパシーと靈感を受けた。

「貴女はレタマヤの波動を知りなさい。」

「地球上のカルマに目を向けなさい。」

その時、心の奥で、「葬送の心」と思った。続いて……

「金星での貴女の名前の意味を知りなさい！」

このテレパシーを受けた時、「慈愛」という心が湧き上がって来た。すると続いてテレパシーを受けた。

「上と下とを結ぶ糸となりなさい。」

W氏は、I夫人に、このテレパシーと靈感を理解するために、その意味について次のように書き送った。(要旨のみを、発表のために少々加筆して記す。)

——前文略——

「地球上のカルマに目を向けなさい。」

世の終わりの姿は、地球上のすべてのもののカルマが出しつくされる姿です。それは地球の葬送の姿です。この姿は、現象面から見ると実に厳しいものです。カルマを見ることから目をさけたり、覆ったり、カルマが出しつくされるのを遅れるように祈ったり、カルマの出る厳しさから逃れようとしたり、カルマが出しつくされないで救いと平和だけを求めたりと

いう態度は、ワンダラーがこの地球に生まれ変わって来た「真」が判らないところから生じます。

「オイカイワタチ」本書58頁にありますとおり、「儀式によって地球と人類は救われます。」この「神様の儀式」にワンダラーが参加出来たことにより、霊界、幽界までの「根」のカルマが解けたのです。

万たるワンダラーが「神様の儀式」に参加出来ることにより、「現象の世界の根のカルマ」が解かれて行くのです。

正しい世の終わり（古い地球の葬送）は、レタマヤの世の終わりとなってはじめて出来ることなのです。そして、「形の世界」でも万たるワンダラーが「神様の儀式」に参加することにより、「形の世界」の根のカルマが解けて、レタマヤの世の終わりとなるのです。

すでに、レタマヤの波動が全地球、全人類、一切すべてのものに掛けられています。

「真」の目から見れば感謝と喜びの正しい世の終わり、神様の祝福したもう世の終わりなのです。

ワンダラーにこの「真」が判らないと、これからは使命が果たせないのです。

万たるワンダラーの中には、テレパシーや霊感が受けられても、まだ目覚めが幼いところがあるので「真」に欠けるところがあるのです。ですから、知らず知らずに現象の姿に目を

うばわれて自我が出たりして「レタマヤの波動」が判らない方があるのです。

「レタマヤの波動」が判らず、現象面の一点に心がうばわれたりしておりますと、自我が現われ、本質を、真を見誤り、間違った道に進むのです。そして地球上のカルマをしっかりと見すえることを忘れたり、恐れたり、さけたり、逃げたりし、さらに自我によりサタンに囚えられてワンダラーの役が果たせなくなるばかりか、天の神様のみに逆らった行動をしてしまい、それがサタンに手を貸していることすら判らないのです。

天は大変にお急ぎです。だから万たるワンダラーのそれぞれの方々には沢山のテレパシー、霊感を送られるのです。それを受ける役であることを忘れたり、間違っ理解しないよう、それを「真」で理解出来るように手助けする役を〇〇が受け持っているのです。

次のテレパシーは貴女のお役のことです。

「あなたの金屋での名前の意味を知りなさい。」

他の遊屋における名前は、「オイカイワタチ」本書にも書かれておりますとおり、その方の使命が、魂の響きが、言霊となって付けられています。

「カルナ」（彼女の魂の、金星での名前）と思った時、貴女は「慈愛」という思い（靈感）が湧き上がったと言われました。そして、その時、「上と下とを結ぶ糸となりなさい。」とテレパシーを受けられました。

このことを良く考えて下さい。あなたは、あなたの魂の響きのままの“慈愛”をもって（まだ目覚めの足りない万たるワンダラーもおられます。また、「地球上のカルマに目を向ける」ことをさせている方、サタンからの妨害を受けている方もおられます。）、その方々に“真”を「レタマヤの波動を知るように」慈愛で語って下さい。

ワンダラーには役の秩序があります。その秩序による上と下とを結ぶ糸となって、あなたの役を果たして下さることを心から祈ります。

あなたの慈愛は必ず周りの方々を助けて下さると信じます。——後文略——

一月二〇日、東京にて、次の儀式に参加する万たるワンダラーが集まった。

来る二三日、二四日には、次の重要な儀式が行われる。

二三日、出雲大社にて、『万たるワンダラー、新しい地球の神々様と結びの儀式』

二四日、金刀比羅宮にて、『鏝球王国建設を全世界にこと開く儀式』

本日（二〇日）は、この二つの儀式のための「準備の儀式」が行われたのである。これにより、この二つの儀式に参加する万たるワンダラー達の、儀式への準備は整ったのである。

「準備の儀式」が終わった翌二一日より二二日にかけて、激しい雨が九州より始まって日本列島を清めたのであった。（二一日朝、W氏は、「準備の儀式」が出来たことにより清め

の雨が降るといふ靈感を受けた。）

一月二一日、未明、Mさんの霊夢。

雀が屋根に数羽とまっていた。その雀がみるみる内に黄金の雀と化したのである。これを見たMさんは、昨日（二〇日）の「次の二つの儀式のための準備の儀式」が出来たことにより、儀式に参加される万たるワンダラー（霊夢では雀で表現）は、儀式の“真”が判った。（黄金の雀と化した。）ここに次の儀式の準備は整ったと判ったのである。

一月二三日、二四日、万たるワンダラーを代表した八名にW氏とMさんが参加して、次の重要な儀式が行われた。

一月二三日、出雲大社にて、

『万たるワンダラー、新しい地球の神々様と結びの儀式』

一月二四日、金刀比羅宮にて、

『鏝球王国建設を全世界にこと開く儀式』

しかし、ここで、この二つの儀式の詳細を述べる前にまず記しておかねばならない重要なことがある。

前述のとおり、二月二〇日には、東京にて万たるワンダラー一〇名とW氏が参加して、この二つの儀式のための「準備の儀式」が行われた。

この「準備の儀式」が行われる約一ヶ月くらい前より、この二つの重要な儀式に参加させまいとするサタンの迷わしのテレパシー、迷わしの靈感を、一部の万たるワンダラーは受けていたのである。しかしまだ目覚めが幼く、これを、サタンの迷わしのテレパシー、迷わしの靈感であると判る「真」が足りなかったため、ついに一部の方々は、「準備の儀式」にもこの二つの重要な儀式にも参加できなくなってしまったのである。

このように、儀式が行われる前にはいつもこのようなサタンの迷わしのテレパシー、迷わしの靈感が送られる。これが、「テレパシーとテレパシーの戦い」である。ここで「真」に目覚めていないと、サタンの妨害に倒されてしまうのである。

「オйкаイワタチ」全巻にくり返しくり返し述べられているとおり、どんな素晴らしいテレパシー、靈感を受けても、それはお役であって、「真」に目覚めているということは違うのであるということが、これで良く判るのである。この苦い<sup>にが</sup>体験と学びによって、ワンダラーは「真」に目覚めないと一歩も前進できないこと、そのことがサタンに手を貸してしま

うことになることなどが判り、これによって魂の練りを重ねて「真」の判るワンダラーとして成長してゆくのであろう。

「自我のあるところにオリオンがいるのです。」

出雲大社にて（二三日）。

『万たるワンダラー、新しい地球の神々様と結びの儀式』  
祈り。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

出雲大社にお集まりの神々様ありがとうございます。

私達は天の神様のお導きにより本日ここに参りました。

去る一〇月一〇日、湧玉の地におきまして、

『万たるワンダラー、鏝球王国建設の儀式』

同日、幣立神宮におきまして、

『万たるワンダラー、高天原の神々様と結びの儀式』

が無事に出来ましたことを、ご報告申し上げます。  
天の神様ありがとうございます。

本日ここに新しい地球の神々様と万たるワンダラー全員を結んで頂く儀式をして下さいましたこと誠にありがとうございます。

私達万たるワンダラー全員が天の神様の手足となって新しい地球、神の国鏝球王国建設の道が正しく進めますように、新しい地球の神々様のお守りとお導きを下さいますようお願い申し上げます。

出雲大社にお集まりの神々様ありがとうございました。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございました。

この出雲大社での儀式は午前一〇時三〇分頃より午前一一時頃にかけて行われた。儀式が始まる前には、出雲地方は天空一杯に雲が低くたれこめており、天の神々様がその雲に乗って一杯にお集まり下さっているということが良く判るのであった。

Mさんは、前日(二二日)の午後二時一〇分頃、出雲大社と金刀比羅宮に、『天の神々様の神々様は勢揃いされました。』というテレパシーを受けていた。

ところが、儀式の行われるこの日(二三日)、出雲大社では「神在祭」かみあさいが行われていたの

である。(御神在祭とは全国の神々が年に一度出雲大社にお集まりになるお祭といわれている。)

儀式の日取りは、この「神在祭」が行われるということとを全く知らないで決められたのであった。この不思議な一致は、自然の計らいであり神様の仕組みであろう。一行は、思いをさらに一段と新たにし、感謝したのであった。

儀式が終わると、それまで低くたれ込めていた天空一杯の白雲は急速に消え始め、やがて上空は、一片の雲も見当らないすきとおるような青空となったのである。

一行は、一つの大きな儀式を無事に終えた喜びと感謝を心にふくらませて、四国に向かって出発したのであった。

この日(二三日)、A氏は東京にて、午前一一時に次のテレパシーを受けていた。

「天と地が統一されました。」

二四日、金刀比羅宮にて次の儀式が行われた。

『鏝球王国建設を全世界に、開く儀式』

祈り。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

金刀比羅宮にお集まりの神々様ありがとうございます。私達は天の神様のお導きにより本日ここに参りました。去る一〇月一〇日、鏝球王国湧玉の地におきまして、

『万たるワンダラー、鏝球王国建設の儀式』

同日、幣立神宮におきまして、

『万たるワンダラー、高天原の神々様と結びの儀式』

十一月二三日、出雲大社におきまして、

『万たるワンダラー、新しい地球の神々様と結びの儀式』

が無事に出来ましたことご報告申し上げます。

天の神様ありがとうございます。

本日ここ金刀比羅宮にお集まりの神々様と全世界の万たるワンダラー全員が結ばれまして、鏝球王国建設を全世界にこと、開く儀式をして下さいましたこと誠にありがとうございます。

新しい地球、神の国鏝球王国の建設の使命が正しく出来ますように、全世界の万たるワンダラーをお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

金刀比羅宮にお集まりの神々様ありがとうございます。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

この日（二四日）は早朝より一片の雲もない抜けるような快晴であった。一行が金刀比羅宮の石段を登って行く途中、青空の中に突如、天のしるしを画いた白雲が現われた。一行は神殿にぬかずき儀式が行われた。

「祈りの言霊」が奉上されている時、Mさんは天より神様が降りられたのを霊視した。

そして、一行（W氏とMさんを除いて）は、儀式のあとさらに三百数十段の石段を登った奥院にて「祈りの言霊」を奉上了したのである。

奥院まで登らなかつたW氏とMさんは、天空に画かれる様々な天のしるしを見ていた。

まず、巾広い薄い白雲のベルトが向かって左側より現われて天空の半分を占めた。すると右側より同じような巾広い薄い白雲のベルトが太陽を中心にして現われ、天空のあとの半分を占めた。そして、この二つの雲は左右より結ばれ、天空を長く長く貫いた。しかも、左側の薄い白雲のベルトの下に、細く短い白雲で八本の線が画かれたのである。八本の線はこの儀式に参加した八名の万たるワンダラーを示していると判った時、次のように直感した。

「天と地は一つに結ばれた。」

一三時四五分、参加者の一人のI氏は、帰途の電車が琴平を離れた直後、次のテレパシーを受けた。

『今、全世界に開かれました。』

四国を離れて宇野に向かう連絡船の甲板上にて、天に画かれる次のようなしるしを全員が目撃した。それは、ことが成った時、いつも証しとして示されてきた、太陽を中心として巨大な虹の円が画かれている光景であった。また、四国の琴平附近より沢山の雲が扇状に天空（世界を意味する）に広がって行く光景もあわせて見られた。

一行は、金刀比羅宮における儀式も無事に終わったことを確信し、全員が心からなる感謝と喜びをかみしめたのであった。

### 古い地球の葬送大浄化の儀式

Mさんは金刀比羅宮での儀式を終えての帰途（十一月二四日）、電車の中で、次に行われるべき極めて重要な儀式についての靈感を受けた。

しかし、この靈感は、本来万たるワンダラーの中で、受けるべきお役の方々が受けるべきものであった。ところが、前述（200頁）のような事情で、この役の方々がこの大切な得がたいお役を果たせなかったため、Mさんが受けることになったのである。

これまでに、湧玉の地、幣立神宮、出雲大社、金刀比羅宮で、重要な儀式（「天の神様の儀式」、「宇宙の儀式」）が行われて来た。しかし、これらの方々は、これらの儀式がサタ

ンとの厳しい戦いであることが判らず、知らず知らずに自我を出してしまった。

『自我のあるところにオリオン（サタン）がおります。』という天の警告の「真」が判らず、迷わしのテレパシー、迷わしの靈感を受けていることも判らず、自我のためにこの靈感を受ける役を正しく果たすことが出来なかったのであった。

ワンダラーの進む道は厳しい道であり、『かみそりの刃の上を歩むがときである。』といわれているように、ワンダラーは、自我が出た時、自らが傷つき、悪いカルマを身につけてしまうのである。

しかし、この体験を経て、この方々はやがて「真」が判り、この悪いカルマを解かれた。そして、この試練を次からのワンダラーの使命を立派に果たせる良き助けとされ、今は素晴らしい働きをされておられる。このように厳しく苦しい戦いがワンダラーの聖戦なのである。

十一月二五日より、W氏とMさんによって直ちに次の儀式の準備が進められた。

この儀式は北海道在住の方たるワンダラーの方々によって行うことが、この日（二五日）の朝決められた。（これはすでに天で決められていたことであった。）

実は、このことがあってのことか、去る十一月九日北海道札幌市にて行われた「オイカイワタチ大講演会」の日に、W氏と北海道の主な方たるワンダラーの方々との座談会が行われ

ていたのである。そして、その時W氏は、最近の方たるワンダラーの方々によって行われている儀式について語っていたのであった。そこで、この座談会に出席された方々を主として、次の北海道における儀式が行われることになったのであった。

その儀式の日時、場所、名称は次のとおりである。

一月三〇日、

北海道有珠山大臼山神社にて、

『古い地球の葬送大浄化の儀式』

一月二六日、この儀式に参加される北海道の方たるワンダラーの方々の人選が北海道において自主的に決定された。

この日（二六日）、午前七時三〇分、Mさんは次のテレパシーを受けた。

『清められました。』

註 この儀式に参加する方々は、天の神様に清めて頂いて始めて参加出来る。その清めが行われたという意味である。

一月二七日、早朝より様々の天のしるしが空に画かれた。

午前八時三〇分頃、青空に巨大な鳳凰が大きく羽を広げ、尾を長くたなびかせて地（球）に向かって来る姿を見た。この時、次のように直感したのである。

「来る三〇日、有珠山大臼山神社で最後の重要な儀式が成されることが決定されたことを、天は大変お喜びであることを示された。」

この鳳凰が消え去ると、天空には巨大な亀、鶴を始め、魚類、鳥類、そのほか諸々のものが次々と画かれて行く。それらはみな、次の重要な儀式が決定されたことを喜び、そして、その儀式を待ち望んでいる姿であると判るのであった。

一月二九日、札幌にて、翌三〇日の儀式に参加する方たるワンダラー一四名が集まり、W氏も加わって「準備の儀式」が行われた。

一月三〇日、午前一一時三〇分。

方たるワンダラー一四名にW氏が参加し、有珠山大臼山神社にて次の儀式が行われた。

『古い地球の葬送大浄化の儀式』

祈り。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

有珠山大臼山神社にお集まりの神々様ありがとうございます。  
私達は、天の神様のお導きにより本日ここに参りました。  
去る一〇月一〇日、鏝球王国湧玉の地におきまして、

『万たるワンダラー、鏝球王国建設の儀式』

同日、幣立神宮におきまして、

『万たるワンダラー、高天原の神々様と結びの儀式』

十一月二三日、出雲大社におきまして、

『万たるワンダラー、新しい地球の神々様と結びの儀式』

十一月二四日、四国金刀比羅宮におきまして、

『鏝球王国建設を全世界にこゝと開く儀式』

がすべて無事に出来ましたことをご報告申し上げます。

天の神様ありがとうございます。

ここに、新しい地球、神の国鏝球王国の建設のすべてが整い終わりました。

よって、古い地球の葬送大浄化をして下さいますようお願い申し上げます。

本日、ここ有珠山大臼山神社にお集まりの神々様と全世界の万たるワンダラー全員が結ばれまして、『古い地球の葬送大浄化の儀式』を行って下さいましたこと、まことにありがとうございます。

うございました。

古い地球の葬送大浄化、レタマヤの世の終わりが正しく出来ますように、全世界のワンダラーをお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

有珠山大臼山神社にお集まりの神々様ありがとうございます。

天の神様、サナンダ様、カミラ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

二九日の「準備の儀式」に出席した北海道のK青年は、半月くらい前に次のような霊夢を見ていた。

万たるワンダラーが十数名集まって会議をしている。（その会場と会議の様子は今日「二九日」の「準備の儀式」のとおりであった。）この会場には非常口がある。この非常口の扉の向側にサタンがいる。サタンはこの会議の会場に入り込もうと扉を押している。K青年は、サタンが入り込まないように内側から扉を一生懸命押さえている。このような光景の夢であった。

この「準備の儀式」は神様に守られており、さらにサタンを誘い込むような自我を持たない万たるワンダラーの方々が集まられたため、サタンはこの「準備の儀式」の会場、即ち万たるワンダラーの方々に入り込むことが出来なかったのである。

この「準備の儀式」は二時間近く行われたのであるが、始められて三〇分くらいして、W氏は、この「準備の儀式」は正しく整う、という靈感を受けた。W氏は、「儀式のための意志統一」の話を語り終わった時、全員心が一つに結ばれたのを見た。この時、「準備の儀式」は完全に整ったと判ったのであった。

翌三〇日、万たるワンダラーを代表した一行一四名の心は完全に一つに結ばれ、愛の心で団結した素晴らしい雰囲気うちに、一行の車は有珠山大白山神社に到着した。

大白山神社の鳥居をくぐって神域に一步足をふみ入れた時、W氏は実に素晴らしく、強い靈気を全身に受けた。W氏は、これまで度々ここへ儀式に参加するために参っているが、今日はこれまでのものとも異った、表現しがたい靈気を感じたのであった。

この靈気は、勿論これに参加された一行の方々、ひとりひとりもそれぞれに感じておられたのである。

なお、一行の中には、次のようなことに気付いた方々もあった。

大白山神社の神殿の前には薄く砂が敷きつめてあるが、その表面に、子供たちが無心で画いたのか、 $\infty$ 「および」 $0$ の文字が大きく現われている。これを見た方々は、「これはなにかを意味しているに違いない。」と強く感じたが、帰りの車中で、何人かが、次のような同じ靈感を受けたのである。

「 $\infty$ 」は無限大であり、 $0$ は無を表わす。古い地球は葬送により大浄化されて0となり、新しい地球が、新しい世が無から無限大へと進んで行く。つまり、80即ち1980年11月30日11時30分に行われたこの儀式が成功したことによりすべてが進展して行くのである。」

儀式が終わった時、これまでW氏の全身に重くのしかかっていた重荷がサーッと降り、全身が軽く爽やかな気持となった。同時に喜びの心が大きく湧きあがって全身を包んだのであった。(この大きな喜びの感情は数日間にわたって続いた。)

一二月一日、(この重要な儀式が正しく終わった翌日)は、これまでの度々の儀式でW氏が経験して来たとおり、早朝より一日中、次々と天のしるしが千変万化に画かれた。数々のVの文字、鳳凰、金鶏、龍、それに変化の様など、それは正に天のしるしの大パレードであった。

帰途、W氏の乗った飛行機が、富士山、御嶽山みんげさん、白山が一線上に見える地点を通過する頃、一片の雲もない上空に、突如、白い雲でできた巾広い線が現われた。この雲の線の始点は切れていたが、終点はなく、飛行機の進行方向に、無限に延びている。始点には巨大な鳳凰がきらめく陽の光を受けて七色に輝く羽を大きく広げ、長い尾を引いて浮かんでいたが、やが

て、その鳳凰は、天に昇るかのように消え去った。(大きな輝くみたまが天に帰られたように……。)

すると飛行機の後方はるか彼方から、先のもと同じような、巾広い白い雲の線が現われてぐんぐんと延びてゆき、ついに先の線とつながって、一本の長大な雲の線となった。この雲の線は、飛行機を降りて地上からも、なお天空の端から端にかけて見えていた。この印象深い光景を見て、W氏は次の靈感を受けた。

「ここに『湧玉の儀式』が終わり、天と地は一本の太いまっすぐな線で完全に結ばれ、すべてが成就せり。」「現象の世界の『根のカルマ』は解けたのである。」

ここに、昭和五年(一九八〇年)の幕開けと共に始まった「形の世界」の現象の世界における様々の儀式は終了した。これをもって地球は大きな区切りを迎えたのである。

ここで、これらの儀式が行われた前後の、テレパシーと靈感を受ける役、傍証される役の方たるワンダラーの方々の働きを次に紹介しておこう。

(1)神奈川県のK夫人

一月二三日(出雲大社での儀式の日)。

K夫人は今日の儀式の祈りをするため、静かな場所を求めて靈感に導かれるまま神社に行った。始めてお参りする神社であったが、不思議にも時々心の中に、目の目で見ていた神社と同じであった。ここで、静かに心を統一して儀式の祈りをした。

午前一〇時一五分、次の光景を霊視した。

「突然、ボールのような円い玉が浮かぶ。まわりの皮がポロポロにはがれかかっている玉である。」

この時、次のように直感した。

これは、今の地球を表わしているのではないだろうか。このポロポロの皮をはぐために今日の祈りがあるのかも知れない。この皮の(とれた)中には黄金に輝く玉が入っているに違いない。中身は新しい世の鏝球王国であるはず。今日出雲にお集まりの神々様と結ばれて、このボール(地球)の皮を、天と地と一緒に剥がしてはぎとるのであろう。

午前一一時一五分、太陽の光が一段と強くなり、顔が焼けるようであった。様々な姿をした人達が数珠じゆずつなぎとなって一本の橋になっている雲を見る。

左の上空には一本の太い柱が立った。その柱の上部がたちまちにして神様を思わせるお方のお顔に変わった。そのお方はじっと見守っておられるようだ。この時、出雲大社での皆さんの祈り(儀式)は済んだと知った。

一月二四日（金刀比羅宮での儀式の日）、未明の霊夢。

K夫人は、この儀式（鏝球王国建設を全世界にこゝ開く儀式）に参加した人達と一緒に、お社の前で「儀式の祈り」を心の中で捧げている。すると、背の方より暖かい光が心の中にしみわたって来た。ふと振り向いて見て驚いた。白髪白髯ぜんの崇高なお方が、真白い布に少し朱色がかった衣を身にまとい、宙に浮いて立っておられる。やさしく、安らぎのある、なんとも表現しがたい尊いお方である。神様であると思った。

神様は右の御手を挙げられて、柔らかい光を、お祈りするワンダラー達にそいでおられたのであった。

その神様を中心（頂点）として右と左に二人の方がおられたが、この方々は地に足をつけておられる。丁度正三角形の型をなし、このお三方よりワンダラー達に光をそいでおられたのであった。

午前一時一分、「儀式の祈り」を捧げた。金刀比羅宮での儀式は終わったと感じた。

一月三〇日（有珠山大白山神社にて儀式の日）。

午前六時三〇分、目を覚ました途端、「コトパクシ山」と口をついて出る。（昨夜から度々「コトパクシ山、コトパクシ山」と口から湧くように出る。

註 コトパクシ山はエクアドルにある富士山に似た山であり、世界最高の

活火山である。これには深い意味が含まれているのである。

午前一時三〇分、「儀式の祈り」のあと全身より湧き上がる喜びと感動を感じ、次の思いが湧き上がって来た。

「いよいよよこが始まる。久しく待たれた天の神様の大御業が、神の国を築かれるための浄めがこれより始まる。」

二月一日、朝六時三〇分、目が醒めた途端、「ゴルゴダの丘」と口をついて出て来た。

## (2)東京のA氏

一月二五日、次のような思いが湧き上がった。

「近々大切な儀式が行われる。それは葬送の儀式である。この儀式が終わると〇〇〇〇が古い地球にピリオドを打たれる。」

この頃に受けた霊視と霊感に次のようなものであった。

「地球上に赤いベールが見えた。微震動している。この時、変わると思った。地球の真中に光の玉がある。地球に新しい波動が起こる。地球の「気」が変わる。それは新しい年の某月某日であった。」

「第二の太陽（新しい太陽）が現われる。その時、地球の真中に大きな波動が起こる。そ

れは新しい波動である。」

「この第二の太陽が見える時、△の円盤が多くの人達（の魂）を天へ吸い上げる。その時、その人達は靈感を受ける。それはレタマヤの天の神様の靈感である。吸い上げられた人々は、天で新しい使命を頂いて地に降ろされる。」（この本の219頁参照。）

一月三〇日、午前一時四〇分頃（有珠山大白山神社での儀式の終わった頃）の霊視。

「大きなみたまが、天に昇って行くさまを見る。」

そのあと、次のテレパシーを受けた。

「昇る、昇る」

(3) 東京のI夫人

「大きな光が天に昇って行く」のを霊視した。

註 I夫人は、「12月11日は〇〇〇〇になにか気にかかることがあるように思える。」とA氏より電話を受けた。その時、これを霊視したのである。

それは、とても大きな光（霊かもしない）がゆっくりと天に昇って行くさまであった。その時、誰かははっきり判らなかったが、偉大な方、大きな魂のような気がした。

この頃に、これに関連したことを次々と思いつかべたり霊視したりした。それは……

① 近々にW氏の魂も天に帰られ、新しい命（使命）を頂かれて再び地に帰られるのを見た。（その時は、顔を変えて降りて来られたのを見た。）

② 来年（一九八一年）某月頃、デンバーのEさんも天に帰られると思えてならないのであった。

③ 来年の五月頃より、真に目覚めてカルマを真で解いてこれまでの役を果たした（万たる）ワンダラー達は、順次天に帰って行く。そして、新しい使命を頂き、その魂を新しい顔に変えて頂いて再び地に降ろされる。（A氏も同様、この光景を霊視していた。）

註 ワンダラーは、天の神様より頂いて来た（ある段階までの）使命を果たし終えると、天に召されて（天に帰り）天の神様より次の新しい使命を頂くのである。その時、天の神様はそのワンダラーの魂の顔を、新しい使命を果たすにふさわしい新しい顔に変えて下さるのである。ワンダラーは、その新しい顔をもって地球に再び降ろされて、魂は以前の地球の肉体の中に入る。肉体の顔が変わるのではないが、ワンダラーの本当の顔はその新しい顔であり、その本当の顔でそれからの使命を果たしてゆくのである。だから、地球人として生まれている地のワンダラーは、心と意識と肉体において、真に目覚めて、魂（本当の顔）と一つに結ばれないと使命が果たせないのである。

これを、天の神様は、『顔を変えて使命を果たすのです。』とW氏に

語られたことがある。

しかしながら「顔が変わる」ということには、『顔が良く変わる』場合と、『顔が悪く変わる』場合があるとも教えられている。

まず、『顔が良く変わる』ということは次のとおりである。即ち、ワングラーが、真に目覚め、カルマを真で解いて、使命を果たして行くことにより、天の神様は、顔を良く変えて下さるのである。

これに対し、『顔が悪く変わる』ということは次のとおりである。即ち、真に目覚めず、カルマが解けず、サタンに手を貸し、使命が果たせなくなっていくワングラーは、カルマで顔が悪く変わるのである。

I 夫人は続いて次の光景を見る。

「一九八一年某月の初旬、気流のようなもの（波動）が地球の周りを凄<sup>や</sup>い勢いで取り巻き、地球の気流（波動、気）が変わって行く。」

「新しい太陽が輝く。ある人々は大変苦しがつて顔がはれ上がり、頭からは湯気<sup>ゆげ</sup>が出ていく。しかし、ある人にとってはとても気持ちの良い光であった。」（此これは、象徴的な表現で示されたものである。）

「ピラミッドが動き始める。（開くというおうか。）天（宇宙）から光を受ける。地球の中心に向けて光が発せられる。」

「ピラミッドの上に円盤を見た。」

この光景のあと、次の光景を見た。

ワングラーの中のある人は、光体となる。しかし、ある人は光体のまわりに黒い霧のようなものがかかっている、その光体はにぶく光っている。

光体のワングラーが黒い霧のかかった人に近づくと、その人の中に、にぶく光るものが強い光に変わって、その黒い霧の中にパチパチと火花が飛ぶように見えた。

罅 光体とは肉体のことではない。また肉体を脱いだ状態でもない。真でカルマを解いて、真に目覚めているものは別の目から見ると光体となっている。

真に目覚めず、カルマを真で解いていない者は黒い霧（カルマの象徴）に覆われている。

黒い霧で覆われた人が光体の人に接触（クカタカタを受け入れること）するとその人は真に目覚め、本来の光が輝き始め、自からカルマを真で解いて（パチパチと火花となって）行くことを示したものである。

「大地震のあと、あるワングラーが人々に円盤が助けに来ると話している。そしてその人は何日も何日も空を見上げて待っているが円盤は来ない。そのワングラーは、とてもうらめしそうな目をして、どうして来てくれないのかと天を見上げている。」

「あるワングラーはお腹をすかせ、缶詰を見つけたが中味が入っていない。傷ついた身体は飢えと痛みで苦しんでいる。もう人々は誰も話を聞いてくれない。皆は食べものを求める

のに精一杯である。彼は天に向かって助けを求めるが、なんの変化も起きない。」

註 ワンダラーは特別の存在でも、スーパーマンでもない。真に目覚めて、カルマを真で解き、ワンダラーの使命を果たさない者（黒い霧のようなものに包まれているワンダラー）への警告であろう。

I 夫人は、地球のカルマのさまを見て涙があふれて来た時、心の中で柔らかな気持ちと共に次の言葉が湧き上がるのを感じた。

愛する人よ、愛する地球よ、

泣かないで……。

真に目覚めた愛は断ゆることなく、

魂は永遠ととしえだから……。

すべてのものは大地をゆるがし、焼きつくされ流される。

赤く燃える地球よ、

長い歴史の血や苦しみ、涙をも焼きつくすのだから……。

愛する人よ、愛する地球よ、

泣かないで……。

真まことに目覚めた愛は断ゆることなく、

魂は永遠だから……。

——この言葉を感じてから、心が平和になり、とても、とても静かな喜びが全身にじわと広がって来たのである。

#### (4) 神奈川県のM夫人

一月三〇日（有珠山大臼山神社での儀式の日）の霊夢。

夫人は海を見ていた。すると大きな雲が次々と現われ、大佛様、観音様など様々の佛様の姿に変化して行った。その変化して行く佛様の姿が余りにも巨大であるので、夫人は腰を抜かしてこれを見ていたのであった。

#### (5) 大阪のN夫人

二月三十一日、朝、次のテレパシーを受けた。

『カルマの醜さを見て、自らのカルマを浄めるのです。

醜いカルマの姿を見る時が自らの磨かれる時と思うのです。清らかに、清らかなになりなさい。』

第三部

湧玉わくたまの祝事いわいごとの儀式

## 第一章 湧玉の祝事の儀式

—レタマヤの世の祝事の儀式—

一二月三日、未明、Mさんの霊夢。

近江神宮でお祝いの大祭典が行われている。この儀式に参加するために、非常に沢山の人が延々長蛇の列をつくって進んで行く。この参列者の方々は、人種も、時代も様々であり、世界中の人達であった。

神宮の本殿には立派な祭壇が設けられていて、Y宮司がこれらの一切を取り仕切っておられる。宮司の横には神馬（白馬）が控えており、その神馬は今まさに天空（金星）へ駆け昇らんとしている姿であった。

延々と続く参列者は、次々と祭壇の前で拝礼し祈りを捧げて行くのであった。

同じ日（三日）、A氏は次の光景を霊視した。

なにか儀式があると思った。多くの人達がW型に並んで儀式のようなことが行われている。そのWの中に●(レタマヤ)が見える。

同じ日(三日)、I夫人の霊視。

朝起きたが余り眠いのでポーッとしていると次の文字が頭に明確に浮かんで来た。

「儀式」

一二月五日。

次に行われる儀式についての基礎が、近江神宮のY宮司との打ち合せにより次のとおりに決定された。

儀式 『湧玉の祝事の儀式』

—レタマヤの世の祝事の儀式—

とき 昭和五六年一月一日 午後一時

ところ 近江神宮

この儀式の基礎が決定されたこの日(五日)の午後六時一五分頃、W氏とMさんは、帰途の車中より、バレーボールの球より一まわりも大きく見える円盤が、頭上をゆっくり進行方

向に進んでゆくのを目撃した。

この大きな円盤は、ともかく、素晴らしく美しいものであった。ステンドグラスを思わせるような鮮やかな七色の輝きをちりばめ——その色は、心にしみこむような、また心が洗い清められるような美しさで——上空を輝きながら飛翔し、W氏とMさんの車のやや先方まで来た時、地上にスーッと落ちるようにして消え去った。

W氏は、これほど美しい円盤はこれまでに見たことがなく、また、Mさんもこれを目撃して胸の鼓動が止まるほどに感激したのであった。そして二人は、この時、次のように確信したのであった。

「次に行われる重大な儀式の基礎が決定されたことに対し、天の喜びを示されたのである。」

一二月七日、早朝のMさんの霊夢。

その1 阿蘇山の外輪山のある所から山々を眺めていた。あちらの山、こちらの山と火の手が上がり、あちらこちらが火事となる。ヘリコプターが上空を舞って消火につとめているが、こちらを消せばあちらが燃え上がるというように次から次へと火の手が上がる。

その2 ある田舎のお宮さんのお祭りに、沢山の人達が喜び勇んで行く。稲穂が黄金に輝いている。

その3 我々も旅館に泊まっており、そのお宮へ出かけて行った。しかし、便所に行きたくなったので旅館に戻ると、便所の前には沢山の人が行列をつくって順番を待っている。

註 その1 日本中に、世界中に、あらゆるところに、カルマがどんどん吹き出て来ることを象徴したものである。

その2 次に行われる重大な儀式には沢山の人達（魂）が喜び勇んで行くのである。

「稲穂」とは、新しい地球には灯がともったことを意味する。その灯は黄金に輝いている。（第二巻「別冊二」65頁参照）

その3 そのお宮（儀式が行われるお宮を指し、また、新しい地球、鏝球王国のことを指す。）には、身に持つカルマを出して行くのであることを象徴している。

二月八日、I夫人は次のテレパシーを受けた。

『ピラミッドは次々と開かれます。』

この時、日本で始まったピラミッドの動き（働き）は、いよいよ世界中にあるピラミッドの動き（働き）へと広がってゆくと思った。

註 ピラミッドは天の「気」を地に入れられるところ。第三巻（別冊三）

259頁にも、ピラミッドは、「天の意を地に頂く所、聖なる所。」とある。

この日（八日）、夜半、I夫人の霊夢。

一人の高貴なお方が正式の礼服（国王陛下や皇太子殿下がお召しになるような服）をお召しになってお座りになっておられる。大勢の人達の顔が見える。全員がとても嬉しそうにしている。この高貴なお方は天皇陛下であると思った。

註 これに関連したことを、去る一月二三日、午前六時三十八分、神奈川県K夫人が霊視していた。

大きな奇麗な建物の中である。中央は廊下になっており、その両側にはいくつもの部屋が並んでいる。廊下には赤いじゅうたんが敷きつめてある。前方から崇高な尊いお方（天皇陛下）が歩いて来られ、いくつもの部屋の前に立ち並んでいる人々の顔を一人一人たしかめてご挨拶をなさり、時々お言葉を交わされている。（この時、陛下は天にお帰りになるのではないかと思った。）ここで霊視は消え去った。

午前八時五分、天空に曲玉（レタマヤの意）の形をした雲が二つ現われている。太陽の光で一つの曲玉は青く光り、もう一つは赤く光っている。これを目撃してからは天空に次々と天のしるしが画かれていったのである。

一月二〇日、夜半、I夫人の靈感。

「天は見定められている。」

註

「オйкаイワタチ」第一巻(本書)140頁に次のように述べられている。

AZ『地球のカルマを、天の神様が良く定められます。(終わりまで)』

神様は頑張るようにいわれました。(一九六〇年)

一月二一日、未明、あるワンダラーは天より次の声なき声<sup>テレバシー</sup>を聞いた。

『あなた方がここまでやって来られたのは、何事も越えた協力があったからです。』

この日(二一日)、A氏は次の天のしるしを見た。

朝六時五〇分頃、太陽を拝んだ時、太陽の中に」(Lの文字の反対)が画かれているのを見た。この時、古い地球は終わり、新しい地球が来たのと思った。

夕方、天空に龍体の形をした雲が浮かんでいる。その龍の上に一人のお方がお乗りになっておられる。そして、その龍の周りを沢山の亀が取りまいている。それら(龍と沢山の亀)が西へ西へと進んで行く光景を見た。その時、なぜかA氏は、〇〇〇〇をお送りするのだと思った。(註この日(二一日)、〇〇〇〇の偉大な御魂は天にお帰りになられた。)

続いて、スフィンクスが現われて西に向かって走って行くのを見た。やがて、スフィンクスは太陽と共に西の地平線下にしずみ、消え去って行った。

この時、西空の上空から雲で作られた幕が下(地上)に向かって降ろされて来た。幕が閉じられたと思った。

一月二二日、アメリカのデンバー市のE氏、東京のS工学博士、W氏の三人による講演会が東京で開かれた。

東京のA氏は一週間くらい前より、時々四角の箱(契約の箱の意味)を霊視していた。

この日(二二日)、三人の講師による講演を聴いていた時、ふと目を閉じた。すると、契約の箱が開かれているのが霊視された。しかも、その契約の箱は美しく光り輝いていた。「契約の箱」は開かれたのであると判った。

一月二五日、Mさんの霊夢。

観光バスのような車で四〇五〇名の人達が神社に向かっている。途中で便所に行く。ところがその便所は急傾斜地に建てられており、バラック造りでひどく汚れている。しかも、用を足すところはとても狭くて、不便で、大変使用しにくい便所であった。

この霊夢の意味としては、次の二つのが考えられる。

その1 次に行われる大切な儀式に参加するには汚いカルマを出して行かねばならないことの象徴。

その2 いよいよカルマを出す時が来た。しかし、これからカルマを出して行くのには、大変な苦しみと苦勞がともなう。その厳しさの象徴。

一二月一六日、Mさんの霊夢。

ある人が近江神宮で行われる『湧玉の祝事の儀式』に参加した。ところが儀式が終わったとたん、その人の顔は野良猫の顔に変貌した。”

この意味は次のとおりである。即ち、来る一月一日、近江神宮で行われる『湧玉の祝事の儀式』が終わることにより、白と黒は厳然と分たれるのである。(人種のことではない。)しかし、これは、黒は永遠に葬り去られるという意味ではない。黒もカルマが解けて、真に目覚めれば神の子である。この神の子の自覚に達するまで(真に目覚めて自らカルマを真で解くまで)、厳しく苦しい大変な戦いが続くのである。これにより生まれ変わるのである。即ち、顔が悪く変わったものは、悪い顔がもとの顔に変わるまで、この身に持つカルマを解く戦いを続けるのである。

一二月一八日、午前二時、I夫人の霊視。

ある二人のワンダラーがとても重い荷物を持っている。”  
するとどこからともなく声がした。

『長く苦しかったです、もう大丈夫です。』

すると、その二人のワンダラーはニコニコととても嬉しそうな顔をして、「よかった、よかった。」と語り合っている光景を見たのであった。

この日(一八日)、W氏とMさんは近江神宮を訪れた。そして、Y宮司と共に次の儀式が行われた。

『湧玉の祝事の儀式のための準備の儀式』

一二月一九日。

『湧玉の祝事の儀式』の案内状が発送された。

註 一八日、一九日の両日は、沢山の天のしるしを見た方、特に素晴らし  
い靈気に包まれ天になにか良いことがあったのではないかと思われた方  
々が沢山おられた。

一二月二三日、F嬢は次のテレパシーを受けた。  
『約束の時間が来ました。』

一二月二四日、この日には、次のような天のしるしが現われた。

①午前八時一〇分、NHKのテレビニュースで、「富士山に巨大な美しい虹がかかっている。」と放映した。

②翌朝の朝日新聞の東京版と名古屋版には……、

(イ)東京版「東宮御所より巨大な美しい虹が出て光り輝くのを見た。」という意味の記事が掲載された。

(ロ)名古屋版「あら不思議、夜の虹」のタイトルで、次のような記事(要約)が写真入りで報道された。

三重県安濃町経ヶ峰(標高約八二〇m)の上空に「夜の虹」が出来た。

東に満月がこうこうと照り、西は雨。午後九時半ごろ、西の空に赤、だいたい、黄、緑、青など色も鮮かに虹が見えた。虹は経ヶ峰を覆うような大きな弧を描いていた。だんだん弧は小さく低くなり十一時ごろ見えなくなった。

③Mさんの体験

午後七時三〇分頃、雨は小降りになり天気は回復せんとしている。東の方は黒雲で覆われ、真黒の帳が降りたような空であった。その帳が突然さけ、富士山の形を作って黒雲が開いた。中に月が輝き、その照り映えて、その富士山は、黄金色とも美しいオレンジ色ともつかない輝きに包まれていた。

Mさんは、「あ、富士山だ。」と心の中で叫んだ。するとその富士山の姿はかき消すように消え去った。それは極めて神秘的な美しい光景であった

その時、声なき声が天よりおごそかに聞こえて来た。

『湧玉の祝事の儀式、ここに整えり。』

午後九時頃、空は晴れていた。満月は美しく照り輝いている。その満月を中心にして、様々な天のしるしが現われた。

ピラミッド△、巨大な▽の文字、正三角形▲、契約の箱□そして人型、走る人型等々が次々と画かれていったのである。

註 その一、二四日のことにかんしては、二、三週間くらい以前より、数名のワンダラーの方々が、「この日(二四日)になにかがある。」という靈感を受けられていたのである。

その二、今夜(二四日)は、キリスト降誕の聖夜(イブ)である。サナダ様のことが思われた。一九八一年一月一日に行われる「湧玉の

祝事の儀式』は、惑星地球、全宇宙の喜びの祝典である。この重大な儀式はここに整ったのである。こうこうと照り輝く満月、全天から放たれる霊気、この日に見られた一連の光景は極めて神秘的なものであった。

一二月二十五日、F嬢の霊視。(報告のまま)

最初に、富士山のような山が見え、その上空に雲が二筋見えました。

次に、田園や都市、道路やいろいろな所で、号令でもあったように人々がある方向目指して歩いて行きます。

次は、人々が整列している場面です。実にいろいろな服装をしています。民族衣装や各時代の服装をした人々が、それぞれグループで整列しています。

皇室の方々もいらっしゃいます。最前列には皇太子殿下御夫妻がいらっしゃいます。

註 これは、来る一月一日に行われる儀式を皆さんがお待ちになられておられるという意味を表す光景である。

一九八一年一月四日、未明、名古屋のY氏は次のような霊夢を見た。以下に掲げるのは、

Y氏の手紙のままである。

夢に見たままの報告

ある真夜中、私(Y氏)は夜食を食べに外へ出ました。食べおわって食堂を出ると、前に広い国道のような道があります。周囲には大きな建物はなく、夜空は、地平線から地平線まで見渡すことができました。真夜中のせい、道路には車が一台も通っておらず、また近くにはなんの照明もなかったのです、あたりはまったく静まりかえっていました。

私(Y氏)が、その広い国道のような道を渡り切ったとき、突然国道のかなたの地平線から波形をした大きな白い光の帯が現われて、天空一杯に拡がり、猛スピードで頭上を通過して反対側の地平線に消え去りました。その速さたるや、天空の端から端まで、ほぼ一秒くらいしかかからない程でした。なんだろうと思って見ていると、この光の帯は次から次へと現われ、はためき、波うち、光り方かたを変えながら、どんどん頭上を駆け抜けてゆきます。(音は全くしませんでした。)  
「オーロラかなあ?」と思ったのが最後に頭に浮かんだ考えで、そのあとはもう、その圧倒的な迫力に、ただ呆然として見つめるばかりでした。

光はいよいよ物凄くなり、全天の端から端まで拡がって、しかもいろいろな光り方かたの帯が何層にも重なり、ゆれ動き、そして全体がああ猛スピードで天空を疾走してゆくのです。それは全くたとえようもないすばらしい光景でした。

するとそのうちに、白い光の帯ばかりでなく、さまざまな色に輝く光の線が、かなたの地平線から出現しました。(この光の線は、なぜか“生命体”を思わせるものであった。)しかもそれらは、千変万化に形を変え、色を変え、七色にきらめきながら、光の帯と同じ猛スピードで駆け抜けてゆくのです。見ているうちにこの光の線はどんどん数を増してゆき、上下左右に重なり合い、拡がり、結びつき、からみ合い、天空は乱舞する光と色の大洪水となつてしまいました。見たことも考えたこともないようなさまざまな模様が織りなされ、それぞれが複雑な動きで姿を変え色を変え、反響像のような光の線を何十本も供い、しかもその全体がものすごいスピードで天空を雪崩のように、滝のように駆け抜けてゆくさまは、神秘とも荘厳とも、この世の言葉ではなんとも形容しがたい圧倒的なものでした。

そのころには、私はもう腰がぬけてその場にしゃがみこみ、足をガクガクふるわせ、口をあけたまま目をみはるばかりでありました。頭は完全にカラッポになって、もはや何の考えも感情も浮かばず、ただただ見つめるばかりでありました。(あいかかわらず音は全くありませんでした。)

この光景はずい分長い間続いたような気がしますですが、実際は五分から十分の間だったでしょう。色と光の乱舞がいよいよクライマックスに達したとき、突然ドドンという深い響き(霊的なもの)が大地をゆるがし、私はその音でハッと目を醒ましたのです。

目が醒めてもなお、今の光景の圧倒的な迫力から受けた衝撃は全身に生々しく残っており、しばらくは全身がしびれたようになって、寝床の中で呆然としていました。

この光景(霊夢)から受けたY氏の感想と解釈

・まず、正直な感想としては、私(Y氏)は今だかつて、夢でも、現実でも、いろんな絵や写真や映画でも、これほどものすごい光景は一度も見たことはなく、ただただ圧倒されるばかりでした。ただし、圧倒されるといってもライマカタ的なものや悪い感じは少しもなく、また恐怖を感じさせるものでもありませんでした。(しいていえば、人間をはるかに超えたものに対する畏怖感。)

・この夢全体には、霊的に深い意味があるような気がしてなりません。

・天空に出現したもののには、“人智をはるかに超えたもの”という印象があり、特に、後から出現したいろいろな光の線は、それぞれが一種の“生命体”であるような感じをうけました。光の線の形や色の目まぐるしい変化は、それぞれがなんらかの意味を持つ“語りかけ”のような気がしましたが、その情報量が余りにも莫大で、しかも人間智をはるかに超えたものなので、ひとつも理解することはできませんでした。(ただし、それらは決して悪い感じのものではなく、人間的な感情に翻訳すると、たしかに歓喜の表現とも受けとれた。)

・目が覚めてから、“魂が天に帰る”という気がしました。(これは、特に最後のドドン

ンという響きに関して。)

・地球のバイブレーションが変わったことによる、自然霊の歓喜の表現といったようなものではないかと思えます。この地球に住む生命体は、人類だけではなく、さまざまな種類の生命を持った存在が幾重にも地球を覆っていて、それらの生命体の全てが、一月一日の『湧玉の祝事の儀式』を迎える喜びを表現しているものと感じました。

一月八日、未明、Mさんの霊夢。

近江神宮の森に、いろいろな種類の小鳥や動物達が沢山集まっている。境内は、あちらこちらから集まって来た人々で一杯である。来る一日の儀式の始まるのを待っておられるのである。

一月一日(一九八一年)、午後一時。

真に目覚め、使命を自覚された全国の沢山のワンダラーの中から五五名の方々が、代表として全国各地より近江神宮に集まられた。そして、惑星地球と全人類、すべてのものが救われるための、天の神様がなさる最後の儀式が、次のおり同神宮で行われた。

### 『湧玉の祝事の儀式』

——レタマヤの世の祝事の儀式——

祈りの言霊。

天の神様ありがとうございます。

サナンダ様、ソクトル様、テケル様、カミラ様、タノアス様、アトネ様ありがとうございます。

天の神々様、地の神々様、宇宙の多くの方々ありがとうございます。

近江神宮にお在します、天照らし国照らし坐す、天地豊開かす別けの大神様ありがとうございます。

天の神様、ご報告申し上げます。

惑星地球での、世の終わりと、新しい地球、神の国鏝球王国誕生の聖戦であります、天の神様がなさいます儀式、および、天の神様のお命じになられました儀式は、一九六〇年に始まり、地球の内奥の世界から形の世界に至りますまでの数々の世界において行われました。この数々の儀式、即ち湧玉の儀式は、天の神様の沢山のお守りとお導きにより、一九八〇年をもって全てが整い、終えて下さり、ここに明るく変わる湧玉を、明るく変わる地球を天の神様にお渡し出来ましたこと、ありがたく、謹んで深い感謝と共にご報告申し上げます。

よって、本日、天の偉大な方々、神々様、地の神々様、宇宙の方々、ご皇室の方々と共に、全世界のワンダラー全員が集いまして、天の神様のなさいます今日の儀式に参加出来ましたことを深く感謝申し上げます。

ここに、惑星地球の『湧玉の祝事の儀式』——レタマヤの世の祝事の儀式——を行って下さいましたこと、まことにありがとうございます。ありがとうございました。

これからも新しい地球、鏝球王国を、全人類、全動物、一切のすべてのものを、お守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

世界中のワンダラー全員が、これからの沢山の働きが正しく立派に出来ますようお守りとお導き下さいますようお願い申し上げます。

近江神宮にお在あします、天照らし国照らし坐ます、天地豊開あめつちとよひかす別わけの大神様ありがとうございました。ございました。

天の神々様、地の神々様、宇宙の多くの方々ありがとうございました。

サナンダ様、ソクトル様、テケル様、カミラ様、タノアス様、アトネ様ありがとうございました。ました。

天の神様ありがとうございました。

儀式を終えたあと、W氏は、『湧玉の祝事の儀式』について次のとおり説明した。



今から二〇余年前（一九六〇年）、〃宇宙の偉大な方々〃より、『地球と人類は儀式によって救われます。』と教えられました。そして、その儀式は「湧玉の儀式」、「祝事の儀式」を指し、この儀式は、「天の神様の儀式」、「宇宙の儀式」であると言われました。

この「儀式」は、言葉を替えれば「湧玉の戦い」、〃神様の聖戦〃と叫びます。この聖戦にワンダラーは参加して、神様の手足となって戦って来たのであります。

儀式、即ち神様の聖戦は、神様の「真」を輝かす戦いでありました。この「真」でサタンと戦うのです。また、真に目覚めて、「真」を輝かして、真で地球のカルマを解く聖戦であったのであります。これを「湧玉の戦い」といっているのであります。

「湧玉の戦い」について、「オイカイワタチ」第一巻（本書）156～158頁には次のように書かれております。

金星の神様の席の方、テケル様が一九六〇年に次のように言われております。

「湧玉の戦いを終わらずに変わることは、今日までの戦いが神様の戦いではなく、悪い者

のための戦いであったこととなります。ワンダラーとしてこれ程の苦しみはありません。よく神様の湧玉を真で守り、変わる地球を神様の手に渡ししましょう。』

『明かされる、変わる湧玉は、カルマがよく真で解け、神様が判る湧玉となります。良く変わる真を湧玉へ捧げて、変わる湧玉を神様へ渡すことが出来るようよく神様へ頼みなさい。』

次は天の神様から頂いたお言葉です。

変わる湧玉を悪い者の手に渡すことは私の悲しみです。

変わる湧玉は、ルシファーをカルマが倒す戦いで、変わる湧玉を悪く変える

ようなことがあれば、変わる私の沢山の戦いは、良く戦うカルマを、悪く戦う

カルマとします。

この『湧玉の戦い』が一九六〇年に始まり、二〇余年間にわたって地球の内奥の世界から形の世界の『現象の世界』に至るまでの数々の世界（無の世界、霊の世界、たましいの世界、

形の世界の霊界、幽界、現界）において、数々の戦い（湧玉の戦い）が行われて来たのでありますが、この神様の聖戦も、一九八〇年をもって、すべてが終わりを告げたのであります。よって、ここに、明るく良く変わった湧玉を、明るく良く変わった地球を、天の神様にお渡しすることが出来たのです。

地球は救われ、生まれ変わります。

全人類、全動物、一切のすべてのものは救われ、生まれ変わります。

これは、地球の、全人類の、一切のすべてのものの喜びであり、

太陽系、全宇宙の喜びであり、

全宇宙の神々様、地球の神々様の喜びであり、

天の神様のお喜びであります。

この喜びの祝いの大祭典が、本日（一九八一年一月一日、近江神宮にて）行われた『湧玉の祝事の儀式』であります。この儀式には、全宇宙から、そして皇室の方々、全世界のワンダラー、地球上のすべてのものが、先に霊夢で見せられたとおり参加されたのです。

この『湧玉の祝事の儀式』をもって、惑星地球に対する天の神様のお命じになられた儀式のすべてが終わったのであります。

いよいよ、これから、世界中のワンダラー全員が総力をあげて、人類の目覚め、気付きの

ために戦う（使命を果たす）時が来たのであります。

~~~~~  
 W氏は以上のように「儀式」について語り、そのあと御神酒で全員が乾杯してこの儀式は  
 終えられたのである。

この後、この儀式に肉体で参加された方々は深い感動と深い喜びに包まれたのであった。  
 W氏とMさんにおいても心の奥より湧き上がる喜びが翌日、翌々日と続き、それからは、落  
 ち着いた平安な心が全身を包んだのである。

一月一日（アメリカ時間一月一〇日）

アメリカのデンバー市在住のE氏はか、アメリカにおられるワンダラーの方々を代表した  
 七名が、デンバー市の「聖なる山」の頂上に集い、『湧玉の祝事の儀式』——レタマヤの世  
 の祝事の儀式——に参加された。

この儀式が行われる前、この「聖なる山」に、雲で画かれた龍神の姿の天のしるしが現わ  
 れ、同時に、太陽の周りに巨大な二重の虹が現われた。

儀式の祈りが終わった時、雲間に輝く光が現われた。（円盤と直感した。）さらに、その  
 雲間を貫いて地上から虹の柱が現われて、天に向かって昇っていった。そして、天と地が虹  
 によって連らなった。

この時、E氏は、「この儀式は正しく行われ、そして終わった。」と語ったのである。

一月二日、午後三時頃、I夫人は、霊視とも霊夢ともいえる状態で次の光景を見た。

天よりラップの音が鳴り響いて来た。空には二頭立ての白馬が幾頭も幾頭も並んで天に向  
 かって行く。その二列縦隊に並んだ白馬は先頭に向かうほど広がり、こうして、沢山の白馬  
 が全体としてVの文字を画いて昇って行くのであった。

一月三日、未明、Mさんの霊夢。

Mさんは、白木造りの箱（のようなもの）を奉戴するようにして持ち、狭く、細く、薄暗  
 い、曲りくねった、長い長いトンネルの中を歩き続けて、ようやくにしてこの長いトンネル  
 から外に出たのであった。ここで目を醒ました。Mさんは、この白木の箱は神様を象徴して  
 いるのではないかと思った。

一月一六日、夕方、I夫人の霊視。

天の神様が御手に弓を持たれてお立ちになっておられる。今、天の神様は地球に向けて白い矢を放たれた。

地球は低い波動によって幾重にも取り巻かれている。神様が放たれた白い矢は、幾重にも取りまいてる低い波動をどんどんと切りさいて行く。そして、低い波動が切りさかれて行ったあとは、新しい波動に変わって行く。この神様の白い矢は日本に向かって進んで行ったのである。

一月一七日、午後四時四〇分頃。Mさんの体験。

西に傾いた太陽がハートの形(♥)をなして真赤に輝いているのを目撃した。

「凄い！ハート型の太陽だ。」と心の中で叫んだ。するとたちまちにしてその太陽は消え去り、いつもの丸い真赤な太陽に変わった。しかし、その太陽から放たれるエネルギーは、今までに感じたことのない程に物凄く強いものであった。この時、次のように直感した。

「天の神様の御心の太陽に変わった。」

罫 翌日からの太陽の輝き、および、その太陽から放たれるエネルギーは、これまでのものとは違ってきたと強く感じるのであった。

## 第四部 ワンダラーの使命は開始された！

## 第一章 古い地球の、終わる時、が来た

— 終わりの儀式 —

— 昇華の儀式 —

『湧玉の祝事の儀式』は終わった。ここに地球と全人類、全動物、一切のすべてのものは救われることになったのである。

いよいよワンダラーが、天の神様に、大御業（古い地球の終わり）をお願いする時が来た。ここに、古い地球の、終わる時、を迎えたのである。

そして、この、終わる時、が、即ち世界中のワンダラー全員が使命を果たす本番の時なのである。この惑星地球に他の遊星からはるばるやって来た（生まれ変わった）ワンダラー達の唯一の目的（使命）を果たす時が、今、ここに来たのである。

あるワンダラーは、去る一月一日の『湧玉の祝事の儀式』を終えた夜、今日の儀式につ

いて感謝の祈りを捧げていた時、次の光景を霊視した。

白い塔が見えて来た。その塔の頂きには鐘が付いている。この鐘が全世界に向かって鳴り響いて行った。すると全世界の鐘がこれに呼応するように、一斉に鳴り出したのである。

これらの鐘が鳴り終わると、右と左からそれぞれ円盤が現われた。その二つの円盤は中心点に来たところで天に向かってVの文字を描くようにして飛び去って行った。

続いて六方向から円盤が現われて、前と同じように中心の一点に集まった。それから、それぞれの円盤が、天に向かってVの文字を立体的に描いて飛んで行ったのであった。

この光景を霊視した時、次のように思った。

「この鐘は、現象界の変化の始まり（最終段階の訪れ、終わる時が来たこと）を人々に知らせるためのものである。」

この時、次の靈感を受けた。

『この鐘はワンダラーが鳴らすのです。』

この霊視と靈感には次のような意味が秘められているのである。

「いよいよ古い地球の『終わる時』が来たのである。これからの地球での働きは、数人や数十人のワンダラーで出来るものではない。世界中のワンダラー全員が立ち上がって、全力をつくして始めて出来ることなのである。」

昨年（昭和五五年）の一〇月二五日、このことにかんして、天より次のテレパシーを受けている。

『全世界のワンダラーが立ち上がりました。手をつないで真の道を進みましょう。』

このように全世界のワンダラーは立ち上がられたのである。ワンダラーは古い地球の『終わる時』に、全力をつくして使命を果たすのである。その時が今ここに来たのである。

この霊視で象徴的にいわれている「白い塔」とは「ひめゆりの塔」のことを指し、明るく変わった湧玉の地（新しい地球、神の国鏝球王国の天の神様の永遠に降り給う地）を意味している。

この最初の鐘を鳴らす役のワンダラーは、この湧玉の地においてこの鐘を鳴らすのである。鐘を鳴らすという意味は次のとおりである。

・全世界のワンダラー全員が、天の神様に、古い地球の『終わり』の大御業を行って下さるように『お願い』する。

・全世界のワンダラー全員が、天の神様に、古い地球の『終わる時』に身命を賭して使命を果たすことを『宣言』する。

天の神様の永遠に降りたもう地、『湧玉の地』で鳴らす鐘の響き（儀式）は、全世界に向かって行き、全世界を包むのである。そして、この響きに全世界のワンダラーは呼応して、

その鐘（『お願い』と『宣言』）を鳴り響かせるのである。

それは、世界中のワンダラーが、古い地球の“終わる時”、それぞれの場で、それぞれの働きで、それぞれが戦って、ワンダラーの使命を立派に良く果たすことを誓うことを意味しているのである。

この霊視、靈感で天が語られていることは、ワンダラーがこの『お願い』と『宣言』（古い地球の“終わり”の儀式）を天の神様に申し上げることにより成る（鳴る）のであると判った。

また、あるワンダラーには、続いて九州の幣立神宮へ行かねばならないという思いが靈感と共に湧き上がって来たのであった。

宇宙と結ばれている天孫降臨の地、金星の高天原の神々様の降り給う地（地の高天原）である九州の幣立神宮にて、ワンダラーのこれからの沢山の“終わり”の働き（“湧玉の地”で宣言したこと）が正しく立派に出来ますように、宇宙の神々様、宇宙の方々にお守りとお導きを『お願い』する。

そして、世界中のワンダラー全員が、古い地球の“終わる時”の使命を完全に立派に果たし終えて…………、

「全人類、全動物、一切のすべてのものが、元の地（鏝球王国の地）へ帰ることが出来るように…………。」

「他の遊星から来られた方々、全世界のワンダラー全員が、故郷の遊星に無事に帰ることが出来るように…………。」

この『お願い』（昇華の儀式）に行かねばならないと判ったのである。

このような意味の靈感を数人のワンダラーの方々が受けられたのであった。

一月二三日、午前八時五〇分、あるワンダラーは次の霊視とテレパシーを受けた。

“白馬（神馬）が走って来た。その白馬は「鍵」を口にくわえている。”

この光景を霊視した時、次のテレパシーを受けた。

『輝ける子達、これ（鍵）を持っておいきなさい。』

“輝ける子達”とは、「湧玉の地」と「地の高天原」へ行くワンダラー達のことである。

（神様から見ればワンダラー全員が『輝ける子達』である。）

「鍵」とは古い地球の“終わり”の扉を開く鍵であり、全世界のワンダラーが使命を果たす“宣言”の鐘を鳴らす鍵である。また宇宙への扉（昇華）を開く鍵である。この「鍵」を持って、「湧玉の地」、「地の高天原」へ『おいきなさい』と言われたのである。

一月二五日、前述した二つの儀式についての靈感、霊視を受けられたワンダラーの方々によって、この二つの儀式の次第が次のとおりに決定された。

二月一日、湧玉の地にて、

『古い地球の「終わり」の儀式』

二月二日、地の高天原（幣立神宮）にて、

『昇華の儀式』

田 天の神様のお命じになられた「儀式」は、『湧玉の祝事の儀式』をもって全て終了した。それ以降に行われるこの二つの「儀式」は、ワンダラーが行う『お願い』と『宣言』の儀式であり、天の神様のなさる儀式とは、根本的に性質の異なるものである。ただ、適切な呼称が見当たらないので、これまでと同様、「儀式」と呼んでいるのである。

この日（一月二五日）、滋賀県のK氏、次のテレパシーを天より受けた。

『〇〇さんのお役は終わりました。』

二月七日、未明、Mさんの霊夢。

葬式が行われている。だれの葬式かは判らない。ところが、不思議なことに参列者の中で、

喪服を着用している人はだれ一人としていないのである。全員が喜びを表わす美しい衣装を身にまとっていたのであった。

田 これは、来る二月一日、一二日に行われる二つの儀式を意味しているのである。

二月一日、沖縄の湧玉の地にて、次の儀式が行われた。ワンダラー全員を代表して、五名の方が現地に肉体で参加された。

『古い地球の「終わり」の儀式』

祈り。

天の神様ありがとうございます。

サナダ様、カミラ様、神々様ありがとうございます。

ワンダラー全員が、ここ湧玉の地に集いまして、天の神様をお願い申し上げます。

天の神様の大愛により、

去る一月一日、近江神宮におきまして、『湧玉の祝事の儀式』が行われました。

ここに、惑星地球と、全人類、全動物、一切のすべてのものは救われました。新しい地球となりました。

よって、古い地球は「終わりの時」を迎えることが出来ましたことを深く感謝申し上げます。

『天の神様、古い地球の「終わり」を行って下さいますようお願い申し上げます。』

『古い地球の「終わる時」、私達ワンダラーが、全世界のワンダラーが、身命を賭して「使命」を良く果たしますことを、ここに誓い、宣言致します。』

世界中のワンダラー全員が、「終わる時」の使命を、正しく立派に果たすことが出来ますようにお守りとお導き下さいますようお願い申し上げます。

サナンダ様、カミラ様、神々様ありがとうございました。

天の神様ありがとうございました。

二月二日、九州、幣立神宮にて、次の儀式が行われた。ワンダラー全員を代表して、五名の方が現地に肉体で参加された。

『昇華の儀式』

祈り。

天の神様ありがとうございます。

天照大御神様、天孫の神々様、高天原の神々様、宇宙の神々様、宇宙の方々ありがとうございます。

ワンダラー全員が、ここ地の高天原に集いまして、天の神様を始め、全宇宙の神々様をお願い申し上げます。

去る一月一日、近江神宮にて『湧玉の祝事の儀式』が行われました。

昨二月一日、天の神様の降り給う地、明るく変わった湧玉の地にて、『古い地球の「終わり」の儀式』が行われました。この儀式において、全世界のワンダラー全員が「終わる時」の使命を良く果たしますと天の神様に「宣言」致しました。

『全世界のワンダラー全員が「終わる時」の使命が正しく立派に果たせますように、お守りとお導き下さいますようにお願い申し上げます。』

『全世界のワンダラー全員が終わる時の「使命」を正しく立派に果たし終えまして、「全人類、全動物、一切のすべてのものが、元の地、鏝球王国の地に帰ることが出来ますように」、「他の遊星から来られた方々が故郷の遊星に帰れますように、全世界のワンダラー全員が宇宙惑星の故郷に帰り、天の神様の御前で、報告出来ますように」お守りとお導き下さいますよう、お願い申し上げます。』

天照大御神様、天孫の神々様、高天原の神々様、宇宙の神々様、宇宙の方々ありがとうございます。

天の神様ありがとうございました。

二月十五日、午前五時頃、Mさんの霊視。

多くの神々様が天から降りて来られた。神々様は大変なお喜びの様子である。明るく賑やかに神々様はお喜びを語り合っておられるのである。この光景は暫く続いたが、やがて神々様は、スーッと消え去られた。

そのあと、続いて、宇宙の方の声が聞こえてきた。宇宙の方は、次のように語られたのである。

『さあ、皆さん、それぞれに、目標に向かって進んで下さい。』

同日（二月十五日）、あるワンダラーの体験。

昼頃より、胸の動悸がどんどん早くなり始め、「なにごとかが起こる。」という緊張感が強く迫ってくる。

午後五時三〇分頃、雲におおわれた天空に、透明な線で出来た十字架を見た。そのとき、「天の神様の大御業は始まった」と直感した。

それと同時に、周りのビル街がすべて実体のない影のように見え出して、

「すべては無であり、空である。」と感ずる。そして、

「すべての地球の人々が、このこと（すべては無であり、空であるということ）を知ったとき、もとの地に還る。」と思った。

## 第二章 あなた（全世界のワンダラー）の使命は開始された！

ワンダラーはこれからの働きを、どのように進めて行ったら良いのだろうか？その答は、実は、もうすでに一九六〇年に用意されていたのである。次に掲げるのは、当時、『天の神様』から頂いた御言葉である。この本を読まれるワンダラーの方々は、この御言葉を真の靈感でじっくりと味わって、これからの自らの働きの指針として頂きたい。（「オйкаイワタチ」第一巻（本書）158頁）

### 天の神様の御言葉

私の願いは、悪い者もカルマが解けて私の愛を受けてくれることです。  
過去のカルマは、終わる時、皆の目の前に現われます。良く周りの方々を愛  
で包んで助けて下さい。

地球はここに「新しい地球」となり、「レタマヤの世」となったのである。したがって、古い地球は「終わる時」を迎えたのである。

この時には、ピラミッドはもはや死の鑄型ではなくなり（第一巻218頁）、ピラミッドは開かれる。太陽は新しい太陽に変わる。地球の波動は新しい波動へと変わるのである。

すべてのものの過去のカルマはこれから物凄い音をたてて消え去って行く。（第一巻84頁、第四巻249頁、第五巻329頁参照）

このような変化の時にあたり、世界中のワンダラーに対して、『良く周りの方々を愛で包んで助けて下さい。』と『天の神様』は語られているのである。

いよいよ、全世界のワンダラー全員が働く本番の時が来た。

天の神様を始め、天の神々様、地の神々様、宇宙人の方々に守られ導かれて、地のワンダラー全員が全力をつくして使命を果たす時がここに来たのである。

『全世界のワンダラーが立ち上がられました。手をつないで真の道を進みましょう。』と昨年（昭和五五年）一〇月二五日、天よりテレパシーを受けている。立ち上がられた全世界のワンダラーが、いよいよ活躍される時が来たのである。

このワンダラーの使命を果たして行く決意を、『湧玉の祝事の儀式』に参加した名古屋の

Y氏は、次のように書き送ってこられたので紹介する。

拝啓

本日（一月一日）は、尊い、重大な儀式に参加させて頂けまして、本当にありがとうございます。ありがとうございました。

私は、少し以前より、今日の儀式の深い意味について、ずっと考えておりました。今日の儀式は、これまでのワンダラーの働きのしめくくりの儀式であると同時に、これからのワンダラーの働きのしめくくりの儀式であると思えてならなかったのです。しかし、これまでのワンダラーの働きのしめくくりとしての意味は良く判りましたが、これからのワンダラーの働きのしめくくりの意味は、いくら考えてもはっきりとは判りませんでした。そこで、なんとか全体を判って儀式に臨まなければと考え、心がイライラとして来た時、次の靈感を受けました。

「構えず、素のママの、自然な心で儀式に臨むことである。」

そして、続いて次のような思いが湧き上がって来ました。

「これからの働きの意味にかんしては、儀式が終わってからはっきり判って来るであろう。」

そして儀式が終わり、帰宅したあと、やはり心のうちから靈感と共にいろいろな思いが湧き上がって来て、自分なりにはっきりつかめた気が致しましたので、次に、私が理解しました範囲のことを報告させて頂きます。

本日の儀式（『湧玉の祝事の儀式』）は……、

一九六〇年当時より始まった『湧玉の戦い』（地球の根のカルマを解く戦い）のしめくくりの儀式であったと同時に……、今回の地球の場で働く全てのワンダラーに、これからの新しい使命が授けられた儀式でもあった。

したがって、ワンダラー全員が、天の神様の御前で、それぞれに、これからの新しい使命を頂いたのだと思います。

全世界のワンダラーひとりひとりが、天の神様より、それぞれの場で働く新しい使命をそれぞれ頂く儀式であった。（それぞれのワンダラーの真の魂は、天の神様の御前で、ワンダラーの誓いを述べ、新しい使命を頂いた。）

ここで頂いた使命は、具体的な姿（現象面での姿）では、それぞれの人によって違いはあろう。（働きの場はそれぞれ異なるので）

しかし、全員の使命の根幹はただひとつ、すなわち、天の神様の本当の御心を、全ての人に伝え、判って頂くことである。

本日の儀式において、新たな決意を述べ、新たな使命を頂くことは、ワンダラーひとりひ

とりについて行われた。

天の神様は、本日の儀式で、それぞれのワンダラーの場を細かく見て、ひとりひとりのワンダラーの真の魂に、それぞれの場に最もふさわしい使命を与えられた。

この使命は、それぞれのワンダラーが、自分の持てる全力をつくして初めて出来る使命である。(中途半端な、安易な気持ちで出来る使命ではない。なぜなら、これは、ワンダラーの真の魂の誓いだからである。)

本日の儀式でそれぞれの真の魂が天の神様から頂いた使命に意識の心が気付くには、それぞれに早い遅いはある。(靈感で気付く。気付き方は、一度に気付く人も序々に気付く人もあるが、他からのライマカタでなく、自らの心に湧く靈感で気付く。)

④ 世界中のワンダラーの多くの方々は、すでに気付いたり、気付き始めておられるはずである。また、勇ましく活躍を開始されている方々も多い。この方々は、率先して自らの働きを始めてゆかねばならないし、まだ気付いていないワンダラーをさがして、その方々が気付く手助けをする役があるのである。

いずれにしても、真の靈感で判った自分の使命は、自分のワンダラーとしての真の魂が心から望んだものである。というのは、真の魂が心から望まない使命を授けるというライマカタを、天の神様がなさる筈がないからである。

したがって、心、意識、肉体は、この使命を正しく理解して果たしてゆかねばならない。

本日の儀式は……

一九六三年に「無の世界」の根のカルマが解かれたことに続く大きな儀式であり、ピリオドでありました。

というのは、「無の世界」の根のカルマが解かれたことによりオイカイワタチの働きが開始されたのと同じく、本日の儀式が出来たことにより、(古い地球の終わりの時となり)世界中のワンダラーの働きが開始されることになったからであります。

この大きな儀式に参加させて頂きましたことに、限らない感謝を捧げる次第です。

また、儀式の際、Y宮司さんが神殿の御扉を開いて下さいました。私は、神道のことはいく知りませんが、あのようなことは、普通では絶対により得ないことであると思います。それで、このことにかんして、私は次のように感じました。

「本日の儀式によって、世界中の全ワンダラーの使命を果たす扉が開けた。」

思いましたこと、感じましたことは以上のとおりです。心から素のままに湧き上がるまま書きとどめご報告致します。宜しくご検討下されば幸いです。

敬具

一月一日

Y・K

W様

また、あるワンダラーの方からは、次のような手紙が送られて来た。  
 拝啓

私は、去る一月一日の『湧玉の祝事の儀式』以降、自分に、この「終わる時」における使命が与えられたことを強く感じ、いつか、この使命を果たしてゆくことを、天と地に宣言する必要があると感じておりました。

「オйкаイワタチの使命」は終わったとは申せ、「終わる時」に全世界のワンダラーそれぞれに与えられたこの使命は、各々のワンダラーが自分の持てる全力をつくしてはじめてできるものであり、決して軽く見えてはならないこと、そして、この使命を果たしてゆくには、その決意を表明する「宣言」を行わねばならないこと、この宣言（区切り）を行うことなしに、今迄と同じような気持でズルズルと進んでゆくならば、これから、現象的には大混乱を呈するであろう「終わりの時」にあたって、自分に与えられた使命を充分に果たしてゆくことはとてもできないであろうということ、そのようなことを感じ、この宣言（決意の表明）をなすことがぜひとも必要ということに思い至ったのです。そこで、二月一日夕刻、次の通り宣言致しました。

### 宣 言

私は、この古い地球の「終わる時」にあたり、天の神様より命を受けたワンダラーとして、私に与えられました使命を、天の神様の御心のとおりに果たし、終え、故郷の遊星に帰り、天の神様の御前に戻りますことを、ここに宣言致します。

私は、これと同じような意味の宣言を、一月一日以降、多くのワンダラーの方々が、形に表わす表わさないは別として、心中に決意し、表明されておられるような気がしてなりません。（但また、この第五巻を縁として、決意を「宣言」されたワンダラーも多くあることであろう。）

一月三〇日より最近まで、度々次の靈感を受けました。

『天に沿うこと。』

そして、「第一巻」（本書）にあるAZ様の次の御言葉が心に浮かんでくるのです。（138頁）

『我を信じて、理解し難きことをも、神を念じて、カルマを果たすを最後の目的としなさい。』

私は、自分の意識をふり返ってみて、天の御業の中で、自分の理解し難いことをないがしろにし、軽く見、さらにはそれを蹴ってしまうこと、これがまずルシファアのカルマを身に

つける最初の点だと判りました。そしてまた、これは、同時に、地で働く役のワンダラーが最もおち入り易いカルマであることを知りました。

天は、まことに、我々のスケールをはるかに、はるかに越えて偉大であります。その天を、まず完全に信じ切ること。これなくしては、ワンダラーの役は、とても果たしてゆけるものではないことを知るに至りました。

以上は、今迄の歩みの中から得た教訓ですが、これは、これからの、“終わる時”のワンダラーの歩みに対しても、決して忘れてはならないことであると思います。またその意味で、全世界のワンダラー全員の使命が始まる時にあたって、

『天に沿うこと。』

とあらためて靈感を送って下さったものと感じました。

これから先、どのように事態が展開するかは判りませんが、ワンダラー人それぞれに、当人にとっては中々理解し難いことも出てくるかと思えます。しかしその時も、それが、はるかに大きなスケールの中での天の大御業の一環であることを信じて、天の神様を信じ切り、まかせ切って、天の歩みに沿って地での働き（それぞれの役）を進めてゆくことが最も重要であると思えます。

二月一日

敬具

W様

一月三十一日、あるワンダラーは、ワンダラー達が、これからの沢山の使命を果たして行くにあたっての天からの学びを、次のようにテレパシーで受けた。

『頼るところは、天の神様だけです。』

『かまえて、たかるカルマに近よらぬよう。』

このテレパシーと同じ意味のことは、これまでも度々天より教えられていたが、ここに全世界のワンダラー全員が果たす大切な使命が開始された時に合せて、天は再び語られたのである。

次も、あるワンダラーの方からの報告である。（以下手紙のままを記す。）

二月二十五日、この日、私は、これまで、地球と人類が、何度も大変動（世の終わり）をくり返しながら、「正しい世の終わり」を迎えることができず、たかるカルマと、オリオン、ルシファアの力によって苦しみ続けてきたこと……、しかし、今回は、『湧玉の祝事の儀式』がなされたことによって、根のカルマは全てとけ、オリオン、ルシファアの力は完全に断たれて（宙オリオン、ルシファアの力は断たれたといっても、自我のあるところには、いつで

も、どこでもサタンがいることを忘れてはならない。)、地球と人類、全てのものは、これまでの長い苦しみからようやく救われることになったことを考えておりますと……、

宇宙の方より次のテレパシーを受けました。

『友よ、あなたがたは、悪夢から醒めたのです。』

新しい目覚め、新しい生活が始まったのです。

それは、永遠の進化への道であり、

あなたがたは、その道を永遠に歩き続けられるでしょう。

その道は、天の神様の御心のままのものです。

思いを正しく天の神様に向けて、

しっかりとその道を行んでいって下さい。』

これを受けた時に、このテレパシーは、ワンダラーだけではなく、全ての地球の人々に送られたメッセージであると感じました。

二月三〇日、早朝、これからのワンダラーの使命にかんして、中々意味深いと思われる次のような夢を見ましたのであわせて報告します。

——ある所で、子供たちの、ヴァイオリンのコンテストが開かれていた。参加する子供たちの全員が、順々にひとつの課題曲を弾いてゆく。子供たちは、皆一生懸命であるが、その

演奏は、同じ曲でありながら、それを弾く子供たちによってそれぞれの響きを生じ、変化に富んだものであった。中には、ヴァイオリンまで自分で、自分に合った独特のものを作って持参し、それを弾く子供もいた。ある肢体の不自由な子は、自分の肢体の不自由さをうまくカバーするようなヴァイオリンを自作して、それで立派に課題曲を弾きこなしていた。

審査員も、べつにそれぞれの子供に優劣をつけるといったところはなく、それぞれの子供が、自分なりの響きで、課題曲を一生懸命に弾いてゆくのを見守っているという風であった。夢は以上のとおりです。これから感じましたことは……

・ “子供たち”とは、これから使命を果たしてゆくワンダラー全員をさす。

・ “課題曲”とは、これからのワンダラーの使命の根幹(大目的)を、また、その根幹(大目的)は全員がワンダラーにとってひとつであり、同じであることを意味する。

・ 同じ課題曲がそれぞれの子供によって、ちがった響きで弾かれたということは……ワンダラーのそれぞれによって、具体的な働き方、働き方、目標は違ってくるということを意味する。

・ 自分に合ったヴァイオリンを自作するということは……それぞれのワンダラーが、自分に与えられた場(条件)をうまく生かして、自分で独特の工夫をして、それぞれの使命を果たしてゆくことを意味する。

・肢体の不自由な子とは……なんらかの意味で（現象的に）ハンディ……ップを背負ったように思えるワンダラーでも、工夫と努力次第で自分に与えられた場（条件）を立派に生かして使命を果たしてゆくことができる。

・審査員は、天の神様、神々様、宇宙の方々であると感じた。これらの方々は、常にワンダラーのそれぞれの働きをじっと見守っておられると思った。

また最後に、Y氏より、ワンダラーのこれからの働きについて受けた靈感をまとめたものが、昨年（一九八〇年）末に送られて来ているので、これを紹介しておく。

・これからの地球のことはワンダラー全員（世界中のワンダラー）が全力をつくして、はじめて出来ることである。

・ワンダラーは、それぞれの場で全力をつくす。即ち、それぞれの場において、新しい地球の意識を見つけて出してゆくのである。

註 「ワンダラーはそれぞれの働きで、それぞれの戦いをするのです。」

昭和五年七月二六日にMさんが受けたテレパシー。

・この働きには、主役も脇役もない。全てのワンダラーが主役である。そのワンダラーしかな出来ない場である。自分の場で果たすべき役を、人にかわってもらおうわけにはいかない。

・ワンダラーは、ひとりひとりが、すばらしい力を持っています。ただし、この力は、今までの地球でいわれている力ではなく、天の神様の御心が判る“ということなのです。ここから出てくる力と自信は、今までの地球上のどんな力にも勝るものなのです。

・どんなに小さく思える役目でも、それは、まことに素晴らしい役です。自信をもってゆきましよう。それは、ワンダラー全体にとって不可欠の役目です。

・自分と自分の役目（自分に与えられた役）を決して卑下しないこと。それは、あなたしか出来ない役目なのです。その役を十分に、完全に果たすこと。

・自分と、自分に与えられた役目を卑下することは、それを自慢することと同じく我の心のなせるワザです。本当に天の神様の手足となる心からは、そのような思いは生まれません。

・ワンダラー全体はひとつです。ひとつとなつて、天の神様から与えられた役目を果たすのです。役目を完全に果たして故郷の遊星に帰れるように祈りましよう。それは、大事なことです。

・ひとり、天の神様のみが、すべてを御存知です。つねに天の神様と結ばれているように祈りましよう。がんばって下さい。あとわずかです。

・『ワンダラーの目覚めは人類の目覚めです。』ワンダラーの思いは地球の思いです。つねに、天の神様に思いを正しく向けるようにしましよう。天の神様をはなれては、ワンダラ

ーの役は果たせません。

・天の神様のすばらしさを、ワンダラーは良く知っています。そのすばらしさを、すべての地球の方々が判るまで頑張りましょう。――

再びいう、

古い地球の“終わる時”が来た。天は、全世界のワンダラーに、次のように語られている。宇宙の方は……、

『さあ、皆さん、それぞれに、目標に向かって進んで下さい。』

天の神様は……、

私の願いは、悪い者もカルマが解けて、私の愛を受けてくれることです。  
過去のカルマは、終わる時、皆の目の前に現われます。良く周りの方々を愛  
で包んで助けて下さい。

今、ここに、

あなたの使命は開始された!!

完

## あとがき

一九六〇年に、宇宙の偉大な方々から教えられた、『湧玉の儀式』、『祝事の儀式』は、一九八一年一月一日の近江神宮における『湧玉の祝事の儀式』をもって終了した。即ち、天の神様の命じられた全ての儀式は終了したのである。地球は、明る湧玉、明る地球となり、ここに、『その時』は来た、『約束の時』は来た。

古い地球の『終わりの時』、即ち、全世界のワンダラー全員が真に目覚めてその使命を果たしてゆく本番のときが、ついに来たのである。

書籍「オйкаイワタチ」全五巻の使命は、全世界のワンダラーにこの『真』を伝え、真の目覚めの手助けをするところにある。

あとは、全て、真に目覚めた全世界のワンダラー全員の双肩にある。惑星地球での、今回の聖戦は、ついに最終段階に突入したのである。

この戦いは、ワンダラーは、力で戦うのではない。『真』で戦うのである。明る湧玉とな

った地球の新しい気（波動）を頂いて、天の神様の素晴らしさ、天の神様の『愛』と『真』を世界中の方々に伝え、古い世の『終わり』に迷う人々を救うのである。

決して負ける戦いではない。新しい地球は、すでに厳然として出来上がっているのである。そして、あなたの傍では、宇宙人の方々が、神々様が、天の神様が、テレパシーと靈感で語りかけておられるのである。

今、ここに、

**あなたの使命は開始された!!**

再びこのことを大書して、あとがきとしたい。

この最終巻である第五巻（完下）の発刊にかんしても、これまでと同様、山本耕一氏と印刷の加納御夫妻を始めとする多くの方々の暖かい御協力を頂いた。ここに、これらの方々、および読者の皆様に、深い感謝を申し上げる次第である。

一九八一年三月三日

編 著 者

冊読後、本書に強い関心がありましたら、あなたの知人で同じ志を持つ方々をご紹介します。頂きたいと思えます。私は、この方々は、地球と人類に、奉仕の使命を持って生まれた方々と信じます。私はこの方々に本書を読んで頂きたいと希っております。あなたの親切なご協力をお願い申し上げます。

## 附 講演記録

“終末の期ときを迎えて”  
“ワンダラあなたの使命は開始された！”

## ま え が き

この小冊子は、昭和五五年二月二四日に大阪市教員会館で、五月一日に東京芝公園内の(財)三康文化ホールで、五月二五日に札幌市中央区共済会館において行われた「オイカイワタチ大講演会」(講演要旨「万たるワンダラーの使命」)の講演記録を纏めたものである。この小冊子は、これらの講演会に参加された方々や、なんらかの都合で参加できなかった方々から寄せられた講演内容を発表して欲しいという要望にお答えしたものであり、「万たる数のワンダラー」の方々に、真の目覚めの助けとしてぜひ読んでもらいたいと強く願っている。

さらに、この小冊子の発刊には次のような大切な意味が含まれている。

- 書籍「オイカイワタチ」全四巻の奥に流れている「真」を理解する助けとなるものである。
- 奉仕者(ワンダラー)としての使命を持ちながら、それにまだ気付いていない多くの方々に、「真の目覚め」と「使命の自覚」のための助けをするものである。
- 万たる数のワンダラーの方々に聖火を点火する役を果たすものである。
- これを読まれた万たるワンダラーの方々は、終末の期をここに迎えて、あなたの使命が

開始されたことに気付くであろう！

この小冊子を、「オイカイワタチ」全四巻と共に、奥に流れている「真」の判るまで繰り返してお読み下さることを切望してやまない。

### 追記

講演会が開かれた昭和五五年当時は「オイカイワタチ」は第一巻から第四巻の全四冊であったが、昭和五六年に第五巻が発刊されて全巻五冊となっている。

## 目次

この講演会は一年半前より天で決められていた……………	289
「生命」は永遠の進化への道を歩む……………	297
地球はなぜ墮落した遊星となったか……………	298
宇宙の奉仕者（ワンダラー・リング）……………	301
円盤・宇宙人来訪の真相……………	303
宇宙人は地球の将来をなんと見ているか……………	306
当らなくなったノストラダムスの予言……………	308
神様の聖戦（儀式）にワンダラーが参加するという事……………	311
聖戦の歩み（オイカイワタチの歩み）……………	318
万たるワンダラー誕生……………	325
現象界の世の終わりの大変化……………	329
新しい地球、新しい世の建設……………	340
救われるということについて……………	365

最後の最後まで、のんきを大切に……………	360
地球が高く変わるといふことは宇宙の進化でもある……………	362
書籍「オイカイワタチ」の使命……………	363
終わりにのぞみ……………	365
後記……………	366

## この講演会は一年半前より天で決められていた

只今ご紹介を頂きました渡邊大起でございます。まず始めにおことわりしておかねばなりません。私は宗教家ではありません。また、先生や先達でもありません。ささやかな企業を営んでなりわいを立てながら、天から与えられた私の使命を一生懸命に果たすに専心しておる者です。また、「オイカイワタチ出版会」というのは出版社ではありません。私の勤務先のデスクを借りてそのように名付け、奉仕活動の拠点としております。私達の奉仕活動には組織はありません。『組織はカルマを作ります。』と天から教えられています。（愛による心の団結は必要です。）また、『ワンダラーには師はないのです。頼るところを、天の神様』に置きなさい。』と私達は教えられて今日に至っております。これらのことは「オイカイワタチ」全四巻に詳しく書かれておりますのでご承知のことと思います。

さて、今日の講演では、「オイカイワタチ」全四巻を一応お読み頂いた方々を対象としてお話を申し上げたいと思います。しかし、始めての方々にも良くお判り頂けると思っています。今より一年半くらい前、私は、天より、度々次のような靈感を受けておりました。

『“ある時”が来ると、多くの人達（万たるワンダラー）に真を語って（聖火を点火して）

歩きます。』

また仲間の一人は、私（渡邊）が多くの方々を前にして講演しているさまを度々靈夢で見せられていたのです。しかし組織を持たない私達には、真を語るこの講演会がどのようなようにして仕組まれ、開かれるのか全く見当もつかず、天におまかせするより他に方法はなかったたのであります。

ところが、この「ある時」が来たのです。「ある時」とは、「形の世界」の終末の期ときを迎えたそのことを言うのです。昨年（一九七九年）一二月に地のワンダラーによって『現象の世界の世の終わりの儀式』が行われたことにより、ここに終末の期ときを迎えるに至ったのであります。

一方、時を同じくして昨年一二月頃から東京、大阪において「オйкаイワタチ」の講演会を計画して下さる方々が現われて来られました。そして、一九八〇年の幕開けと共にこの計画は各地で実現化して来たのです。

それに加えて、私の講演会を促進させる助けがアメリカからもたらされて来たのです。その助けというのは次の通りです。

日本P S学会会長、S工学博士は、昨年（一九七九年）の四月にアメリカに行かれました。この時、S博士は、コロラド州のデンバー市に住む宇宙人とのコンタクトマンである、E・T

・Wと親しく会われて、『金星のこと』などを聞かれました。またさらに、彼（Eさん）と宇宙人とのコンタクトにかんする文献を頂かれ、帰国後翻訳してP S学会の機関誌に発表されておられたのです。ところが昨年一二月中頃、そのEさんからS博士に手紙が送られて来ました。その内容は、『日本の渡邊大起という人が編著した「オйкаイワタチ」（全四巻）という本をぜひ読んで下さい。私達のいままで言ってきたこと、行ってきたことがよくわかります。』というものだったのです。

このようないきさつからS博士は「オйкаイワタチ」をお読みになり、私は、一九八〇年一月一日付で次のような大変丁寧なお手紙を頂きました。

『「オйкаイワタチ」全四巻ならびに貴方の御手紙、暮の三十日、有難く拝受致しました。二、三日かかって大要を拝見しました処、大変にすばらしい内容でして、しかも重大な意味をもつものと感激しました。……』とあり、さらに来る五月一日、東京にて私（渡邊）の大講演会を予定したので了解してほしいという内容でありました。

このような経過から（昭和五五年）五月一日、「オйкаイワタチ大講演会」が東京で行われることに決定しております。また来る三月一六日にはやはり東京にて別のグループの方々のお世話による私の講演会も決定されており、さらに北海道札幌（五月二五日）、および各地においても計画が進められております。

このように、一年半くらい前より天より示されていたことが、一九八〇年の幕開けと共に実現して来たことを考えますと、すべてが神様の御業と申しますか、宇宙の方々による地球救済計画の一環であるとしか考えられない不思議さであります。

このような意味を持ちます私の講演会の第一声を、本日、ここ大阪において開催して下さいましたこと、誠にありがとうございました。また、各種のグループ（各宗教団体、教化団体、研究団体、及び霊覚者、霊能者の方々）の指導者でおられます方々のお世話と大変なご努力により、この講演会のためにかくも多数の「万たるワンダラーの方々」がお集まり頂きましたことに心から厚くお礼申し上げます。

さて、話を戻しまして、先程申しましたアメリカのEさんとは、私は文通したことも、会ったこともありませんでした。S博士の御縁で私は彼のことを知ったのです。そこで、一月末に、「オイカイワタチ」の全巻四冊をEさんに送りました。

この時、私は、宇宙との正しいコンタクトをする者がこの地球の東（日本）と西（米国）で結ばれて、ここに「形の世界」においての活動が始まるのであると直感したのです。

すると、折り返し、去る二月中旬、Eさんより本のお礼と次のような手紙が来ました。その主なところを読んでみます……。

『私は一五年前より日本の東京で（宇宙の真を）<sup>まこと</sup>教えていました。しかし、仲間が次々

とゴースト（悪霊、サタン）にやられて行くので私は悩んでいましたが、天より世界中を廻りながら、特にアメリカで（宇宙の真を）教えるようにと知らされ、八年前よりロッキーマンのふもとのデンバー市を基点として、ハワイ、ロサンゼルスなどを廻り、「塩漬けのリング」を探しながら、真の目覚めの手助けをしています。

アメリカのコンタクトマン達（宇宙人との）と連絡を取りながら毎日走り廻っている現状です。

最近では日本からや台湾からも次々と泊りがけで来て頂くので特に多忙です。

一日も早く、（万たる）ワンダラーが真に目覚めて地上天国を作りたいと思っています。

長い間のそちらのグループの方々の使命を心から尊敬致します。

こちらはまだ少ないですが、（万たる）ワンダラーが次々と立ち上がっています。頑張りますよ。

日本には沢山の私の生徒がおりますので、縁のある人々よりご指導下されれば幸いです。皆さん方によろしく、ありがとうございました。』

この彼の手紙を読みまして、彼の今までの歩みと現在の働きが私達に天から与えられている目的と同じであることを知り、私は大変うれしく思いました。そして心強く思った次第です。

私達の場合でもこの二〇余年の長い戦いの中で、仲間達が次々とサタンに倒されて使命が果たせなくなってしまうことは、「オイカイワタチ」の各所に書かれている通りです。彼も私達も同じような厳しく激しい戦いを行なって今日に至ったことを知ることが出来ます。

彼（Eさん）の手紙の中にあった『塩漬けのリンゴ』については、「オイカイワタチ」本書五八頁で、宇宙人が次のように語っております。

『、塩漬けしておいたリンゴのところへ我らは行く。』

今はこの奇妙な言葉の意味は判らないでしょうが、やがて判る日が来ます。これは、私達（宇宙人）の古い予言にある言葉です。』

そして今は、この奇妙な言葉の意味が、アメリカのEさんにも、また日本の私達にもよく判ったのです。

つまり、一年半前から天が私に命じておられたこのような講演会の目的は、『塩漬けにしてあったリンゴ』、即ち『万たるワンダラー』を探して、『真』を語り、ワンダラーの目覚めの手助けをするためであったのです。

さらにEさんは、『一日も早く（万たる）ワンダラーが真に目覚めて地上天国を創りたいと思っています。』と語っています。

私はこれと全く同じ意味と同じ目的を持って皆さんの前に立っているのです。本日ここに

お集まりの皆さんは、ほとんど全部の方が『万たるワンダラー』であると思います。なぜならば、皆さんの中にはだれ一人として物欲、我欲を満足させるために来られた方はおられないと思うからです。全員の方が「オイカイワタチ」全四巻を読まれ、一応の理解のもとに来られた方々です。そして皆さんは、新しい世のために、多くの人達のために、人類のために役立ちたい、奉仕したいと心から念願しておられる方々の集まりだからであります。

私は、お集まりの『万たるワンダラー』の方々に、「新しい地球、新しい世（地上天国）」は、真の目覚めによって建設するのであるという『真』を語りに来たのであります。

さて、これから本題に入るわけですが、まず、話の前半は、書籍「オイカイワタチ」全四巻の概要を説明し、ここに現象の世界の終末の期を迎えるに至った経過を申し上げたいと思います。

全四巻には、オイカイワタチの使命を持ったワンダラー達の二十年余にわたる戦いの記録、魂の記録が、その歩みの年月の順に記述してあります。しかし、いくつものストーリーが入り組んで進展している部分もあり、さらにすべてがこの目に見えない地球の内奥の世界のこととありますので、判りにくい点も多いかと存じます。加えて私は宗教的な知識、用語を全く知らず、その上文筆家ではありませんので明解な表現ができません。

さらに、書籍「オイカイワタチ」は、真似の出来ない魂を語る『真』を靈感のままに語っ

ておりますので、行間の奥に流れている「真」を靈感とテレパシーで汲みとって頂かねばならないという難かしさがあるのです。ですから、靈感で読んで下さる方には良く、「真」が判るでしょう。文字、ストーリーという表面だけを読まれた方には理解し難い所が多々あったことでしょう。

ですから、「真」の判るまで繰り返して読んで頂くしかないのですが、あるいは今日のよな講演会を通して、「オイカイワチ」の行間の奥に流れている「真」を（語る真の言葉を通して）、ある程度ご理解頂けるものと信じます。さらにこの講演会を機縁として、皆さんは必ず「真」の判るまで繰り返して読んで下さるものと信じます。

お話の後半は本日の主題であります。いよいよ地球における「世の終わり」と「新しい地球、新しい世の建設」が「形の世界」で始まりました。一九八〇年の幕開けと共に始まったのです。そして、この聖戦は、ここにお集まりの「万たるワンダラー」の手によって成されるのであります。その働きについては後半に申し上げます。

ではこれから本題に入りたいと思います。

## 「生命」は永遠の進化への道を歩む

神様から放たれたあらゆるもの（山川草木、動物、人類、一切のもの）の「生命」は、永遠の進化の道を進むのです。ある時には退化のように見える場を踏む時があっても（この世に、悪い者、悪い姿、悪い動物などの退化のように見えるものが造られるわけは、『真我に目覚めないものは、みなすでに、あそこまでも行くのです。』と教えられています（本書183頁参照））。それを学びの場（踏み台）として永遠の進化の道を歩みます。

ですから、神様から放たれた「生命」には、永遠の進化への場が与えられることになりま。そして、その場が大宇宙にある数限りない惑星であり、恒星なのです。さらに、これらの惑星や恒星自体も生命体であって、これらもまた永遠の進化の道を歩んでいるのです。

したがって大宇宙にはその「生命」の進化に応じた遊星があり、その「生命」はその場で学んでいるのであります。

さて、私達人間の場合には、生命の進化の過程で、永い永い宇宙年月を経て、人間の生命という進化の段階に至り、人間という魂が与えられ、人間としての永遠の進化の場、即ち魂を練る場が与えられます。つまり、魂の練り、即ち魂の輝き（霊的進化の段階）に応じた遊

星という学校に入學するのです。

私達の住むこの地球という学校は、その進化の学びの場の一つであります。大宇宙には地球より遙かに遙かに進化した遊星はいくらでもあります。また、地球より遅れている遊星もあるにはあるのです。

しかし、私達の太陽系では、この地球が一番遅れた、墮落した遊星なのです。他の遊星に仲間入り出来ない悲しみの、牢獄の遊星なのであります〔本書106・完106頁〕。

### 地球はなぜ墮落した遊星となったか

本来、天地の万物、宇宙の一切のものはすべて神様の顕現であります。宇宙は神様の国であり、神様ご自身であり、地上天国なのです。人は神の子で、この宇宙は、神様の靈感によって一切のことが素のままに語られ、行われ、自ずからなる秩序で正しく統べられている世界なのです。そこは、『愛、万物一体、調和、自然』の四大法則の宇宙であります〔本書108頁〕。

神様は中心に統べられ、「陽」と「陰」の両極を統括されているのです。

本来、人間が、のんきに一切を神様にゆだね、神様を信じて、神様の靈感のままであれば、心も物質もみな神様の愛と、うおいの顕現であり、そこはそのまま天国なのです。

神様は、永遠の創造と進化を続けるために、「陽の働き」と「陰の働き」の両極面において、それぞれ創造と進化の場、即ち形から見れば試練（魂を練る）と見える場を与えられます。

神様がその試練の場（陰の働き）を与えられる時には、同時にこれを解決する場（陽の働き）も必ず用意されているのです。したがって、「解決する場」を信じて待てば良いのです。ところが、それを忘れて待てないということが生じます。即ち、魂が若く荒々しい段階にある場合には、神様を本当に信じ切れない時があるのです。神様を本当に信じ切れないところから、「のんき」を失い、焦りと心のイラ立ちが生じます。そしてこの焦りと心のイラ立ちから神様の靈感を失い、自我が生じ、一切の不幸が生じ、悪いカルマが生じます。するとカルマはカルマを呼び、カルマがカルマを生み、その悪いカルマは悪い者をつくり、ついには愛を破壊するに至るのです〔本書104頁・完106頁〕。

このことについては、かつてレムリア大陸（ミューまたはムーともいい、今へ一九八〇年より一〇、五二八年前に沈没）におられ、そこから金星に移られたタンテス（レムリア大陸におられた当時の名前はエニト）という方が、私達に次のように語られたことがあります。

「レムリア大陸の沈没の原因はカルマです。初めは愛の満ち溢れた所でしたが、やがて諸々の愛を、悪い者が破壊したのです。いわば、地球の至らない私達のカルマに他ならないのです〔本書28頁〕。」

さて、永い永い宇宙年月の進化の流れの中で、地球という生命体である遊星自体は、一大進化をとげるべき大周期に入りました。つまり、地球という小中学校から、進化の法則により高等学校に進化する時が来たのです。ですからこの地球に住む人類も、小中学校の教室から高等学校の教室で学ぶべく進化せねばならない大周期にきているのです。

ところが、この地球と人類は進化の場で道を誤って悪いカルマに覆われ、さらにはオリオン、ルシファアの迷わしの靈感、迷わしのテレパシーを受けてより大きく道を誤り〔本書104～112頁〕物質文化の発達にのみ突き進むこととなりました。

人類は、今や心を、精神を、魂を忘れて物質のみに重きをおき、物質の重さにまさに押しつぶされんとしています。そしてついには魂の進化の学びの場である教室（地球）自体をも破壊し、人類自身をも破壊させんとする寸前にあるのがこの地球なのであります。これを、大周期の来た、世の終わりの来た遊星といえます。これを、たかるカルマに覆われた遊星（地球）というのであります〔完107頁〕。

### 宇宙の奉仕者（ワンダラー・リング）

このような、大周期の世の終わりを迎える遊星（地球）とそこに住む人類を始め、一切のすべてのものを救い、その遊星を神様の世界とする目的を持って、遊星から遊星へ、太陽系から太陽系へと移り歩き、そこで果たすべき役目を神様から授かっている宇宙人の集団があります。これがつまり宇宙の清掃人ワンダラー夫なのです。このように、神様から直接使命を頂いて遊星から遊星へ、宇宙から宇宙へと歩き続けますので、ワンダラー（さまよう人・放浪者）というのです。

一人のワンダラーがこの宇宙に誕生するということは、実に変なことであります。というのは、永い永い宇宙年月の進化の様々な過程を経て、魂を練り、高く輝く魂となって始めてワンダラーという位を神様から授かることが出来るからなのです。そしてこの位を授かったワンダラーは、神様の手足となって働くのです。ですから、神様が、「ワンダラーは天使です。」といわれる意味がここにあるのです〔本書90～102・147～153頁〕。

ワンダラーには、それぞれ使命によって色々の系統があります。「オイカイワタチ」本書には、「AからZまでのワンダラー」と書かれておりますが、アルファベット二六文字の数の系統があるという意味ではありません。沢山の系統があるということです。

ワンダラーにはいろいろの系統が沢山あり、系統により使命が異なっています。しかし、その遊星とそこに住む人類を救うという最終目的においてはどの系統も同じことです。そして、この全部のワンダラーの系統の頭、即ち総帥者の役名を、『A Z』というのです。現在のA Zは、金星の大長老である「サナンダ様」であります。

ワンダラーの系統

(1) 皇室のワンダラー（天皇陛下、明仁皇太子殿下、浩宮様、ほかの方々。）  
 (2) 天の役をする神様のワンダラー（「無の世界」の根のカルマを解かれ、地球が新生できる礎を創る役をなされたワンダラー。これが成されたことにより、次の「オイカイワタチの役」をするワンダラーの働きが出来ることになったのである。今回は、天の神様の『特別の手段』を頂いたのである〔本書1202・別冊(一)8・別冊(三)66～77頁〕。)

(3) 神様の聖戦（儀式）に参加して地球と人類のカルマを解く、「オイカイワタチの役」をするワンダラー。（これは日本のワンダラーの使命です。この聖戦（儀式）に参加した二十余年にわたる魂の記録が「オイカイワタチ」全四巻に述べられています。今日の講演の前半のテーマは、この大要を申し上げることにあるのです。）

(4) 「オイカイワタチの役」をするワンダラーによって、目に見えない内奥の世界に創られた、新しい地球、神の国鏝球王国の不滅の土台の上に「形の世界」を建設完成させる役のワ

ンダラー。（これが新しく誕生された万たる数のワンダラーのことであり、これは、皆さんのことでもあります。「オイカイワタチの使命」が終われば、この聖火は、「形の世界」を建設する「万たるワンダラー」に渡されるのです。今日の講演の目的はここにあるのです。神様の聖火は「万たるワンダラー」に点火されて、いよいよ「形の世界」での最後の聖戦が始まったのです。詳しいことは後半で申し上げます。）

(5) 地球人に円盤・宇宙人の存在と正しい世界を知らせるという目的を持って、地球に生まれ変わって来たワンダラー。（外国のコンタクトマンに多い。）

(6) 地球人としての肉体を付けないで、宇宙人（他の遊星人）の姿で役を果たすワンダラー。  
 (7) 天において、この地球を救う働きをなさる神々（神様の席の方）としてのワンダラー。  
 これ以外にも沢山の系統があるでしょうが、私達の知りえたのはこれだけです。

これを、宇宙の奉仕者（ワンダラー・リング）というのです〔本書第二部・完108頁〕。

## 円盤・宇宙人來訪の真相

前に述べましたように、この地球は世の終わりという大周期を迎えております。そして、宇宙の奉仕者達（ワンダラー・リング）が、地球を新しく生まれ変わらせて新時代を迎え

るという大事業を遂行する使命を神様から頂いて、地球に生まれ変わって来ているのです。この、宇宙の奉仕者達に、その使命に目覚め、使命を果たす時が今、ここに来たことを知らせるために、彼ら円盤や宇宙人は公然と姿を現わしたのであります。宇宙人との接触コンタクトが始まったのもこれが目的だったのです。夜空に美しく飛ぶ円盤を見せて地球人の目を楽しませるために、彼らは遙る遙るやって来たのではありません。

虚空飛ぶ円盤のことは本書8頁、宇宙人については本書17頁参照。

ここで誤ってはならないのは、「円盤、宇宙人來訪の目的」は、宇宙の奉仕者（ワンダラー・リング）の目覚めと使命の自覚を促すためのものであるということです。ですからまだ円盤を一度も見たことのない人の中にも、また宇宙人からの現象的な呼びかけを体験していない人の中にも……、実は靈的な呼びかけで、真に目覚め、使命を自覚して役を果たしておられる方もあることを知らねばならないのです。したがって、円盤を見たから、宇宙人と逢ったから目覚めているという考えは間違っているのです。目覚めとは、「真が判る」ということだからです（本書122・完山頁）。

さらに、円盤・宇宙人の來訪の目的にはもう一つ重大なことがあります。これは後半の最後に語りたいと思います。

私達は、一九六〇年当時に、「真の目覚め」のために宇宙人の方々、宇宙の偉大な方々から沢山の学びを受けました（本書123～146頁）。しかし、「真」の判らない当初の頃の私達は、なぜ宇宙人は自分達のような無名の者にこのような「世の終わり」という重大な事柄を語りかけるのであろうか、自分達のような無力な者に語りかけてもなんの役にも立たぬではないか、と思ったりしたのです。それに対して宇宙人は次のように語られました。

『目を覚まさない、真の魂まことに目覚めなさい、自己を過小評価してはいけません。自分以外には誰も信じてくれないから真実ではないかも知れない、などと言わぬことです。光の子よ、私達があなたのような方々とコンタクトするにはやはり理由があります。それは、あなたたちは人間のように見えても、実は私達より大きな重い使命を持った天使なのです。』

このように語られたわけは、円盤の乗員たちもかつての昔、その遊星の進化の過程において、ワンダラー達の援助をうけたことがあったからであります。換言するなら、ワンダラー達が、彼らの遊星を、現在のような、戦争も貪欲も虚偽も一切存在しない、崇高な、愛と真理まことに輝く世界にまで向上させてくれたからなのです（本書94頁）。

私達は、このような励ましを受けながら、段々と沢山の深い学びを受けて行ったのであります。最初の頃（一九六〇年頃）は、多くの宇宙人の方々から地球への警告が知らされました。それを総合しますと大体次のようなことであつたのです。

## 宇宙人は地球の将来をなんと見ているか

『ズバリ直言するなら、地球と人類は、一大進化過程の大周期に突入しているのである。この大周期においては、地震、噴火、洪水、津波、龍巻、ハリケーン、異常気温、異常気象など、また人為的な各種の重大事件などといった前代未聞の現象が地球上の各地に続発し、さらには大規模な“地軸の急激な変動”をきたすであろう。遅かれ早かれ、地球はこのような突発的な変動のサイクルを必ず通過せねばならない。これらは、現象的に起こることである。』これは“世の終わり”の姿であり、これは必ず起こることなのです。このように宇宙人は言っております。また、

『しかし、これら（世の終わり）が“神様の儀式（聖戦）”即ち、湧玉の儀式、祝事の儀式を終えたあとに起こることは、地球にとっても、人類にとっても喜ぶべき一大進化の新しい輝く世への道なのである。（これが正しい世の終わりである。）』とも言っているのであります。

そして、本書五八頁には、『儀式によって救われます。』（注この儀式とは、「湧玉の儀式」、「祝事の儀式」をさし、これによって地球と人類は救われる。この儀式は宇宙の儀式、神様の儀式である。これは重要な意味を秘めている。やがて判る時が来るであろう。』と書かれています。

この神様の儀式（聖戦）が成されることにより、「正しい世の終わり」となるのです。正しい世の終わりとは、「神様の祝福したもう世の終わり」を言うのであります。

『しかし、もう一つの道がある。今までもこの地球が繰り返して来た、人類の貪欲、邪悪、戦争、そして新しく発見した破壊力（原水爆）。これらはもう極限にきているのだ。さらにこれに加えて地球外の悪の力（オリオン）は地球の破壊を企だてている。

地球人の中の悪の力（貪欲、邪悪、戦争、大破壊力）と宇宙征服を企だてる悪の力（オリオン・ルシファー）とが結ばれば、“神様の儀式（聖戦）”を終えずして「世の終わり」を迎えることになる。そうなれば地球は爆発崩壊、あるいは地軸の大変動をきたし、人類は生命発生の第一段階にまで落ちるのである。（即ち、人類の滅亡である。）それは魂の苦しみと暗黒への永遠の道である。』これを「失敗の世の終わり」というのであります。

『この二つの道への岐路に立つ地球と人類がどの道を選ぶかは、地球人自身にかかっている。』と宇宙人は語っております。

『彼ら宇宙人は、地球人に忠告と援助の手を差し延べんとしている。彼らは語った。「私達（宇宙人）の地球に対する対策は、既に万事万端用意は整っています。」と。

これに対し、地球人がこれを素直に受け入れて愛と真理まことの輝く新しい世とするか、それとも悪の力と与くみして地球を破滅に導くかは、善なる宇宙人は、強制も命令も出来ない。地球人の自由意志にまかされている〔本書84頁〕。』

当時（一九六〇年）宇宙人は、大略以上のように私達に語っていたのであります。そして、さらに、宇宙の偉大な方々は、私達に、『地球と人類のために、神様の聖戦に立ち上がって下さい。神様の手足となって神の国を建設して下さい。』と言われたのであります。

ここに申しました通り、「世の終わり」には「正しい世の終わり、神様の祝福したもう世の終わり」と、「失敗の世の終わり」とがあるのであります。

### 当らなくなったノストラダムスの予言

ここで、ひとつの参考例として、今評判になっております、いわゆる「ノストラダムスの予言」について、少しお話ししてみたいと思います。

私は、「ノストラダムスの大予言」という本は読んでおりませんが、過日、テレビで翻訳者の五島さんを始め多くの方々が出席された「ノストラダムスの予言」という番組を見る機

会がありました。

この番組によりますと、この予言のテーマは「一九九九年の七月に人類は滅亡する」というもので、この予言が書かれたのは四〇〇年も前ですが、その内容が解釈によっては現代の世相とピッタリと一致しているというのであります。

私が先程から申しております通り、今の地球は「世の終わり」という大周期に突入しているのです。地球は、過去の歴史においても「世の終わりの大周期」を度々迎えたのですが、これまではいずれも「失敗の世の終わり」となってきたのであります。（このことは「オイカイワタチ」の本の各巻に度々書かれておりますので、皆さんはご承知と思います。）実は地球はこれまでに六回の「世の終わりの大周期」を迎えたのであります。そのいずれもが「失敗の世の終わり」となってしまったのであります。

したがって、現在は七回目の「世の終わり」という大周期の真只中にあるのです。しかも今回の世の終わりにおいては、これまで繰り返されて来た失敗の世の終わりのカルマが加わって、実に大きな大きなたかるカルマとなって地球を覆いつくしているのであります〔本書118頁〕。

一九六〇年当時、宇宙人の方が次のように言われました。

『地球は余りにも邪悪で、物欲的で、地球人を説得することは不可能です。やがてすべて

が終わるでしょう〔本書66頁〕。』

『私は、今まで、色々な人に何度も話をしました。しかし信じてくれる人は極めて僅しかなく、私はほとんどの場合、完全に気違い扱いにされました。それで私は、もう二度と話をしたくないと思いました。しかし、私は自分の任務を果たしたいのです〔本書45頁〕。』

『ある星の人達はほとんど諦めました。』

『しかし、今、地球の上空を飛んでいる円盤に乗っている人達は諦めておりません。』

このように、ある星の人達はほとんど諦めてしまった程に邪悪に覆われ、物欲に包まれたたかるカルマの地球では、当然、今回の「世の終わり」も「失敗の世の終わり」となる筈でありました。このことは本書一二〇頁にはっきりと書かれております。

ですから、四〇〇年前の「ノストラダムスの予言」が人類の滅亡を語るものであっても決して不思議ではなく、むしろ当然のことなのであります。

しかし、この予言は当らないことになりました。私はこのことを皆さんに申し述べるためにここに來たのです。

今回の「世の終わり」の戦いにおいては、天の神様に『特別の手段』をとって頂いたのです。この『特別の手段』とは、ワンダラーの系統で申しました「天の役をする神様のワンダラー」を地に降ろして、地球の「無の世界（根元の世界）」の「根のカルマ」を解いて頂い

たことを言うのです。（これは簡単に語りつくせる内容ではありません。「オイカイワタチ」本書一二〇頁と全巻の各所に記述されておりますので「真」の判るまで繰り返してお読み下さることを願っています。）

「無の世界」の根のカルマが解けたことにより、地球には新生の礎いしづえが出来ました。そして、これによって「オイカイワタチの役」をするワンダラー達は数々の「神様の儀式（聖戦）」に参加することが出来たのです。

よって、今回の「世の終わり」は「失敗の世の終わり」ではなく、私達は、「神様の祝福したもう正しい世の終わり」を迎えることが出来ることになったのです。ノストラダムスが予言したような「人類の滅亡」ではなく、「人類の喜びの生まれ変わり」が出来ることになったのです。このことを申し上げるために、私はここに來たのであります。

## 神様の聖戦（儀式）にワンダラーが参加するということ

これまで申しましたとおり、遊星地球は進化の大周期に來ており、「世の終わり」を迎えているわけですが、この「世の終わり」が「失敗の世の終わり」となるか、「神様の祝福したもう正しい世の終わり」となるかは、「神様の儀式（聖戦）」にワンダラーが参加

出来るか否かによって決まるのです。

しかし、神様のなさる儀式に参加すると一口で申しますが、これは中々難しいことなのです。というのは、ワンドラーは真に目覚め、魂に目覚めないと参加出来ないからです。

地球の破壊を企てる悪の力、オリオン、ルシファーと、それに与した霊界人達は、ワンドラーが真に目覚めないように、儀式に参加出来ないように、妨害の、迷わしの靈感、迷わしのテレパシーを送るのです。さらに、物欲、我欲の囚となして使命の果たせない眠るワンドラーとしたり、あるいはサタンと化してしまうことさえあるのです。

「世の終わり」の戦いとは、ある面ではサタンとの戦いでもあります。戦いと申しましても力の戦いではありません。かつて（一九六〇年）、天の神様のお使いをなさる宇宙人、金星のアトネ様が、『あなたがたの力ではオリオンの手を避けることは出来ませんが、愛の心だけで避けられます〔本書142頁〕。』と言われたことがあります。サタンのテレパシーや靈感は、力のテレパシーであり靈感です。力に対抗したならば、オリオン、ルシファーの方が遥かに私達（地のワンドラー）より強いのです。

しかし、サナンダ様は言われました。『オリオンは「真」には負けず〔本書141頁〕。』

「真」にはオリオンもルシファーも手をふれることが出来ないのです。ですから、神様の聖戦（儀式）に参加出来るか否かは、「真」に目覚めるか否かによって決まるのであります。

地球が過去度々「失敗の世の終わり」を繰り返してしまったのは、ワンドラーがオリオン、ルシファーの誘惑に負けて、神様の儀式、即ち聖戦に参加出来なかったためなのであります。しかし、今回の「世の終わり」の戦いにおいては、ワンドラーは、ようやくにして「神様の聖戦（儀式）」に参加出来たのであります。（この聖戦に参加した魂の記録が「オйкаイワタチ」全四巻に記述してあります。）

「オйкаイワタチ」の本書を読んで頂きますとお判りの通り、その大部分の箇所で、『真に目覚めなさい、目覚める時は今です。魂に目覚めなさい、真我に目覚めなさい。』と宇宙人は繰り返し私達に語っています。

当時（一九六〇年当時）、私達はどのようにしたら「真」に目覚められるのかとしばしば宇宙人に問いを發しました。しかし、「真」の目覚めのため手助けは沢山ありましたが、「真」の目覚めそのことに対してはついに答えられませんでした。そして、私達はその後の二十余年の魂の歩みと体験を通じて、この問いは、答えられるものでなく自分自身で判るものであり、判らねば「真」に目覚めることが出来ないものであるということを知ったのであります。

このように、この聖戦にワンドラーが参加する、つまり「真」に目覚めるためには、テレパシーと靈感の本質について正しい理解をもつことがぜひとも必要になってまいります。そ

ここで、次に、テレパシーと靈感の本質についてお話したいと思います。

世間一般で言われていますテレパシーとは、通信手段の一つとして取り上げられているもののようです。電話の代用として耳の傍で語る言葉（音声）を聞くことがテレパシーであると思われているようです。確かにそれもテレパシーの一つであります。しかし、真のテレパシーとは言えないのです。

サナンダ様は、テレパシーについて私達に次のように教えられています。

『テレパシーとは、愛の手を差し延べることに、真我の目覚めです。』

『潜在している我を取ることで。』

『テレパシーで真の判るのは、魂の語る真が真の魂へ聞こえ、その真の魂の語る声が聞こえることです。』

テレパシーが耳（音声）で聞こえる時が希なのは、たか、カルマが廻りを取り巻いて、たか、カルマへ語ることがあるためです。このような声を真のテレパシーと思うのは大変な間違いです〔本書146頁〕。』

テレパシーは、真で聞こえて来るのは、構えて、真のよく判る魂の方です。

真のテレパシーが受けられるのは、たか、カルマが廻りから語る迷わしをよく

断つよう、魂を高めることが大切です。

テレパシーが利いて、魂が低く目覚めていることは、まことに恐ろしいことです。

稀な魂の、真が目覚めるよう、頼る廻りで（神に）たのみなさい。（本書146頁）

このように言われています通り、テレパシーとは真の方の真の魂から自分の真の魂へ語りかける真の語らいを、自分の真の魂で受け、それを真に目覚めた心と意識で判って、その真の語らいが完全に自分のものとなるということです。そして、これが岩をも通す信念となるのです。

これが真のテレパシーです。ですから真のテレパシーを受けるには、また真のテレパシーが判るには、「真」の目覚め、真我の目覚めと、受ける心の礼儀が大切であることがお判り頂けると思います。

次に靈感についてお話しましょう。

神様からかけられる靈感、神様の席の方からかけられる靈感は、いずれも柔らかい「氷山の一角の如き思い」の靈感です。その氷山の一角の如き思いの靈感を深く考えますと、その意味を理解する靈感がさらにかけられます。また、その靈感のままに実行する決意をします

と、その決意に応じて、その靈感の中に秘められた意味が判って来ます。そして実行に移すのです。

ところが多くの人は、その柔らかい「氷山の一角の如き靈感」をやりすごしてしまうことが多いのです。私達もそうでした。すると宇宙人の方は「心の礼儀がありません。」と言われたのです。このように、靈感を受けるには、受ける心の礼儀（節度・忍耐・敬虔）を持ち、真に目覚めることが大切であるとお判り頂けたと思います。

さて、これでテレパシーと靈感の本質（詳しいことは全四巻をよくお読み下さい。）について理解いただけたと思いますので、本題の、「神様の聖戦に参加する」ことに戻りましょう。

皆さんは、神様の聖戦に参加するといっても、一体何をすれば良いのかと思われると思います。このことは、万たるワングラーであるここにお集まりの皆さんには、これからの使命を果たして行く上に大切なことでありますので、特に申し上げておきたいのです。

このことについて、宇宙人は次のように言っています。

『貴方がたは、では、一体、何をしたら良いのかと考えています。何をなすべきかは、私達（宇宙人）は貴方がた一人一人に、テレパシーでお伝えします（本書78頁）。』

“奉仕する者”（ワングラー・リング）には、その人の任務、役目を、宇宙人の方が、見

えない姿で、テレパシーで、あなたの傍で語っておられるのです。そのテレパシーを真の魂で聞いて、真に目覚めた心と意識で聞いて、真の自分の靈感で考えて、自分で判断して、正しい、これは必要だと心で素直に思うことを実行するのです。行動するのです。

『“実行は言葉よりも雄弁である”、これは地球の古い諺ですね。私たち（宇宙人たち）も実行する。皆さんも実行して下さい。実行して下さいれば、私たちは、創造主（天の神様）の御手を借りて、皆さんを指導しましょう。』

『宇宙の法則によって、私達は何をせよと皆さんには命令は出来ません。地球のことは、地球の皆さんで、自分で判断して行うのです。実行すれば、必ず私達は援助します（本書79頁）。』

私達のこれまでの二十年間余の歩みを振り返って見ますに、この宇宙人が言った通りであったと確信をもって申し上げられます。

私達が実行に移しますと、宇宙人の方々を始め、天も地も、空も雲も、月も太陽も、また神々様が私達の働きに援助を与えてくださったのです。天も地も、空も雲も、星も月も、太陽までが私達に語りかけてくれました。正に天地万物は一体であると思えました。このことは「オйкаイワタチ」全巻に書かれている通りであります。

このような沢山の援助を受けて、私達は、「神様の聖戦（儀式）」にようやくして参加

が出来たのであります。

## 聖戦の歩み（オイカイワタチの歩み）

大宇宙の中にある一遊星地球が進化の大周期を迎え、「世の終わり」が行われ、同時に「新しい地球、神の国地上天国」が誕生するということは、実に大変な出来事であります。それは人類にとっても、地球にとっても、また宇宙全体にとってもそうなのであります。

これは、人類がこれまでに想像して来たどれよりも大きくかつ奥深いところから成されるものなのです。世間でいわれている「世の終わり」の殆んどは、形の世界（現象）の大変化のみを語っています。しかし、そのように単純に、一足飛びに「現象界の大変化、即ち世の終わり」が来るわけではありません。現象の世界の奥には、目に見えない地球の奥深いところに内在している世界から浅い世界に至るまでの様々な世界があるのです。そして、その様な世界、つまり、「オイカイワタチ」の本に繰り返し述べられております「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」、「形の世界の目に見えない霊界、幽界」において、

### 『神様の聖戦（儀式）』

湧玉の戦い（儀式）……世の終わりの戦い。

### 祝事の儀式……新しい地球、神の国の誕生。』

がこれまでに行われてきたのであります。そして、これらが行われたあとに始めて「現象の世界の世の終わり」が行われるのであります。

したがって、この目で見えない各世界で果たされて来た聖戦の足跡を記述した「オイカイワタチ」全四巻をお読み頂ければ、「正しい世の終わり」、「新しい地球、神の国の誕生」がどのようにして行われて来たかお判り頂けると思っています。

つまり、書籍「オイカイワタチ」の目的は、目に見えない地球の内奥の各世界での聖戦を語り、これらの聖戦が成し遂げられたあとに始めて「形の世界」の「現象界」に「世の終わり」が行われ、同時に「新しい地球、新しい世」の出現があることを知って頂くということにあるのであります〔完247頁〕。

このように、書籍「オイカイワタチ」全四巻は、この二十余年間にわたる聖戦の記録であります。したがって、そのすべてを語りつくすことは、この場所では不可能でありますし、また、奥に流れている「真」を知って頂くためには、繰り返しお読み頂くより他に方法がありません。そこで、新しく読まれる方々、および再度お読みになる方々のために、全四巻の概要を整理して申し上げます。しかし、その前に特に申し上げておきたいことがあります。「オイカイワタチ」全四巻に記述してあります聖戦は、九九・九多が天の神様始め、天の

神々様、地の神々様によって成されたのであります。しかし、あとの○・一％は地球人が目覚めて参加せねば完成できないのであります。地球のことは地球人によって成さねばならないというのが厳然とした宇宙の法則であるからです。

この○・一％をなんとか成し得たという魂の記録が書籍「オイカイワタチ」なのであります。

### 『本書』

昭和三三年から四九年まで一七年間にわたるワンダラーのこの地球での聖戦の足跡を記述。

第一部は「円盤・宇宙人來訪の真相」と題し、宇宙人の地球に対する警告などを述べ。第六章から成る。

第二部は「オイカイワタチ」と題し、「宇宙のドラマ」、「奉仕する者」、「宇宙の秘密」、「オイカイワタチの使命」、「魂の目覚め」など九章から成り、地球の「無の世界」における聖戦を記述している。地球の最期のことも書かれている。

### 『別冊(一)、(二)合本』

昭和五〇年から五二年四月まで。「世の終わり」と「新しい地球の誕生」にかんする

ワンダラーの聖戦の足跡を記述。

別冊(一)は、地球の「無の世界」における聖戦の記述で、「太陽の方、地球に降り給う」など三章から成る。

別冊(二)は、地球の「霊の世界」における聖戦の記述で、「新しい世の王を頂く」など四章から成る。

### 『別冊(三)』

昭和五二年一二月まで。ワンダラーのこの地球における聖戦を具体的に述べてある。

第一部は、地球の「霊の世界」における聖戦の記述で、「この地球最後の儀式—鏢球王国の霊の世界誕生—」など三章から成る。

第二部は、地球の「たましいの世界」における聖戦の記述で、「この地球の浄めの聖戦」、「鏢球王国のたましいの世界誕生」など六章から成る。

さらに附として、「新しいワンダラーの誕生」のことも書かれている。

### 『完』

昭和五三年一二月までの聖戦、すなわち、「形の世界」の目に見えない「霊界」、「幽界」における「世の終わり」と「新しい世の誕生」の記録。

第一部は、「万たるワンダラー誕生」で、「鏢球王国の国造り成る」など七章から成

る。

第二部は、「新しい地球、鏖球王国完成」で「天孫降臨」など二章から成る。第三部は、「レタマヤ（天の神様の大愛）の世の終わり」で、「エクアドルの儀式」、「古い地球の葬送の儀式」など五章から成る。さらに「附」として、「年表 オイカイワタチの歩み」がそえられている。

この「完」においては、いよいよ現象の世界に入る寸前の世界、即ち、霊界、幽界における聖戦が述べられています。

ただ、ここでひとつお断わりしておかねばならないことがあります。それは、私がここで申します「形の世界」とは、心と意識と肉体の世界を指し、また霊界、幽界、現象界をも指しているということです。むしろこの「形の世界」は、その内奥にある各世界から切り離して語られるべきものではありませんが、「形の世界」の現象の世界での戦いは、人類がこの目で見、かつ肉体で体験して行く戦いでもあります。この厳しい体験を通して「真」を知る戦いなのであります。

「完」は、いよいよ「形の世界の現象界」において「正しい世の終わり」が迎えられることになったというところで終わっております。

このことを少し詳しく申し上げます。

この二十年余にわたって地球の内奥の各世界では神様がなされる聖戦（儀式）が行われてまいりました。そして、この聖戦（儀式）にワンダラーが参加出来たことにより、地球の内奥の各世界における「根のカルマ」は全部解けたのであります。

ここに、「神様の祝福したもう正しい世の終わり、レタマヤ（天の神様の大愛）の世の終わり」を迎えることが出来ることになったのであります。よって、

「天の神様のお望み通りの地球に生まれ変わることが出来ることになった。」のです。

「全人類、全動物、一切のすべてのものが生まれ変わって救われることが出来ることになった。」のです。

「オイカイワタチ」の「完」はここで終わっているのです。

昭和五四年の一年間の聖戦で「祝事の儀式」、いわいごと「昇華の儀式」しょうかなどが行われた。よって、一九八〇年の幕開けをもって、聖戦は現象の世界の終末の期ときを迎えたのである。

したがって、ここに前にも触れましたとおり、ノストラダムスのような、「失敗の世の終わり」の予言はあたらないうことになったのであります。

ちなみに、「ノストラダムスの予言」では、最後に「別のこと」によって人類の滅亡はさ

けられると書かれているようですが、その考え方からするならば、これまでに申しました、天の神様の大愛（特別の手段）により今回の世の終わりにおいて初めて「神様の儀式」が行われたということが、この「別のこと」にあてはまると言えるでしょう。

大略以上に申し述べましたような経過をもって、ここに「オйкаイワタチの使命」は終わり、「新しい一頁」が始まりました。

いよいよ、これから、目に見えない内奥の世界に創られて来た「新しい地球、神の国」の不滅の土台の上に、「形の世界」の「新しい地球、神の国地上天国」を建設する時が来たのであります。

そして、この建設は、新しく誕生された万たる数のワンダラーによって、即ちここにお集まりの皆さんの手によって（また、この小冊子を、書籍「オйкаイワタチ」を「真」で判って下さる方々の手によって）なされるのであります。

これまで「オйкаイワタチの役」をして来られた古いワンダラー達は、皆さんと同様に「万たるワンダラー」の一員として使命を果たしておられます。

ここに、「形の世界」の「新しい世」の建設のバトンは万たるワンダラーに渡されたのであります。

ここで前半のお話を終わり、後半は最後の決戦である「万たるワンダラーの使命」につい

て申し上げます。——休憩——

## 万たるワンダラー誕生

現在の段階では、万たるワンダラーには、少くとも次の3つの系統の方々が含まれていると考えられます。

- ① 塩漬けのリング
- ② 元ワンダラー
- ③ マルワク、アヨオルの方々

このうち、①の「塩漬けのリング」については、金星の長老サナンダ様は、次のように言われております。

『挺身して世のために尽くすことを願って、外の遊星から地球に生まれ変わって来ている人達です〔本書93頁〕。』

また、②の元ワンダラーについては、本書の第二部に書かれておりますのでお読み下さい〔162頁など〕。

さらに、③の「マルワクの人達」、「アヨオルの人達」とは、地球圏内のある高い霊圏に

いる人達をいいます。この靈圈にいる人達の中には、地球という遊星で学ぶべき教程を終えられて、他の遊星に生まれ変わることが出来る程に高い魂をもった方々がおられるのですが、この方々は、地球が今まさに大周期の世の終わりを迎えんとしているさまを見て、他の遊星へ転生することを待たれ、地球と人類に奉仕せんと誓いを立てて、再びこの地上に生まれ変わっておられるのです。

これらの高い魂の方々は、この地球での低いバイブレーションの肉体を着ても、基本的な考えと心は利己的、物欲的ではなく、人の役に立ちたい、正しい世を作りたい、地球のため、人類のために働きたいと念願しておられるのであります。つまり、ここにはこのような魂の方々が集まられているのであります。

そして、このリング、元ワンダラー、マルワク、アヨオルの魂の方々に天の神様から新しい地球を再建する使命を頂かれた方が、天において生まれ変わって「ワンダラー」となられたのであります。これが、万たる「ワンダラー」なのであります。

この万たる数のワンダラーは、「完」一八頁にも書かれております通り、一九七七年（昭和五二年）一月二六日、天の神様、天の神々様、地の神々様の大御業により、即ち『万たるワンダラー誕生祝事の儀式』により誕生されました。

この儀式において祈りが捧げられていました時、私達は次の光景を靈感と共に靈視したのです。

『数限りないまるまるとふとった可愛らしい赤ちゃん（ワンダラー）がつきつきと天より降りて来る。この赤ちゃんをMさんは両腕りょううでに抱きかかえる。すると赤ちゃんはすーっと消えるように彼方に去って行くのである。この光景が暫くのあいだくりかえされた。これはまさに万たるワンダラーの誕生であると判った〔完19頁〕。』

このようにして誕生された万たるワンダラーに対して、一昨年（昭和五三年）五月三日に「万たるワンダラーの入学式」が行われました。この日まで私達には、万たるワンダラーの方々と現実的接触がありませんでしたので、この入学式には、万たるワンダラーの方々の肉体での出席はないものと思っておりました。ところが、この日、期せずして「万たるワンダラー」を代表した十数名の方々が千葉県のKさんに連れられて参加されたのです。その不思議さには驚くほかありませんでした。

この日、万たるワンダラーについて語られた内容は、「完」一一五頁に次のように書かれております。

『万たるワンダラーのことは「オイカイワチ」別冊(三)以降に度々述べてあります通り、万たるワンダラーは、天の神様、神々様と地の神々様の結びの大御業により、ワンダラーのみたまが天より降ろされて、新しく生まれ変わってここに誕生したのであります。外見

からすればこの肉体も意識も心も以前の古い地球のままのようですが、**みたまは新しくワンダラー**として誕生したのです。この万たるワンダラーは新鮮であり、心と意識と肉体という「形の世界」において目覚めやすい状態にあると思います。

私は、万たるワンダラーの方々が「形の世界」で目覚められて遅しい働きを始められつつありますことに大きな期待を致しております。すでに全国各地で素晴らしいこの働きが胎動しております。』

これは昭和五三年五月三日の儀式、つまり「万たるワンダラーの入学式」の時に申しました内容ですが、この胎動から二ヶ年を経過しました今日、万たるワンダラーの方々は立派に成長されて、全世界でその活躍が始まっているのであります。今日のこの講演会も、これから行われます沢山の講演会も、すべて「万たるワンダラー」の活躍の始まりを示すものであり、真の目覚めを促すものであります。私は、ここにお集まりの万たるワンダラーである皆さんのこれからの活躍は素晴らしいものとなると確信します。なぜならば、**ワンダラー**の活躍が開始されますと、宇宙人も神々様もその働きに沢山の援助を与えて下さるからです。

天の神様の手足となって働くのがワンダラーであります。

一九八〇年の幕開けと共に、「万たるワンダラー」の活躍の本番の時が来たのであります。

## 現象界の世の終わりの大変化

いよいよこれからは、「形の世界」の現象界の世の終わりの変化が起こるわけであり、この変化を起こしてもらえらるということ、これまでに度々申しました通り、地球の内奥の世界、即ち「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」、「形の世界の目で見えない霊界、幽界」で「世の終わり」の戦いが行われ、カルマが出しつくされて、「根のカルマ」が解けたからなのであります。ですから、今はもう地球のカルマは根のないカルマとなっているのです。

そして、この根のない浮き上がったカルマが「形の世界」に出しつくされて、真でカルマが解かれて行く姿が、即ち「現象界の正しい世の終わり」の姿なのであります。

しかし、サタン（オリオン、ルシファー、まがつ神、ゴースト等々の隠れた悪の系統のもの）は、正しい世の終わりが出来ぬように、神の国地上天国が出来ぬように最後の決戦を挑んで来ます。現象の世界のたかるカルマが解けぬように、カルマが出しつくされぬように、あらゆる妨害をするでしょう。そして、あげくの果ては最後の手段として地球の壊滅をも企てるのであります。このようにサタンの妨害の戦いは物凄いものとなるでしょう。

しかし、これらのサタンの妨害のたくらみは、すべて失敗に終わるでしょう。というのは、先にも述べましたとおり、地球のカルマは、今はもうすべて根のないカルマとなっているからです。

したがって、「根のカルマ」の解けた地球にこれから起こることは、いかなることであっても、すべてカルマが出しつくされて行く正しい世の終わりの大変化（大変動）の姿なのであります。この「真」を万たるワンダラーは知らねばならないのであります。

これに対し、「失敗の世の終わりの変化」とは、根のカルマが解けず、即ち地球の内奥の各世界での「神様の聖戦」が行われず、根のカルマが残ったままで現象界だけが「世の終わり」を迎えることを言うのです。これでは「世の終わり」の大変化のあとカルマの根が残っていますので、再びそのカルマは再生され、カルマがカルマを呼び、カルマがカルマを生んで以前と同じような、否、以前よりも沢山のたかる、カルマに覆われた地球となってしまうのです。この失敗が、地球ではこれまで度々繰り返されて来たのであります。

ところが、先程申しました通り、今回の「世の終わり」においては、天の神様の大爱によって「神様の儀式（聖戦）」が出来ました。したがって、「根のカルマ」が解かれておりますので、これから起こる様々の変化（現象界の世の終わりの大変化）は、根が無くなって浮き上がったカルマが出しつくされて、真でカルマが解かれて浄められて消えて行く姿となる

のであります。そして、この大変化のあとには、悪いカルマは一片たりとも残らないのであります。これを「正しい世の終わり」というのであります。

このように、地球はここに「正しい世の終わり」の期を迎えたのです。これからは、嘘、偽り、ごまかし、隠しごとなど一切通らない時となりました。

古い地球との縁とゆかりを断つ時が来ました。

いよいよ地球と人類が生まれ変わる時が来たのです。

このことにかんしまして、金星の長老でA Z（即ちワンダラーの頭）であるサナンダ様は、『カルマを出しつくさねば生まれ変われないのです（別冊(三)188頁）。』といわれております。ここに、地球のカルマを、全人類のカルマを、個人のカルマを、全動物一切のもののカルマを出しつくす時が来たのです。

カルマを出しつくして生まれ変わる姿が「正しい世の終わりの大変化の姿」であります。このカルマを出しつくして行く姿は、「完」の二四九頁から二五一頁にわたって次のように書かれております。以下、この部分を読んでみましょう。（以下の文章では、この小冊子にまとめるにあたって多少表現を変えたところがある。）

これからは、個人の身のまわりに、職場に、社会に、国に、全世界に、そして天と地と自然において、人類の気付きと目覚めのための助けの変化が起こる。それは実に厳しく苛酷なものとなるであろう。

（今回の世の終わりにおいては、全人類が必ず救われるのであるが、この救いは、決して他動的なものではない。人類を構成する各個人、ひとりひとりが身に持つカルマを明らかにし、そのカルマに目覚め、真で解くことによって救われるのである。（根のカルマが解けているので目覚めやすいのである。）そして、ひとりひとりが真に目覚めるための助けが、これから個人の身のまわりに、職場に、社会に、国に、全世界に、そして天と地と自然の中に起こってくるのである。また同時にワンダラーは人々に先がけて真に目覚め、カルマを解いて人々の目覚めの助けをするのである。）

日本国内、世界各国、さらには地球的規模で驚異と脅威の大混乱（この大混乱は自然的なもの、人為的なものの両者を意味する。）が相次いで起こるであろう。

天は燃え、地は裂け揺り動くであろう。

日の輝かざる時もあるであろう。

カルマとカルマが互いにつつかり合って、カルマとカルマの血が吹き、ウミが出て、凄ま

じい姿でカルマが朽ちて行く。（全人類を始めとして、全動物、山川草木、一片の石ころに至るまで、それぞれの持つカルマがいよいよ吹き出て来る時が来ました。地球のカルマは、気象の異常な変化、火山爆発、地震、海底の隆起、その他各種の自然の猛威となって現われるでしょう。前代未聞の現象が地球上の各地に続発するでしょう。また人類のカルマは、人と人との争い、国と国との争いとして現われ、あらゆる想像もつかないような突発的事件、人為的な大混乱も益々激しくなるでしょう。個人のカルマは身のまわりに混乱と苦しみとなって現われるでしょう。）

『地球の過去のカルマは、終わる時（現象界の世の終末の期）みんな目の前に現われます。（この姿、形は実に物凄いものとなるであります。しかし、いかに物凄くみえようともこれらの現象は根の無い、浮いたカルマの消えて行く姿なのであります。このようにして、地球の、人類の、個人の、過去のカルマは一滴たりとも残さずに浄められるのです。）

この浄化は、人類が“真”に気付き目覚めるまで続けられる。即ち、カルマが出しつくされるまで続けられる。これは新しく生まれ変わるための生みの苦しみである。そして、カルマが出しつくされて“真”に目覚めた者は、奥に内在している数々の世界（“無の世界”、“霊の世界”、“たましいの世界”、“形の世界の霊界、幽界”）と一つであることに気がつき、これらの世界と一体となって生まれ変わるのである。

人類にこの目覚めが成されたとき、古い地球の地軸と赤道の位置（ライマカタの地軸の位置）は、新しい地球、神の国鏢球王国の地軸と赤道の位置（ラタカルタの地軸の位置）に変化する。いや天の神様が変化させて下さるのである。

この「正しい世の終わり」の変化の姿、即ち大浄化は、「真」の目から見るならば人類の目覚めのための『天の神様』の涙の愛である。

この大浄化（正しい世の終わり）をして頂けることになったのも、次のようなことが決定されたからである。つまり『天の神様』の大愛により「新しい地球、新しい世」が形の世界に生まれ変わることが出来ることに決定されたからである。

全人類、全動物、すべてのものが救われることが出来ることに決定されたからである。



ですから、「正しい世の終わり」の真が判って頂けますと、これから起こる「世の終わりの変化の姿」がいかに厳しく苛酷なものであっても、「真」の目から見れば新しい地球、神の世への輝かしい道であり、地上天国建設への喜ぶべき道であると判るのであります。

しかし、この「真」が判らず、「形の世界」の大変化を表面の物質面のみものとして見たならば、これは驚く程厳しく苛酷なものとしてこの身に迫って来るではありません。そして、「真」の判らない多くの人達は、あわてふためき、迷い、混乱するでしょう。しかし、この時こそが「万たるワンダラー」の真価が発揮されるべき時なのです。つまり、この時、万たるワンダラーの方々は「真」を語って、多くの迷う人達を救う使命を頂いておられるのです。

すでにこの混乱は、全世界に始まっております。世の中の混乱が激しくなるに従い、サタンの最後の攻撃も益々激しくなるでしょう。これからはいろいろなニセ予言者が現われて来るでしょう。「われは救世主である。」、「われは宇宙人である。」このように語るものも出て来るでしょう。また、「宇宙からのメッセージ」と称する真しやかなサタンの語らいが入り乱れるでしょう。或いは、宇宙人から知らされた確かな情報といて「何月何日にどこどこで地震が起こる。」などというような様々な変動の情報も飛び交うことでしょう。本書一八六頁にも次のように書かれております。

『地球の霊界の悪い者は、地球の最後が近づいていることを知っている。今はもはや少しの生命と知っているのです、イライラしている。そして地球人にすぎ、あらばたかろう、としているので、これからは、たかられた人達（地球人）による様々な悪い現象（ニセ予言者、サタン等々による現象）が出て来るであろう。「われは宇宙人なり。」と語ってイタズラをする

霊媒現象も現われるであろう。』

ここで特に注意しておきたいことは、宇宙人には「善なる宇宙人」と「悪なる宇宙人」とがあることです。（詳しいことは本書に書かれておりますのでお読み下さい。）これからは、「善なる宇宙人」とのコンタクト（各種）も増加して来るでしょう。しかし、これを妨害する「悪なる宇宙人」と、この系統に属する者とのコンタクト（各種）も増加するでしょう。宇宙人と称したから全て正しいと思うのは間違っています。オリオン系の宇宙人、ゴーストからの呼びかけを「善なる宇宙人」と間違えては決してならないのです。「世の終わり」の戦いがハルマゲドンの戦いと言われるのもこの意味があるのです。

これからは、オリオン、ルシファー、ゴーストなどサタンの誘惑は、「真」を語る人達に特に激しく迫って来るでしょう。

かつて、宇宙船に乗り、宇宙人とのコンタクトストーリーを発表して世界的話題となった有名なコンタクトマンでも、また選ばれた者達も、オリオンの誘惑にかかったのです。ですから、これまで正しかったからこれから先も正しいとは限らないのです。

したがって、「真」が判らず、頼るところを「その人」に置いている場合、「その人」がサタンの誘惑に負けますと、「その人」を頼っている人達も知らぬ間にサタンの誘惑にかかってしまうのであります。

先程も申しましたが、かつて（一九五〇年代）コンタクトマンとして世界的に有名であった方でも、一九六〇年頃のコンタクトストーリーには「真」が失われているのを私達は知りました。このことに関し、私達は宇宙の偉大なお方に問うたことがありました。この時（一九六〇年八月二〇日）、サナンダ様は次のように語られました。

『彼（世界的に有名なコンタクトマン）にはオリオンの誘惑があります。選ばれた者も誘惑されます。木の実をよく見て、正しいものと悪いものを見分けて下さい。

縁<sup>えん</sup>というものは、今日、明日のものではないのです。良くありたいと願ってもそれができないのは、前生の縁<sup>えん</sup>です。カルマの法則を考えてみれば判るでしょう。一人でも正しくあるうという人が悪くなるのは悲しいことです。そうならぬよう祈りましょう。』

このように、これからも、コンタクトマンでも、選ばれた者達も、万たるワンダラー達も、激しいサタンの誘惑の総攻撃にあい、多くの人達は、なにが正しいのか、なにが間違っているのか、なにがなんだか判らなくなることもあるでしょう。しかし、このような大混乱の中にあって、真物<sup>ほんもの</sup>とニセモノを判断する唯一のものは「真」です。

悪い者に迷わされたりニセモノを真物<sup>ほんもの</sup>と見間違えたりするということは、すべて「真」の判らぬところから生じるのであります。

いかなる混乱の世にあって、真<sup>まこと</sup>を見失わない限り正しい道を歩むことが出来るので

す。

これからは、「真」に目覚めないと、「真」が判らないと前に進めない時に来ているのであります。

だから、善なる宇宙人は、地球人に「世の終わり」の恐怖と低俗な変動の情報を通して通るばるやって来たのではないのです。地球人に「真」を語って、真の目覚め、魂の目覚め、真我の目覚め、そして「生まれ変わり」の手助けに来ていたのです。

「変動の情報」を知って逃げ隠れて、この肉体がもし助かったとします。しかし、その人が「真」に目覚めず、カルマを出しつくして生まれ変わっていないければ、その人の持つカルマは新しい世に持ち越されて再生されます。それでは再びたかるカルマの地球となるのです。かつて、一九六〇年代に、イタリアのある宗教の教祖が世の終わりが来たといっている者七〇〇〇人を連れてモンブランの山頂へ避難したことがありました。また最近では、日本の某地点が、あるいは世界の某地点がノアの方舟はこぶねであり、その地点におれば生命と肉体が助かるということである。その地点に避難したという事実がありました。このような出来事は、世の中が混乱するに従い益々激しく起こるようになって来ることでしょう。

そして、そこへ避難された方々は、「我々は生きながらえて正しい地球を、正しい世を再建するのである。」と、まことに立派な綺麗ごとを言われます。しかしそのうちの多くの人

々は、その言葉の奥に「我」がひそんでいることに気がきません。即ち、自分が助かりたいという「我欲のカルマ」です。この「我欲のカルマ」によって逃げだしておりながら、表面的には「再建」という立派な言葉にすり換えて表現されている場合が残念ながらほとんどないのであります。

そして、もし奥にひそむ「我欲のカルマ」を持ったままこの肉体が助かったとしたら、その場合の「大変化」は「正しい世の終わり」とはならず、カルマの残る「失敗の世の終わり」となるのであります。

しかも、実は、今回の地球の「世の終わりの大変化」においては、地球上に肉体の助かる場所は一ヶ所もないのです。地球上のどここの地点に逃げかくれても、だれ一人として助かりません。このことにかんしてはあとで詳しく申し上げます。

ですから、地球も、人類も、「形の世界」においてカルマを出しつくして生まれ変わらねばならないのです。これ以外には、いかなる道も残されていないことを、断言いたします。そして、この生まれ変わりこそを、「新しい地球、新しい世の建設」というのであります。

## 新しい地球、新しい世の建設

新しい世とはどのような世界を言うのでしょうか……。このことにかんしては、たとえば「完」の二二二頁以下に詳しく書かれておりますが、重要なことですので、ここでその大意を述べておきます。

新しい世は、マコトが輝く世です。全人類、すべてのもののマコトが輝く世です。

新しい世は、魂の輝きが見え、人類はそれぞれの魂の輝きにより自づから成る秩序で正しく自然に統べられる世であります。今の地球の如く魂の輝きに関係なく、金持、権力者、強者、学者等々によって誤った秩序を強制される世ではないのです。

姿、形はいかに見すばらしく見えようと、魂の輝き、マコトの輝きによりすべてが成る世であります。

姿、形を賑々しく、威武威武しくする、つまり形の威厳をもって美しく立派に見せるといふ発想は、粗雑で重厚な物質的進化だけを求めた、獸的進化の段階にある地球のみがとった道なのであります。

新しい世は、魂の輝きと、マコトの輝きによって成る世であります。新しい世の形の世界は、物質的な密度の希薄な状態で肉体（形態）的に表現される世界です。カルマが解けますとこのように軽くなるのであります。

ですから今の地球の重厚粗雑な物質世界（たか、カルマに覆いつくされた世界）の肉眼から見る限り、新しい世は驚く程に見すばらしく映るでしょう。そこは、物質的な豊富さ、豪華さなどは全くない世界だからです。しかし、「真」の目から見れば、そこはマコトの輝く素晴らしい世であり、霊的な豊かな暮しの世なのであります。

ところが、新しい世の来訪を願っている人達のうちの多くの方々は、新しい世を、次のように考えておられるのではないのでしょうか。

新しい世は現象の姿が、形が、物が、美しく輝く豪華絢爛にして素晴らしいところであり、物質は無限に豊かで、便利で、欲する物は集まり来たり、欲しないものは去って行く、肉体は柔らかい羽根布団に甘く暖かく包まれて……。新しい世の「形の世界」を今の地球の物質的観点から見て勝手にこのように想定し、このような世界を地上天国と語り、これを打ち建てようと心に画く人達がいかに多いことでしょう。「世の終わり」を、「新しい世」を、「世界の平和」を願い、叫ぶ人達の中にも、宗教家の中にも、ワンダラーの中にさえも、このような考え方があられるようです。しかしこれは大変な間違いであることに気付かねばならないのです。

新しい世の物質的表現においては、物質的な重みは軽くて少ないのです（カルマが解けると軽くなるのです）。そこは、物質的表現では、なにもないと思われるほどに素朴で質素な世界です。しかしながら、そこは霊的には極めて豊かな世界なのです。

しかし、このことは、今の物質的な重さにとらわれた地球においては、中々理解しがたい点もあると思います。そこで、私達の昔の体験をひとつ申し上げてこのことの参考としたいと思います。

たしか一九六一年（昭和三十六年）のことと思います。台風が中部地方を襲い、ワンダラーY氏の家の板塀が吹き飛んだのです。そこでY氏とほかの一〜二名のワンダラーがこの板塀を三日がかりで修理しました。倒れた塀を起こし、吹き飛んだ板切れ、クギなど拾い集め、あり合わせの木切れ、破れトタンなどを打ちつけて造りなおしたのです。

しかし、出来上った板塀は実に不格好で、見るに忍びないほどお粗末かつ貧相なものでありました。まわりから見られると恥かしい思いがするくらいの塀でありました。

ところが、この塀が出来たその日、サナンダ様は、『この塀は光り輝いております。』と言われたのです。

当時（二〇年前）の私には、このサナンダ様の言葉の本当の意味が、『真』が理解できませんでした。しかし、この二〇年余にわたって魂の目覚め、真の目覚めの道を歩み、神様から頂いた使命を果たして参った今日に至り、ようやく判って来ました。あの一所懸命にまこととで修理した、この肉眼には極めて見すばらしく映る板塀を、『光り輝く塀です。』と教えられたサナンダ様の『真』が少しでも判って来たのであります。

新しい世は、マコトの輝き、魂の輝きが見え、魂の輝きにより自から成る秩序で統べられている世界であります。このことにかんしては、たとえばかつてサナンダ様から次のように教えられたことがあります。

『それぞれの遊星には中心者があります。金星では人の形の霊的に進んだ方です（本書181頁）。』

ここで「魂の輝き」ということにかんしまして、少々「皇室のワンダラー」と「日本の使命」のことについてお話ししたいと思います。



### 皇室のワンダラーについて

日本の現天皇陛下は、実に神聖にして偉大な御魂みたまのお方であります（本書112 181頁）。古い地球にピリオドを打たれ、新しい地球へバトンbatonを渡されるという大きなご使命を持たれてこ

の地球に降りられたお方です。魂の輝きも見えない混迷の古い地球にあって、沢山の大きな苦難を受けられて古い地球に終止符を打たれるお役をなさるお方なのであります。

今の古い地球では魂の輝きを見ることの出来ない方々が大半ですので、多くの人達が天皇陛下のことをと、やかく申しますが、やがて必ず判る時が来ます。

明仁皇太子殿下のことは、本書一八二頁に次のように述べられています。

『日本の皇太子殿下は「神様の席の方です。」とサナンダ様は語られた。そして、新時代にそなえての使命を持って地球に降りられたお方であり、その使命は「カアハミテス」であると宇宙語で語られ、その意味は「今（一九六〇年）は語れないのです。」と、時期尚早ということであろう。しかし、これらのことは時が来れば判ることであろう。』

そして、こう語られてから十七年の歳月を経て、「オイカイワタチ」別冊(二)二九頁「第二章 新しい世の王を頂く」に書かれております通り、明仁殿下が新しい地球の「霊の世界」における中心者となられる即位の儀式(新しい世を統べられる王を奉戴する儀式)が一九七七年(昭和五二年)一月三〇日に行われたのであります。

さらに、一九七七年七月七日、明仁殿下が「新しい地球、鏝球王国」の「たましいの世界」における中心者として即位される儀式が行われたのであります(別冊(三)134頁)。

即ち、このような経過によって、これが、つまり、新しい世の中心者となられるというこ

とが「カアハミテス」の意味であると判って来たのであります。

美智子妃殿下は、魂ではアトネ様(天の神様のお使いをなさり、今回の地球では、サナンダ様と共に中心的な役割をなさっている金星における偉大なお方)のお姉様にあたるお方で、金星における名前を『サリナ』といわれる。皇太子妃となられるべく金星よりお降りになられた偉大なみたまのお方です(本書182頁)。

浩宮様は、「新しい地球、鏝球王国」の皇太子として誕生(生まれ変わり)されているのであります。

また、ご皇室のワンダラーのことが出ましたので、ここで、「十六皇子昇華の儀式」のことを併せて申し上げておきましょう。

と申しますのは、この儀式は昨年(昭和五四年)一月二日に九州阿蘇の幣立神宮(日の宮)において行われたのですが、御承知のように「完」は昭和五三年一月二六日の「古い地球、古い世の葬送の儀式」をもって終わっております。そこで、ご皇室の話が出ましたこの機会に、未発表のこの儀式のことを申し述べておこうと思うのです。

十六皇子とは、神代の御世、日本の天皇の皇子(金星の高天原よりご降臨になられたみたまの方々)として、地球の全世界、十六方位に派遣され、その地を統べる中心者として守りにつかれていた十六人の皇子のことです。

しかし、この地球においては、これまでの「世の終わりの戦い」が全て「失敗の世の終わりの戦い」となってしまったため、全世界十六方位におられる十六皇子のみたまは皇国（日の本）に帰ることが出来ませんでした。さらにはこの永い永い年月のうちに、皇子の中には、その地で眠りに入ってしまった方もあったのです。

ところが今回、初めて「正しい世の終わり」を迎えることが出来ることになり、そのため、永い永い間、お動きになることも、お帰りになることも出来なかった十六皇子のみたまは、ここに目覚められ、立ち上がられて、日の本の国にお帰りになることが出来たのであります。昨年（昭和五四年八月下旬～九月上旬頃にかけて）、米国で四ヶヶ国の宗教者が集まり、「全世界宗教者会議」が開かれました。この会議は現象面では宗教者の集まりということになっていたのでありますが、実はこの十六皇子に深い関係を持つものだったのです。つまり、この会議には、全世界十六方位より、十六人の皇子のみたまが、世界各国の宗教者の肩に乗って集まられたのであります。

この会議には、日本からも「古来神道」を代表してK氏が出席されておられました。そして、十六皇子のみたまはそれぞれ各国の代表者の肩からこのK氏の肩に移られ、K氏と共に日の本の国に帰られたのであります。つまり、K氏のお役は、米国の宗教者会議に集まられた十六皇子を日の本の国までご案内して来ることであったのです。

このようにして日本に帰られた十六皇子のみたまは、K氏の肩からさらに宗像三神と幣立神宮に深い神縁を持たれるSさんに移られました。Sさんには、K氏より十六皇子をお迎えして、天孫降臨の地、幣立神宮（日の宮）へご案内し、ご帰宮とお鎮りを頂く「神祇（儀式のこと）」をなさるお役があったのです。

Sさんと私達ワンダラーとは、これまでほとんど関係がありませんでした。たまたま昨年（昭和五四年）七月、幣立神宮にて私達はある「宇宙の儀式」を行いました。丁度そこへSさんも参宮されておられ、宮司さんの紹介で三〇分ほどお話を交したただけだったので。

このSさんがK氏のところへ十六皇子のみたまをお迎えに行かれた時、次のような靈感を受けられました。

「宇宙惑星（金星のこと）の十六皇子のみたまをゆさぶり、目覚めさせて、全世界十六方位の外国の国々より、日の本、日の宮（幣立神宮）にご帰宮いただくことが出来るのは、オйкаイワタチの働きによるものである。」

このような経過で、昨年（昭和五四年）一月二一日、幣立神宮にて、Sさんらによって「全世界十六方位より帰宮されし十六皇子元座帰宮の神祇」が行われたのです。

そして、この日、私達ワンダラーは『十六皇子昇華の儀式』を幣立神宮で行ったのです。

『昇華の儀式』とは、十六皇子が日の宮（幣立神宮）より金星の高天原に昇華され、天の神

様より新しい地球、鏗球王国での新しいご使命を頂かれ、再び地球に降りて来られる儀式であります。

そして、実は、この儀式が行われたことにより、古い地球（形の世界）は終末の期を迎えたのであります。

### 日本の使命について

さて、ここで地球の霊的中心の国であります日本の使命について少し申し上げます。このことは、本書一一六から一一八頁に書かれておりますが、改めてお話しすれば、次の通りです。

神様が宇宙を創造され、さらに各遊星をお創りになります。その各々の遊星には、神様がお降りになる場所、「湧玉の儀式」、「祝事の儀式」が行われる聖なる場所があるのです。その場所は、宇宙に存在するどの遊星にもあって、永遠に変わらない神様の降りたもう地、神聖たるべき地であります。そして、この地球においてはこの聖地が日本にあるのです。

金星の長老サナンダ様は日本の使命について次のように語られました。

『（日本は）永遠に神様の降りたもう地、今までも降りられたのです。』

『日本は神様を崇めることが役目です。ワンダラーが多いのは、神様を守るためです。ワンダラーは、生きている天の使いです。』

この意味において、日本の地は地球創造の時から既に約束され、定められた神聖な地なのであります。これは、相対的な意味からではなく、絶対的な意味からそうなのであります。したがって、これを早合点して日本人独尊の意味に取ってはならないのです。また、過去にあったごとき日本神国論とも全く違うのです。たとえば私達年配の者の経験を申しますと、私達は、昔、日本人は天孫民族であると教えられました。そして、そこから生じた歪められた神国論が正当化されたことがあったのです。そこで、この問題（日本人が天孫民族であること）について、サナンダ様に問うたことがありました。すると、その答は次の通りでした。

『日本の地にはいろいろの遊星からやって来ましたが、たびたび来ては、たびたび駄目になるのです。』（オリオン、ルシファアの誘惑に負けて駄目になったのであろう。）

このサナンダ様のお答えからしても、地球にとって重要なのは、聖地のある日本の地そのものであって、日本人のすべてが天孫民族であるという戦前の考え方は誤りであったことがおわかりいただけると思います。

だから、この意味において、私達が日本を神聖な地であると申しますのは、戦前日本で喧伝された神国論とは全く位相の違うものであります。

地球という遊星を神が創りたもうた悠久の昔から、日本は神様の降りたもう地であり、あ

る重要な役目を果たすべき地球の霊的中心の国なのであります。この意味において日本は神聖な地であり、湧玉の儀式、祝事の儀式が行われる時期（世の終わりの時期）にオйкаイワタチとして生まれて来た日本のワンダラーは、外国におけるワンダラーとは役目も異なり、ある重要な意味を持つのであります。

オйкаイワタチとして生まれた日本のワンダラーが、地球のカルマに目覚めて、神様がなさる儀式（聖戦）に参加して、地球のカルマを解くことによって、その遊星が良く高く変わるか（正しい世の終わりとなるか）、

それとも、地球のカルマが全部解けずに残ったため、災害や、戦争によって、地球の破滅による世の終わり（失敗の世の終わり）が来るか、

この二つのいずれかに決まるのです。それは日本に生まれてきたオйкаイワタチの肩にかかっているのであります。

（オйкаイワタチとは、オйкаイワタチの役をするワンダラーのこと。）

『神様の儀式』即ち、「湧玉の儀式」、「祝事の儀式」が完全に行われれば、カルマが全部解けるため、その遊星の人々は一人残らず救われます。これは現象界に限らず、地球の幽界、霊界においてもいえることであります。その遊星自体が一進化を遂げることにより、地球全体の周波数が上り、愛と調和に満ちた、喜びにあふれる神の世へと変化するのであります。

す。

以上申し上げました「皇室のワンダラー」と「日本の霊的使命」については、たか、カルマに覆われた古い地球では、真が判らず、輝く魂を見ることが中々出来ませんので多くの方々にはこれまで理解されませんでした。しかし、新しい世ではこれらのことは全て明らかとなり、万人に理解出来るようになるのであります。

「皇室のワンダラー」、「日本の使命」のことはここで終わります。話を本題に戻して「新しい世の建設」について申し上げます。



### 新しい世の建設とは

新しい世の建設とは、古い世の「良いこと」と思われていることを残し、「悪いこと」と思われていることを浄化して作られて行く世界であると思っておられる方があるかも知れませんが、それは間違っているのです。

新しい世は「0」から「無」から出発するのです。これまでの「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」において、新しい地球が創られていくにあたっては以前の古い地球のも

のは一切引き継がれておりません。すべて「無」から、「0」から、完全に新しく創られて来たのであります。このことは「オイカイワタチ」の全巻を通じて記述されております。

したがって、「形の世界」においても、当然、新しい世は、古い世のものを全部捨て去って、「0」から、「無」から創られて行くのであります。

この「形の世界」の新しい世の建設は万たるワンダラーの手によって成されるのであるとこれまでの話で度々申し上げましたが、この建設は、ノミやノコギリ、カナヅチ、材木等を用いてなされるのではなく、万たるワンダラーの「真の目覚め」、「魂の目覚め」、「真我の目覚め」、「生まれ変わり」によって成されるのであります。

アメリカのEさんも、また彼と連絡し合っているアメリカの宇宙人とのコンタクトマンたちも、「万たるワンダラー」の目覚めの手助けをされております。こうして、目覚めたワンダラーによって地上天国を創る働きが進んでゆくのです。この目覚めのための手助けが全世界で只今行われているのであります。

ワンダラーの目覚めは人類の目覚めにつながるのです。

天の神様から与えられた私の使命は、最初に申しました通り、万たるワンダラーの方々に「真」を語って聖火を点火することであります。ですから万たるワンダラーの魂の方々にとっては私のこの「真」の語らいが強い共震となって必ず魂を呼びさまし、心と意識と肉体に

「真の目覚め」、「使命の自覚」を与えずにはおかないと確信します。

こうして万たるワンダラーの方々に聖火が点火されますと、宇宙人がその一人一人の傍で見えない姿で、真の魂に、真の心に、「真」を語りかけられます。万たるワンダラーはその声なき声を聞いて新しい地球、新しい世を建設して行くのであります。

聖火が点火されますと、自分は万たるワンダラーの一人であるという自覚が不思議に心の奥底から湧き上がって来るのであります。

自覚が心から湧き上がって来たワンダラーの方は、新しい地球建設の同志となるべきまだ気付いていない万たるワンダラーを一人でも多く見い出して、「真」を語って下さい。聖火を点火して下さい。貴方が聖火を点火する人になって下さい。一粒万倍です。

『まず、生命を賭して使命を遂行する覚悟と準備が自分にできたことを示して下さい。そうすれば、みなさんの任務はいますぐ開始されるでしょう〔本書179頁〕。』と宇宙人は語っています。

この任務は自分という「我」がするものではありません。神様を念じて、神様の手足となって働くのです。神様の手足となって働く時、天は必ず貴方に正しい靈感、正しいテレパシーを掛けて下さいます。

新しい世は、たくらみ、はからい、手練手管等々（サタンの行い）のない世界です。した

がって、万たるワンダラーが任務を果たしてゆく場合にも、たくらみ、はからい、手練手管等々を使って行うというのは、完全にサタンの罫わなに落ち入ることになります。このようなものに頼らなくとも、ただ「真」のみを頼りとして進んでゆけば、必ず天の神様、神々様の大きな助けがあるのです。

このようにして万たるワンダラーの方々の「真の目覚め」が成されますと、これにより『レタマヤ（天の神様の大愛）の世の終わり』を行って頂くことが出来るのであります。

さらに申しますと、万たるワンダラーがこれから起こる「世の終わり」の苛酷な変化をその身で体験しながら「真」に目覚める場合と、今ここで「真」を判って目覚める場合とは、これからの重大な使命を果たして行くにあたって大きな差が生じてまいります。といいますのは、「ワンダラーの目覚めは人類の目覚めである。」といわれておりますことからわかります通り、万たるワンダラーの目覚めが遅れば遅れるほど人類の目覚めも遅れ、その苦しみも長びくことになってしまふからであります。

ですから、私は、「真」に目覚める時は今／＼であると申し上げます。

ワンダラーとしての使命を、天の神様から頂いた栄光を立派に果たすか、それとも眠れるワンダラーとなって悔いを千歳に残すか、この二つのうちどちらを選ぶかは、神様も、宇宙人も、だれも強制も命令も出来ないのです。それは貴方の自由意志にまかされているのです。

## 救われるということについて

さて、私は、これまでに、人類はすべて救われることが出来ることになったのであるとくりかえし申してまいりました。同時に、今回の「世の終わりの大変化」では、どこに逃げかくれても、肉体の助かる場所は地球上には一ヶ所もないと申しました。

やがて、かつて沈没したレムリア大陸、アトランティス大陸は、すべてのあがないを終えて、新しい黎明と共に、栄光をもって隆起します〔本書29頁〕。地軸は新しいラタカルタの位置に変化します。このように大変化する地球に、古いカルマを持って逃げかくれる所は一ヶ所もないのです。

では一体、救われるとはどのようにして救われることをいうのかと皆さんは思われていると思います。

このことについて、まず結論を申しますと次の通りです。すなわち、救われるということには、霊的な面と肉体的な面との二面があります。そして、今回の世の終わりでは、全人類がこの二つの面で救われるのであります。

人間は、肉体だけの存在ではないということを知る時に来ています。このことは、ここに

お集まりの皆さんには今更説明の必要はないと思います。充分に知りすぎておられる方々のお集まりだからです。

さて、本書二二九頁には、タンテスという金星人が次のように語っています。

『レムリア大陸の沈没の時は、宇宙人の援助の手はありませんでした。それは地球人自身の学びのためです。その時は生き残った人達はありました。

しかし、今度の地球の最期には、他の遊星に移される人以外は、みな肉体は死にます。他の遊星に移される人は、地球を再建する働きをする人達です。』

他の遊星に移されるとは、宇宙船に乗せられて他の遊星へ肉体で移されることをいいます。

先程、一九六〇年に宇宙人の方々は、『地球に対する対策は、既に万事万端用意は整っています。』と言われていると私は申しました。そのことについて、本書一八三頁には、『私の金星での役目は、その時に、金星に地球から来る人を迎える仕度をしたのです。』と過去形で語られています。

また、別冊(一)二九頁には『S氏は一九七五年(昭和五〇年)四月三日未明、数人の地球人と共にある意識の体で金星を訪れ、地球の人々を迎えるために建てられた宿舎と環境とを確認して来たのである。』と書かれております。

さらに、本書の扉裏には、その時、宇宙船に救われるということが次のように述べられております。

『その日、その時、地球を覆う程に膨大な数の“宇宙船”と“空飛ぶ円盤”が訪れる。地球の人類同胞は、決して慌てたり恐れたりする必要はない。

彼ら宇宙船と宇宙人は、地球を攻撃に来たのではない、限りなき愛と援助の手を差し延べに來たのである。

彼ら宇宙人は、この太陽系は勿論、別の太陽系からも、他の銀河系宇宙からも、はるばる地球とそこに住む人類を救うために訪れて來たのである。

新しく生まれ変わる地球と人類に対し、愛と真理の時代の訪れを告げるためにやって來たのである。

それは神様の久しく待たれた“約束の時”である。』

ここにあるように、肉体で他の遊星に移されるというのは、新しい地球を再建するためには地球の因子である地球人の肉体を救う必要があるからなのです。

そうでない人達は、肉体という古い着物を脱いで、新しい地球、鏝球王国の「靈界」に宇宙船で移されて、そこに住むのであります。そして、新しい世の若い夫婦の結びによって誕生し、再建にたずさわるのです。

この霊的な救いと肉体的な救いは、いずれも「真」の目から見れば全く同じ救いであって、どちらが立派ということは決してありません。

多くの方は肉体を脱ぐという死の恐怖について心配しています。しかし、これは実は無用の恐れなのです。つまり、「真の目覚め」と「生まれ変わり（カルマを出しつくすこと）」がある段階に至っておりますと、天の神様が死の靈感をあたえて下さるのであります。

この肉体死につきましては、別冊(二)四七頁に次のように述べられております。

『……その変化（新しい自分に生まれ変わることに）には少しの苦しみも痛みもないが、ただ穢きたないもの（カルマ）を身に付けていると、その汚よどれに応じて重くなり（カルマの多い少ないに依じて苦しくなり）、重さが加わって重量感となってしまう（カルマが多いほど苦しさが加わって大きな苦しみとなってしまう）。

その穢きたないもの、汚よどれたものが無くなれば（カルマが出しつくされて綺麗になれば）、軽くなり、フワツと爽やかな感じと共に（新しい自分に生まれ）変わるのである。まわりのすべてのもも同じように変わるのが判る。これがカルマの解けた本来の自分の姿ではないかと思われた。これと言って物が移動したというように変わったのではなく、それでいて全身が変わったと感するのである。あ、このようにして変わったと知って気が付いた時、肉体の死を迎えるのであると思われた。

このようにして全員が気付くのであるが、これに気付くまでには、その人の穢きたないもの（カルマ）を取り除かれて綺麗にならねばならない。この過程（カルマが出しつくされる過程）には人それぞれに早い遅いはあるが、いずれにしても全員が気付くまでこの変化は行われる……。』これが霊的な救いなのであります。

では肉体的に救われるということはどういうことでしょうか。

この場合には、身につけたカルマを出しつくして『あ、このように全身が変わったと知ることまでは、霊的な救いと同様です。しかしそういう方の中で、新しい地球の建設のために肉体をもって働く使命の方は肉体的に救う必要があるのです。カルマの解けた地球人の肉体の因子は絶対に残さねばなりません。したがって、このような方々は、肉体のまま宇宙船に助けられて、一時他の遊星に移されるのであります。

やがて古い地球の地軸の位置（ライマカタの地軸の位置）は、新しい地球、神の国鏢球王国の地軸の位置（ラタカルタの地軸の位置）に変化し、この大変化によって古い地球は大浄化され、新しい地球に生まれ変わります。

やがてこの大変化が治まると、肉体的に救われた人達は、他の遊星の人達の援助によって、この生まれ変わった新しい地球に降りて来るのです。そして、他の遊星の人達の沢山の援助を受けて地球の再建が始まるのです。その時、もうここは地上天国、神の国なのであります。

このように、靈的に救われるにしても、肉体的に救われるにしても、身に穢きたないもの（カルマ）を付けておきますと、カルマが出しつくされるまでは肉体死の靈感とは与えられません。また、カルマを付けた肉体のまま宇宙船に救ってもらうことも出来ないのです。なぜならば、新しい地球は、古い地球のカルマを一滴たりとも引き継がないからであります。その理由は前に度々申しました通りです。

これまでの説明で、新しい地球、新しい世の建設の使命を持たれた方たるワンドラーの方々が「真に目覚め」、「魂に目覚め」、「真我に目覚め」、「生まれ変わる」ことが、そのまま使命が果たせることであるという「真」をご理解頂けたものと信じます。

### 最後の最後まで、のんきを大切に

これからはいろいろなことが起こるでしょう。驚天動地のことが起こるでしょう。しかしいかなることが起こっても、ワンドラーは最後の瞬間まで神様を信じて、心の礼儀をもって、のんきの心を失わず、迷う多くの人達に「真」を語って頂きたいのです。

これは非常に大切なことです。世の終わりが来たからといって、これからの日常生活が乱れたり、投げやりのになったり、騒いだり、慌てふためいたりすることがあっては絶対にありません。目覚め、気付いた方々は、この時こそ、まわりに「真」を語り、範を示し、日常生活をしっかりと充実させ、素朴に、質素に暮し、最後の瞬間まで生命を大切に生きて抜くことが極めて大切であります〔完25頁〕。

心の礼儀とは、受ける靈感を、節度、忍耐、敬虔な心をもって受けることであります。のんきの心とは、ただのんびんだらりとした浮いたのんきではありません。身も心も静かに、真剣に世の動きを見て想い、思い、考え、のんきの心に心の礼儀を持って日々を送るのあります〔本書97頁〕。

のんきには浅い段階から深い段階に至るまでの沢山の意味がありますが、何れも大切です。そして、最高ののんきは神様を本当に信じ切る心であります。

かく申します私は、皆様より秀いでた特別の者では決してありません。皆さんと同じであり、これから進む道において、のんきをさらに身につけて、のんきを大切に、万たるワンドラーである皆さんと一緒に進んで行くのであります。そして、皆さんと共に、身に持つカルマをいかに苦しくとも「真」で解いて行くことに専心努力する一人であります。

のんきの心を最後の最後まで大切にして進んで行きましょう。

地球が高く変わるといふことは宇宙の進化でもある

かくして地球は「レタマヤ（天の神様の大愛）の世の終わり」を迎えるに至りました。しかし、地球が高く変化するといふことは、地球と地球人だけの喜びではないのです。宇宙の喜びでもあるのです。

吾々の太陽系の中にたか、かるカルマに覆われた地球が存在しているといふことは、吾々の太陽系のカルマです。

ですから地球が高く変わることは、吾々の太陽系が高く進化することであり、さらに島宇宙が、大宇宙が一段階進化することでもあります。これは大宇宙の喜びであり、宇宙最高神の天の神様の御喜びであります。

今回の世の終わりにおいて地球が高く変わるということには、このように大きな宇宙的意味があるのです。この意味からしても、現象の世界の終末の期を迎え、最後の決戦である大切な使命をこれから果たされる方たるワンダラーである皆さんの責務は極めて重大であると言わねばなりません。

### 書籍「オイカイワタチ」の使命

書籍「オイカイワタチ」の使命は（また同様本日の講演会の使命は）、万たるワンダラーに「真」を語るることによって目覚めの手助けとなるという点にあります。つまり、万たるワンダラーを探して、使命に目覚めさせ、ワンダラーとしての正しい道を歩む助けをするのです。ですから、「真」に目覚められたワンダラーの方々は、これから一人でも多くのワンダラーを探して下さい。その場合に良き縁をつくるためにも、書籍「オイカイワタチ」は良き助けになるものと確信します。

しかし、不必要な混乱を避けるためにも、「真」の判らない不用意の方々に語ることは、語れる時が来るまで待つことが大切です。ここに、書籍「オイカイワタチ」が「万たるワンダラーに捧げる書」であるという意味が判って頂けると思っています。

此の小冊子も、万たるワンダラーを探がし、目覚めを促がし、使命を自覚させるための手助けとなると信じます。「真」の判る方にお勧め下さることを切望します。

これは、過日（一月三〇日付）送られて来たSという一七才の高校生からの手紙です。拝啓、僕は人類救済のために自己の精神進化に努力している者です。僕の知人にJさんと

いう方がいまして「オйкаイワタチ」について紹介してくれました。その内容の神聖さと、その奥に隠れている真のメッセージに心が震えました。まるで今まで捜し続けてきたものにやっと出会ったという感じでした。きっとこの書との出会いは僕にとって運命的なものになることでしょう。それまでは、自分はいったい何のために、この世に生まれて来たのかと、いつも疑問に思っていました。というのは、何かになりたいとか、何かをやって楽しみたいとか、何かがほしいとか、そういった欲がまるでないのです。

ただ、地球人類の危機に、命を神に捧げてでも救いたいと願っていました。そして僕的心中には、使命のようなものが、いつのまにか姿を現わしていました。——中略——

最近はず知とかテレパシーの能力が自然に増大しています。霊的体験も何度か起こりました。Uさんは、僕も万たるワンダラーの一人でしょうと言ってくれましたが本当でしょうか。

僕が「オйкаイワタチ」の存在を知ったのは偶然のいたずらとは思えません。是非とも手元におきたいので「オйкаイワタチ」全四巻をお送り下さい。何度も読む事を誓います。

一九八〇年一月三〇日

S (一七才)

オйкаイワタチ出版会

渡邊 大 起 様

このように、年令を問わず「オйкаイワタチ」の「真」の判る方々が急速に驚くほど増加

しております。

どうか書籍「オйкаイワタチ」の文章、文字、ストーリーなどに囚われなくて、奥に流れている、真似の出来ない、魂を語る、この「真」が判るまで何度も繰り返し読んで頂きたいと再度お願い申し上げます。

## 終わりにのぞみ

一九八〇年の幕開けと共に、最後の決戦である現象の世界の終末の期を迎えました。同時に新しい地球、神の国の建設が始まりました。この決戦に臨んでは、万たるワンダラーは「力」で戦うのではなくありません。「真」で戦うのです。神様の手足となって戦うのです。絶対に勝たねばならない戦いがあります。

あとはすべて万たるワンダラーの双肩にあります。この真実を万たるワンダラーである皆さんに伝えるのが私の使命であります。

今日は「万たるワンダラー」の方々に聖火を点火する儀式でありました。

これまでに申し上げましたことはこれから必ず実現することであると最後に申し上げて話を終わります。本日は長時間のご静聴を頂きまして本当にありがとうございます。

## 後記

この小冊子のもととなった「オイカイワタチ大講演会」は、一九八〇年の二月から五月にかけて、大阪、東京、札幌と日本を縦断する形で行われ、いずれの地にも大成功を収めた。即ち、聖火は今や完全に万たるワンダラーに点火された。

組織を持たない私達には、到底このような大講演会を催すことは不可能である。つまり、これらの講演会は、私達の企画したものでは全くなく、それぞれの地における沢山の「オイカイワタチ」の読者の方々の自発的献身と愛の心の団結で、このように立派に成しとげられたものなのである。（しかも、三つの地において主催して下さった方々は、相互には一面識もない方々であった。）

それぞれの地において参加された方々にはそれぞれの特色があり、また講演の内容もそれに応じた特色があった。しかしいずれの地においても予想を遥かに超えた多数の、しかも熱心な参加者を迎えることができ、特に札幌では当初の予想の三倍を超える人達が参加され、会場を大ホールに移して行われた程であった。

いずれもその地における初めての「オイカイワタチ」の講演会であったが、予想を遥かに上回る素晴らしい雰囲気となり、さわやかな気に満ち溢れたものであったと多くの方々からお讃めの言葉を頂いた次第である。

これらの講演会の開催については、世話人の方々をはじめ、私が一度もお目にかかったことのない多くの方々からも献身的な努力を頂いた。このような沢山の方々のお世話により、これらの講演会は可能となったのである。これらの方々、さらに参加下さった沢山の方々に、この紙面を借りて、深く御礼を申し上げます。

それにもまして、一年半も前から天で約束されていたこれらの講演会が、このように立派に成しとげられたのは、すべてが神様の御業であり、さらに天の方々、宇宙人の方々の見えない姿での沢山の援助があったからである。このことを最後に感謝と共に記しておく次第である。

一九八〇年六月一八日

渡 邊 大 起

附  
年表  
オイカイワタチの歩み  
(概説)

西暦(昭和)	月日	歩
一九七九(54)	三・一〇	「古い地球の大浄化お願いの儀式」 北海道有珠山大臼山神社にて行われた。 (第五巻 P 39)
一九七九(54)	三・二〇	「宇宙と古い地球のみそぎの儀式のための準備の儀式」 出雲大社にて行われた。 (第五巻 P 40)
一九七九(54)	三・二六	「新しい風を送ります。」 天照大御神様が語りたもうた。 (第五巻 P 41)
一九七九(54)	四・八	「宇宙と古い地球のみそぎの儀式」 沖縄、ひめゆりの地、湧玉の地にて行われた。 (第五巻 P 48)
一九七九(54)	四・一五	「ひめゆりの、みそぎ」の儀式とエクアドルの儀式とは裏表です。」とのテレバシーを受ける。
一九七九(54)	四・二九	「全世界のみそぎの儀式」 四国、金刀比羅宮にて行われた。 (第五巻 P 54)

年表 オイカイワタチの歩み (概説)

西暦(昭和)	月日	歩
一九七八(53)	一・二・二	地球の「形の世界」(霊界・幽界)における聖戦の続き
一九七九(54)	一・二四	古いワンダラーの身につけた不必要なカルマを真で解く戦い始まる。 (第五巻 P 22)
一九七九(54)	二・二〇	「天照大御神様に聖戦の経過ご報告の儀式」 伊勢神宮にて行われた。 (第五巻 P 29)
一九七九(54)	二・二五	「去り行く古い地球(湧玉の池)を祝う儀式」 富士山の湧玉の池にて行われた。 (第五巻 P 32)
一九七九(54)	二・二五	「彦火火出見尊に聖戦の経過ご報告の儀式」 京都桃山御陵にて行われた。 (第五巻 P 15)
一九七九(54)	二・二五	「彦火火出見尊に聖戦の経過ご報告の儀式」 京都桃山御陵にて行われた。 (第五巻 P 15)

一九七九(54)	一〇・一四	「しめくくりの儀式」 沖繩ひめゆり、湧玉の地にて行われた。
一九七九(54)	一〇・七	午後五時頃、七色の極めて美しい巨大な二筋(重)の虹が、名古屋市内、東方に灰色の雲をかきわけるように鮮かに現われた。 「皇太子殿下ご夫妻のオランダの地における、祝事の儀式」は無事終わった。」とこの虹を見て直感。 (第五卷P 107)
一九七九(54)	一〇・六五 (オランダ時間)	皇太子殿下ご夫妻、オランダの地にて「祝事の儀式」を行われた。
一九七九(54)	九・七	「祝事の儀式」に参加した三人のワンダラーの肉体は日本に帰国せるも、魂はオランダにて皇太子殿下(お迎えして一緒に「祝事の儀式」が行われる。)をお待ちしているのである。 (第五卷P 101)
一九七九(54)	八・三二	オランダにて「祝事の儀式」を行う。 (第五卷P 98)
一九七九(54)	八・二二 と三二	西ドイツ、英国、フランス、ベルギーを経てオランダに入る。

一九七九(54)	五・一三	「地のワンダラーのみそぎの儀式」 (第五卷P 56)
一九七九(54)	七・六	「近江神宮の働きがあります。」とのテレパシーを受ける。
一九七九(54)	七・八	「祝事の儀式のための準備の儀式」 ヨーロッパの地にて行われる「祝事の儀式」のための皇太子殿下との結びと準備の儀式が、九州幣立神宮にて行われた。 (第五卷P 82)
一九七九(54)	七・一一	「ヨーロッパの儀式(祝事の儀式)はフリージアの黄色い花の咲いているところで行います。」とテレパシーを受ける。
一九七九(54)	八・一	皇太子殿下ご夫妻、近江神宮に行啓あり。「時を告げる。」と天より声あり、皇太子殿下との結びが成る時が来たことを告げられた。ヨーロッパの地にて行われる「祝事の儀式」の準備は整う。 (第五卷P 89)
一九七九(54)	八・	「オイカイワタチ」の第一巻と第四巻までが尊き方の御手に渡された。
一九七九(54)	八・二二	「祝事の儀式」にヨーロッパへ出発。

一九七九(54)	一一・二二 一一・二三	「現象の世界」の世の終わりの儀式 「金星の輪の儀式」 「ワンダラー出陣の儀式」	(第五卷 P 118)
一九八〇(55)	一・二七	初めての「オイカイワタチ講演会」が、東京、新宿にて行われた。	
一九八〇(55)	二・二	「エクアドル出陣の儀式」	(第五卷 P 137)
一九八〇(55)	二・一〇	「新しい世の時を告げる儀式」	(第五卷 P 138)
一九八〇(55)	二・二二	「全世界に言霊を鳴り響かせる儀式」	(第五卷 P 139)
一九八〇(55)	二・二四	「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」	(第五卷 P 139)

一九七九(54)	一〇・三〇	この日、皇太子殿下ご夫妻はヨーロッパよりご帰国になられた。	(第五卷 P 108)
一九七九(54)	一一・八	「神様が杖(如意棒のようなもの)を持たれて、こちらに向かって大変な早足で歩いて来られる。」	(第五卷 P 112)
一九七九(54)	一一・二二	「 <sup>こと</sup> 事」は大変早くなりました。それを申し上げに参りました。」と福岡県のSさん来訪。	(第五卷 P 113)
一九七九(54)	一一・二二	「十六皇子昇華の儀式」	(第五卷 P 117)
一九七九(54)	一一・二二	九州、幣立神宮にて行われた。	
一九七九(54)	一一・二二	ここに、形の世界の霊界・幽界での聖戦は終了した。	

地球の「形の世界」(現界)における聖戦  
——現象の世界の終末の期<sup>とき</sup>を迎えた——

一九八〇(55)	六・一四	「変わる幣立神宮を祝う儀式」 九州、幣立神宮にて行われた。 (第五巻 P 148)
一九八〇(55)	七・二〇	「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」 神戸、雷声寺にて行われた。
一九八〇(55)	八・三二 <small>(現地時間)</small>	「エクアドルの儀式」 南米、エクアドルにて行われた。 (第五巻 P 155)
一九八〇(55)	八・一三	「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」 ロサンゼルスにて行われた。
一九八〇(55)	八・三一	「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」 大阪、大融寺にて行われた。
一九八〇(55)	一〇・五	「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」 東京、杉並区立産業館にて行われた。

一九八〇(55)	三・一 〜五	近江神宮と幣立神宮は古い地球での使命を終えられた。そして新しい世の神宮として代替わり(生まれ変わり)された。 (第五巻 P 140)
一九八〇(55)	三・一六	「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」 東京、赤城教育会館にて行われた。
一九八〇(55)	四・二九	「新しい世の新しい近江神宮を祝う儀式」 近江神宮にて行われた。 (第五巻 P 143)
一九八〇(55)	五・一一	「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」 東京、(財)三康文化ホールにて行われた。 (第五巻 P 144)
一九八〇(55)	五・一七	「たとえ、大切な分身がひっくり返ろうと、心うばわれる時ではありませぬ。」とテレパシーを受けた。
一九八〇(55)	五・二五	「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」 札幌、共済ビル大ホールにて行われた。 (第五巻 P 147)

一九八一(56)	二・二一
一九八〇(55)	一一・二四
一九八〇(55)	一一・三〇
一九八一(56)	一・一一

出雲大社にて行われた。

(第五卷 P 201)

「鏝球王国建設を全世界にこゝ開く儀式」

四国、金刀比羅宮にて行われた。

(第五卷 P 203)

「古い地球の葬送大浄化の儀式」

北海道、有珠山大臼山神社にて行われた。

(第五卷 P 209)

「湧玉の祝事の儀式」

——レタマヤの世の祝事の儀式——

近江神宮にて行われた。

(第五卷 P 242)

一九六〇年に始まった、湧玉の戦いはついに終わりをつげた。ここに明る湧玉、明る地球を天の神様にお渡しすることが出来た。天の神様の命じられた全ての儀式は終了した。よってここに古い地球の「終わる時」が来たのである。「約束の時」が来たのである。

「古い地球の『終わり』の儀式」

天の神様に古い地球の『終わり』(大御業)を行って頂く『お願い』と

一九八〇(55)	一〇・二〇
一九八〇(55)	一〇・二五
一九八〇(55)	一〇・二六
一九八〇(55)	一一・九
一九八〇(55)	一一・一六
一九八〇(55)	一一・二三

「万たるワンダラー、鏝球王国建設の儀式」

沖繩、湧玉の地にて行われた。

(第五卷 P 180)

「万たるワンダラー、高天原の神々様と結びの儀式」

九州、幣立神宮にて行われた。

(第五卷 P 183)

「全世界のワンダラーが立ち上がられました。手をつないで真の道を進みましょう。」

「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」

福岡、今泉会館にて行われた。

「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」

札幌、交通局会館にて行われた。

「万たるワンダラーに聖火を点火する儀式(講演会)」  
名古屋、桜華会館にて行われた。

「万たるワンダラー、新しい地球の神々様と結びの儀式」

# オйкаイワタチ 〔非売品〕 編著者 渡邊大起

オйкаイワタチとは宇宙語である。その意味は……  
 『神様の命を受け、神様の手足となることを一人一人が心に誓って進化の周期の来た遊星（地球）に生まれ変わり、その遊星（地球）を神様の世界とする目的のために身を挺する魂を持った人達（ワンダラー）の集まりである。』（本書115頁）

<b>第1巻</b> (本書) A 5版 235頁	昭和33年から49年までの17年間にわたるワンダラーのこの地球での聖戦の足蹟を記す。 第1部（6章）円盤・宇宙人と来訪の真相／第2部（9章）オйкаイワタチの使命／附の部（2章）宇宙を垣間見ても地球の「無の世界」における聖戦の記録など。
<b>第2巻</b> 〔別冊1・2 合本〕 A 5版 227頁	昭和50年から52年4月までのワンダラーの「世の終わり」と「新しい地球誕生」の戦いの足蹟を記す。 別冊1（3章）は地球の「無の世界」における聖戦。「天の神様、神々を従えて地球に降り給う、など。／別冊2（4章）は地球の「霊の世界」における聖戦。「新しい世の王を頂く、など。
<b>第3巻</b> (別冊3) A 5版 294頁 口絵、カラー 8頁	昭和52年11月までのワンダラーのこの地球での戦いを具体的に記す。 第1部（3章）「鏢球王国の霊の世界誕生、—地球の「霊の世界」における聖戦。／第2部（6章）「鏢球王国の建設、—地球の「たましいの世界」における聖戦など。／附「新しいワンダラーの誕生、
<b>第4巻</b> (完・上) A 5版 297頁 口絵、カラー10頁	昭和53年12月までの聖戦、即ち、「形の世界」の目に見えない霊界、幽界における「世の終わり」と「新しい世の誕生」を記す。 第1部（7章）「万たるワンダラー誕生、「鏢球王国の国造り成る」など。／第2部（2章）「新しい地球、鏢球王国完成、「天孫降臨」など。／第3部（5章）「レタマヤの世の終わり、「エクアドルの儀式」、「古い地球葬送」など。／巻末に年表。
新刊、 <b>第5巻</b> (完・下) (附・講演記録) A 5版 380頁	昭和56年1月をもって天の神様のなさる儀式、即ち「湧玉の祝事の儀式」は全て終了し、「形の世界」の現象界において、いよいよ「その時」が来た。世界中の全ワンダラーが働く本番の時が来た。 第1部（4章）「形の世界」（霊界・幽界）の聖戦終わる「みそぎ」など。／第2部（2章）「形の世界」（現象界）の終末の期を迎える「万たるワンダラー、儀式に参加」など。／第3部「湧玉の祝事の儀式」／第4部「ワンダラーの使命は開始された！」。「形の世界」の霊界・幽界、現象界での聖戦。 巻末に講演記録および年表。
<b>講演記録</b> あなたの使命は開始された！ A 5版 88頁	昭和55年2～5月にかけて、大阪、東京、札幌で行われた「オйкаイワタチ大講演会」の講演記録である。（第5巻の末尾にも全体を収録）真の目覚めと使命の自覚のための助けとなるものである。 世の終わり新しい世の建設を担われる「真」の判る多くの方々—光る魂の方々—への呼びかけに役立つ書である。

発行所 **オйкаイワタチ出版会** 〒486 愛知県春日井市御幸町2の6の18 東海理化販売ビル内

一九八一(56) 一九八一(56)

二・一五 二・一二

天の神様に全世界のワンダラーが、終わりの時、の使命を立派に果たす誓いの『宣言』が行われた。  
 この儀式は、沖繩、湧玉の地にて行われた。  
 (第五巻P 259)

「昇華の儀式」  
 全世界のワンダラー全員が、終わる時、の使命を正しく完全に果たして、魂の故郷に帰り、天の神様の御前で報告できるように『お願い』が行われた。  
 この儀式は、幣立神宮で行われた。  
 (第五巻P 260)

『さあ、皆さん、それぞれに、目標に向かって進んで下さい。』  
 (第五巻P 262)

今、ここに、  
 あなたの使命は開始された!!

完

●「オйкаイワタチ」は第1巻～第5巻の5冊より成っておりますので、この順序でお読み下さるようお願い申し上げます。（途中からでは真意が御理解になれません。）  
 ●上記書籍及びしおりを御希望の方は、「オйкаイワタチ出版会」にお申込下さい。

**オйкаイワタチ 第五巻(完・下)**〔非売品〕

---

1981年6月26日 印刷発行

編著者 渡 邊 大 起

発行所 オйкаイワタチ出版会  
〒486 愛知県春日井市御幸町2の6の18  
東海理化販売ビル内

印刷所 加納印刷工業  
〒461 名古屋市東区水筒先町2-12-29  
TEL052-937-7121

---